

み とま
三 苛 遺 跡 群 2

——第2次・3次調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第477集

1996

福岡市教育委員会

MI

TOMA

三苦遺跡群 2

—第2次・第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第477集



遺跡略号 MTM-2
MTM-3

調査番号 9449
9502

1996

福岡市教育委員会



第3次調査区全景（南から）



旧石器時代出土遺物



SC0001 (東から)



SC0001出土遺物

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による三苦遺跡群からは旧石器時代～中世に至るまでの長期間に渡る多種多様な遺構・遺物が見つかっており、貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は東区三苦7丁目地内における(仮称)和白地区小学校建設事業に伴い、福岡市教育委員会が平成6年度(1994年度)及び平成7年度(1995年度)に実施した、三苦遺跡群第2・3次調査の発掘調査報告書である。
2. 本報告にかかる調査は2年度に渡っており調査次数もそれぞれ異なっているが、同一の事業地内での調査であるため、報告では2ヶ年の調査成果を一連のものと扱っている。報告の章でも特に断らないかぎり、次数の区別は行っていない。
3. 遺構の実測は榎本義嗣、長家伸、池田裕司、屋山洋、中村啓太郎、杉内輝、立石真二が行った。
4. 遺物の実測は榎本、長家、菅波正人、林田憲三、平川敬二、下川航也、また旧石器時代の遺物については吉留秀敏が行った。
5. 製図は榎本、長家、山口謙治、小林義彦、山口朱美、下川航也、戸畠智恵子、八丁由香が行った。
6. 遺構写真は榎本、長家が撮影した。
7. 遺物写真は平川が撮影した。
8. 遺構は各調査毎に遺構全体で通し番号を付け、遺構の性格によって頭に略号を付けて表記した。遺構の略号は竪穴住居(SC)、掘立柱建物(SB)、土坑(SK)、溝(SD)、ピット(SP)である。尚遺構番号は第2次調査0001～0570(欠番有り)、第3次調査1001～1444(欠番有り)である。また第2・3次調査区で遺構番号が重複する遺構が存在するが、基本的にこの場合本報告においては第2次調査の遺構番号を優先させている。
9. 遺物番号は全体で通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
10. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21'西偏する。
11. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
また収蔵番号については、検索時の簡便化を図るために全ての資料について第2次調査の調査番号である9449を頭に付して一括収蔵を行っている。
12. 本書の執筆は吉留・榎本・長家があたり、編集は榎本・長家が共同で行った。

本文目次

I.	はじめに	(長家) ... 1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査体制	1
II.	遺跡の立地と環境	(長家) ... 2
III.	調査の記録	6
1.	調査概要	(榎本) ... 6
2.	旧石器～縄文時代の調査	8
1)	概要	(長家) ... 8
2)	出土層位	(長家) ... 8
3)	出土遺物	(吉留) ... 8
4)	小結	(吉留) ... 11
5)	縄文時代の遺物	(長家) ... 17
3.	弥生時代以降の調査	(榎本・長家) ... 18
1)	概要	18
2)	遺構と遺物	18
(1)	竪穴住居	18
(2)	掘立柱建物	91
(3)	土坑	97
(4)	溝	116
(5)	その他の遺構と遺物	119
IV.	結語	(榎本・長家) ... 120

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1/80,000)	3
第2図	調査区位置図 1(1/10,000)	4
第3図	調査区位置図 2(1/1,000)	5
第4図	調査区グリッド設定図(1/500)	7
第5図	旧石器時代調査区設定図(1/800)	8
第6図	調査区土層図(1/40)	9
第7図	遺物出土状況図(1/200)	9
第8図	旧石器時代出土遺物 1(1/1)	13
第9図	旧石器時代出土遺物 2(1/1)	14
第10図	旧石器時代出土遺物 3(1/1)	15
第11図	旧石器時代出土遺物 4(1/1)	16
第12図	縄文時代出土遺物(2/3、1/3)	17
第13図	弥生時代以降遺構配置図(1/500)	19
第14図	SC0001実測図(1/50、1/30)	20
第15図	SC0001出土遺物実測図 1(1/4、1/3)	22
第16図	SC0001出土遺物実測図 2(1/3)	23
第17図	SC0001出土遺物実測図 3(1/3)	24

第 18 図	SC0001出土遺物実測図 4(1/3、1/2)	25
第 19 図	SC0001出土遺物実測図 5(2/3、1/2、1/1)	26
第 20 図	SC0002実測図(1/50、1/30)	29
第 21 図	SC0002出土遺物実測図(1/4、1/3、2/3、1/1)	30
第 22 図	SC0004実測図(1/50、1/30)	31
第 23 図	SC0004出土遺物実測図(1/3、2/3)	32
第 24 図	SC0005実測図(1/50)	33
第 25 図	SC0005出土遺物実測図(2/3)	33
第 26 図	SC0006実測図(1/50、1/30)	34
第 27 図	SC0006出土遺物実測図 1(1/4、1/3、1/2)	35
第 28 図	SC0006出土遺物実測図 2(1/3、2/3)	36
第 29 図	SC0007・SC0016実測図(1/50)	37
第 30 図	SC0007出土遺物実測図 1(1/3)	38
第 31 図	SC0007出土遺物実測図 2(1/3)	39
第 32 図	SC0007出土遺物実測図 3(1/3)	40
第 33 図	SC0007出土遺物実測図 4(1/3)	41
第 34 図	SC0007出土遺物実測図 5(1/3、1/2)	42
第 35 図	SC0010実測図(1/50)	44
第 36 図	SC0010出土遺物実測図(1/3)	44
第 37 図	SC0012実測図(1/60)	45
第 38 図	SC0012出土遺物実測図(1/3)	46
第 39 図	SC0013出土遺物実測図(1/3、2/3)	46
第 40 図	SC0013実測図(1/50、1/30)	47
第 41 図	SC0014実測図(1/50)	48
第 42 図	SC0014出土遺物実測図(1/3)	49
第 43 図	SC0015・SC0047・SC0054実測図(1/50)	50
第 44 図	SC0015出土遺物実測図(2/3)	51
第 45 図	SC0016出土遺物実測図(1/3)	51
第 46 図	SC0075実測図(1/50)	52
第 47 図	SC0075出土遺物実測図(1/1)	53
第 48 図	SC1001実測図(1/50)	53
第 49 図	SC1005実測図(1/50、1/30)	54
第 50 図	SC1005出土遺物実測図(1/3、1/2、2/3)	55
第 51 図	SC1006実測図(1/50)	56
第 52 図	SC1007・SC1008実測図(1/50)	58
第 53 図	SC1007出土遺物実測図 1(1/3)	59
第 54 図	SC1007出土遺物実測図 2(1/3、1/2)	60
第 55 図	SC1008出土遺物実測図 1(1/3、2/3)	61
第 56 図	SC1008出土遺物実測図 2(1/2)	62
第 57 図	SC1009実測図(1/50)	62
第 58 図	SC1009出土遺物実測図(1/3、2/3、1/2)	63
第 59 図	SC1010実測図(1/50)	64
第 60 図	SC1010出土遺物実測図(1/3)	64
第 61 図	SC1011実測図(1/50、1/30)	65
第 62 図	SC1011出土遺物実測図(1/3、1/2)	66

第63図	SC1012実測図(1/50)	67
第64図	SC1012出土遺物実測図(1/3、1/2)	67
第65図	SC1013実測図(1/50、1/30)	68
第66図	SC1013周辺構造配置実測図(1/100、1/50)	69
第67図	SC1013出土遺物実測図(1/4、1/3、2/3)	70
第68図	SC1014・SC1015実測図(1/50)	71
第69図	SC1014・SC1015出土遺物実測図(1/3)	72
第70図	SC1016・SC1017実測図(1/50)	73
第71図	SC1018実測図(1/50)	74
第72図	SC1018出土遺物実測図1(1/3)	75
第73図	SC1018出土遺物実測図2(1/3)	76
第74図	SC1018出土遺物実測図3(1/3)	77
第75図	SC1018出土遺物実測図4(1/3、1/2)	78
第76図	SC1019実測図(1/50)	80
第77図	SC1019出土遺物実測図(1/3、2/3)	81
第78図	SC1031実測図(1/50)	82
第79図	SC1031出土遺物実測図(1/3)	82
第80図	SC1032実測図(1/50)	83
第81図	SC1034実測図(1/50、1/30)	84
第82図	SC1034出土遺物実測図(1/3)	85
第83図	SC1035実測図(1/50)	85
第84図	SC1036実測図(1/50、1/30)	86
第85図	SC1036出土遺物実測図1(1/3)	87
第86図	SC1036出土遺物実測図2(1/3、2/3)	88
第87図	SB0091・SB0092実測図(1/50)	90
第88図	SB0091出土遺物実測図(1/3)	91
第89図	SB1023・SB1052実測図(1/50)	92
第90図	SB1053・SB1056実測図(1/50)	93
第91図	SB1058・SB1059実測図(1/50)	94
第92図	SB1060・SB1073実測図(1/50)	95
第93図	SB1023・SB1052・SB1053・SB1056・SB1058・SB1059・SB1070・SB1073 出土遺物実測図(1/3、1/2、2/3)	96
第94図	SK0003・SK0008実測図(1/40)	98
第95図	SK0003出土遺物実測図1(1/3)	99
第96図	SK0003出土遺物実測図2(1/4、1/3、1/2)	100
第97図	SK0003出土遺物実測図3(1/3、1/2、1/1)	101
第98図	SK0008出土遺物実測図(1/3)	102
第99図	SK0021・SK0022出土遺物実測図(1/3、2/3)	102
第100図	SK0021・SK0022・SK0029・SK0030・SK0050・SK0051実測図(1/40、1/30)	103
第101図	SK0029出土遺物実測図(1/4、1/3)	104
第102図	SK0030・SK0050・SK0053・SK0061・SK0063・SK0071・SK0082出土 遺物実測図(1/1、1/3)	105
第103図	SK0074出土遺物実測図(1/3)	105
第104図	SK0053・SK0061・SK0063・SK0071・SK0074実測図(1/40、1/30、1/20)	106
第105図	SK0082実測図(1/40)	107

第106図	SK1021・SK1025・SK1029・SK1054・SK1057実測図(1/30)	108
第107図	SK1025出土遺物実測図(1/3、2/3)	109
第108図	SK1029出土遺物実測図 1(1/3)	110
第109図	SK1029出土遺物実測図 2(1/3)	111
第110図	SK1057出土遺物実測図(1/3)	112
第111図	SK1062・SK1065・SK1069・SK1071・SK1181・SK1209実測図(1/30)	113
第112図	SK1062・SK1065・SK1209出土遺物実測図(1/3、1/2)	114
第113図	SD0045・SD0068・SD0079・SD0080・SD0085実測図(1/20)	116
第114図	SD0045・SD0079・SD0085出土遺物実測図(1/3)	117
第115図	SD0068出土遺物実測図(1/3)	118
第116図	SP1387及び出土遺物実測図(1/20、1/2)	119
第117図	その他の遺物実測図(1/3、1/2、2/3)	119
第118図	出土土器変遷図(1/12、1/16)	121
付図	調査区全体図(1/200)	

図 版 目 次

巻頭図版1 第3次調査区全景(南から)

巻頭図版2 旧石器時代出土遺物

巻頭図版3 SC0001(東から)

巻頭図版4 SC0001出土遺物

- | | |
|--------------------|---------------------------------|
| (1) 第2次調査区全景(北から) | (2) 第2次調査区中央部分(東から) |
| (3) 第3次調査区全景(南から) | (4) 第3次調査区南半(西から) |
| (5) 第3次調査東側全景(北から) | (6) 旧石器時代調査区全景(南から) |
| (7) グリッド出土状況 | (8) SC0001竪(東から) |
| (9) SC0001竪(東から) | (10) SC0001滑石出土状況(東から) |
| (11) SC0002(東から) | (12) SC0004-0012-0075-1005(東から) |
| (13) SC0004竪(東から) | (14) SC0075滑石臼玉出土状況 |
| (15) SC0005(東から) | (16) SC0006(南東から) |
| (17) SC0007(南東から) | (18) SC0013(東から) |
| (19) SC0014(北東から) | (20) SC1005(北から) |
| (21) SC1005竪横断面 | (22) SC1007-1008(東から) |
| (23) SC1008竪出土状況 | (24) SC1009(東から) |
| (24) SC1011(東から) | (26) SC1012(北から) |
| (27) SC1013(東から) | (28) SC1015(東から) |
| (29) SC1018(東から) | (30) SC1019(南から) |
| (31) SC1036(北から) | (32) SC1036完掘後(東から) |
| (33) SB1052(東から) | (34) SB1060(西から) |
| (35) SK1029(北から) | (36) SK1062(西から) |
| (37) 出土遺物 I | (38) 出土遺物 II |
| (39) 出土遺物 III | (40) 出土遺物 IV |

I. はじめに

1. 調査に至る経過

九州の中心的都市の一つである福岡市は、都市規模の拡大に伴い宅地開発の波を都心部から市街地周辺部に広げていっている。東区についてもその例外ではなく、副都心計画が推進されている香椎地区を核として宅地化が急速に進んでおり、なかでも三苫・和白地区は市内でも一、二を争うほど人口の増加率が著しい場所である。この為同地区には学童数の増加に伴い小学校建設の必要性が高まり、仮称「和白地区小学校」の建設がすすめられることとなった。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である三苫遺跡群に含まれており、これに先立ち福岡市教育委員会施設部用地計画課長より平成6年5月17日付け、教施第160号により教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛に事前審査についての依頼が行われた。これを受けて埋蔵文化財課では平成6年6月2日に対象地16,500m²について試掘調査を行い、このうち約6,000m²で造構の存在を確認した。このため取扱いについて埋蔵文化財課、用地計画課および用地計画課より委託を受けて用地の取得・工事をおこなう福岡市土地開発公社造成課の三者で協議を行い、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査をおこなうことと合意を得た。

また調査の日程については、小学校外周道路の工事を先行させる必要からこれにかかる部分の調査を平成6年度中に行うこととし、その他の地区については平成7年度当初から調査を行うこととした。

2次調査は外周道路にかかる部分で調査面積は1,211m²である。調査期間は平成6年11月7日～平成7年1月20日である。3次調査は校庭部分にあたり、調査面積2,260m²、調査期間は平成7年4月3日～平成7年7月31日である。

本書では2次調査と3次調査の成果について併せて報告するものである。

なお現地で作業を行うに当たっては、地元の方々には埋蔵文化財発掘調査についてご理解・ご協力を頂きました。また福岡市土地開発公社造成課及び教育委員会用地計画課の方々にも様々にご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学(平成6年度) 荒巻輝勝(平成7年度)

第2係長 山崎純男(平成6年度) 山口謙治(平成7年度)

調査庶務 第1係 入江幸男

調査担当 第2次調査(平成6年度) 横本義嗣 第3次調査(平成7年度) 加藤隆也・長家伸

調査作業 岩隈史郎 篠崎伝三郎 高木誠 春田城二 松崎幸子 山下真由美 姫野利恵

東島慶子 橋本良子 中村紗世美 柴田栄子 馬崎千登美 岩崎良隆 小川秀雄

芹野謙藏 杉内郷 立石真二 稲光清人 小川博 鹿毛賢次郎 小路丸嘉人

竹内征二 村本義夫 脇田栄 池聖子 伊東幾代 稲光裕子 大音輝子 金子二三枝

岸原千秋 木村文子 草場恵子 小池温子 小石佳子 指原始子 高津千尋

立花和子 寺園恵美子 中野満代 中野美穂子 中野裕子 中村幸子 永田優子

花田則子 平本恵子 増田ゆかり 松岡芳枝 森敦子 安元尚子 柳瀬伸 吉村智子

三苫裕子

整理作業 太田次子 戸畠智恵子 小島セツ子 西島信枝 松尾真澄 原田真美 富田智美

II. 遺跡の立地と環境

三苦遺跡群は博多湾の北側を閉ざす海の中道の東側基部、玄界灘に面した第三紀堆積岩によって構成されている海岸丘陵の東側緩斜面に位置する。一帯は立花山・城ノ越山・三日月山等の標高400m以下の低山地から西南方向に分布する香椎・新宮丘陵及び小河川によって開拓された平野・低地からなる。地形的には多く良川以北の丘陵地帯により福岡市中央部から画され市東部地区を形成する。

多く良川流域では多々良遺跡・多々良込田遺跡・戸原麦尾遺跡等の調査が行われている。いずれも多々良川左岸に形成された沖積微高地に形成された遺跡である。戸原麦尾遺跡は平安時代後期の条里地割に伴う溝をはじめとして鎌倉時代を主体とした屋敷地・水田・墓地を検出している。一体は宮崎宮所領の荘園として知られており、荘園内の構造の伺うことができる。多々良込田遺跡では古墳時代の堅穴住居跡及び古代に属する建物群が検出されている。堅穴住居跡からは半島系・畿内系の外来系土器が多量に出土している。また古代に属する遺構群は条里方向に一致する溝内部に掘立柱建物が規格的に配置されているものである。遺物も唐代陶磁器・石器・硯その他多数の官衙的色彩を帯びたものが出土しており、容器類に優品が多いことから客観的な機能が想定され、「夷守駅」の可能性も上げられている。また多々良川流域では既に破壊消滅しているが天神森古墳、名島古墳等の三角縁神獸鏡を有する前方後円墳の存在も知られている。

香椎宮周辺地域では香椎宮周辺に香椎A・B遺跡で調査が行われている。香椎A遺跡では12世紀～16世紀代の掘立柱建物・溝・土坑等の遺構が検出されている。この北側には城ノ越城・立花山城が知られている。立花山城は戦国期を通じて大友氏の家臣が駐屯し、大友氏の博多支配の中心となっていた。現在までの香椎宮周辺部での調査ではおもに中世を中心とした時期の遺構が大半であり、香椎宮となるらかの深い関わりをもっているものと考えられる。また鴨岸部では唐原遺跡の調査が行われている。弥生時代後期～古墳時代前期にいたる大規模な集落跡及び古墳時代後期に属する円墳等の調査が行われた。鉄製釣り針・石鍤等の漁労関連遺物が多量に出土している。また外来系土器が多く出土し、陶質上器も含まれている。多様な外来系土器の出土は該期の博多湾岸に位置する砂丘遺跡に普遍的に見られる現象であり、唐原遺跡もその例外ではなく海を介した幅広い交流の痕跡が認められる。唐原遺跡の南側丘陵上には三角縁神獸鏡を有する香住ヶ丘古墳が知られている。

三苦から志賀島を繋ぎ、玄界灘と博多湾を画する海岸砂丘である海の中道では奈多砂丘B遺跡・海の中道遺跡の調査が為されている。奈多砂丘B遺跡では部分的な調査ながら弥生時代後期以降の遺構・遺物が検出されている。また海の中道遺跡では8世紀後半から10世紀代にかけての大規模な遺構群が調査され、漁労具と共に奈良～平安時代に位置づけられる多くの製塙土器が出土し玄界灘式製塙土器として提唱されている。また輸入陶磁器・銚帶など官衙的様相を示す多くの遺物が併せて出土しており、大宰府との関連の中で理解されている。金印の発見で著名な志賀島では全島的な事前総合調査が行われており、現在まで縄文時代以降の遺構・遺物の存在が知られている。

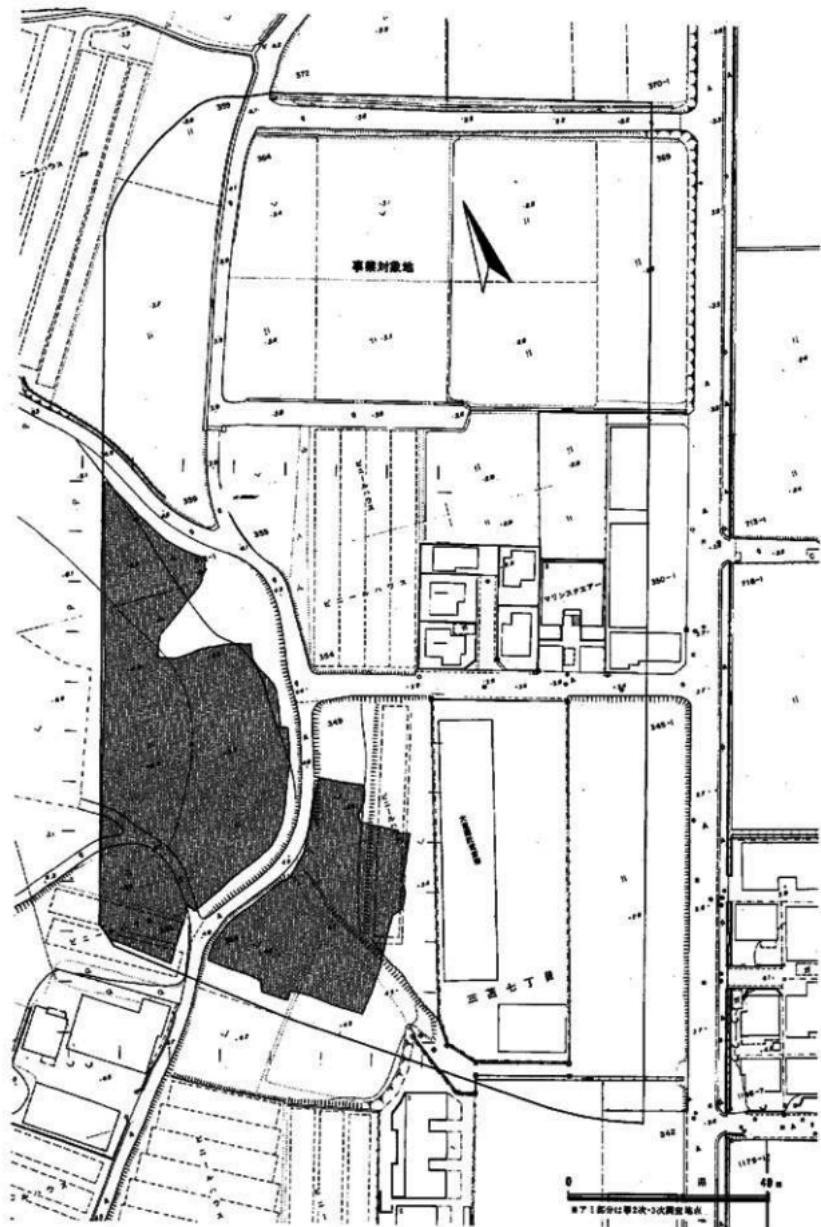
本調査地点の位置する三苦・和白地域では人規模な宅地開発の結果広範囲に発掘調査が行われている。三苦遺跡群から低地を隔てて東側の丘陵上に位置する永浦遺跡では区画整理に伴い大規模な調査が行われ旧石器時代の遺物から弥生・古墳時代を主体とする遺構群を検出した。下和白・上和白遺跡群では旧石器時代～中世に至る遺構・遺物群を検出している。上和白遺跡群では7世紀後半～8世紀代に位置づけられる製鐵関連遺構が検出されている。また下和白遺跡群内に築造されている飛山古墳群からは、堅穴系横口式石室を有する1号墳より上器・鉄器と共に勾玉・丸玉・小玉・滑石製模造品が多量に出土している。本調査における滑石工房の存在と併せ考えると興味深い。



第1図 周辺遺跡分布図(1/80,000)



第2図 調査区位置図 1(1/10,000)



第3図 調査区位置図 2(1/1,000)

III. 調査の記録

1. 調査概要

第2・3次調査区は三苦遺跡群の北西に位置し、調査前の現況は畠地、荒地である。例言、「I. 1. 調査に至る経緯」でも触れたが、両調査区は同一事業地内に隣接して位置しており、調査概要についてもとりまとめて記述する。まず、調査区の立地について試掘時の所見も含めて述べることとする。本遺跡群は玄界灘に面する第3紀層の独立丘陵の東側に位置し、丘陵から東側に向かって延びる舌状丘陵とその丘陵を開析する谷部を包括している。本調査区はその舌状丘陵の1つの端部に近い東側斜面に立地し、南北には谷部が貫入する。今回の事業地に含まれる北側谷部を試掘した結果、水性の砂、シルトの堆積が認められ遺構は未検出に終わったが、谷覆土中から縄文土器、石器を少量採集した。丘陵から傾斜した沖積低地に該当すると考えられる。その谷を挟んで北側に対峙する丘陵の南東斜面の端部では第1次調査が実施され、7・8世紀の集落、中世の溝状遺構が確認されている。また、第1次調査区と同一丘陵の尾根線上には三苦京塚古墳が占地する。本調査区では略中央を東西に横切るように屋根線が位置すると考えられ、該地付近では削平の影響を最も受け、遺構の遺存状況が不良である。丘陵端部は第2次調査区北端から第3次調査区東端に位置する。

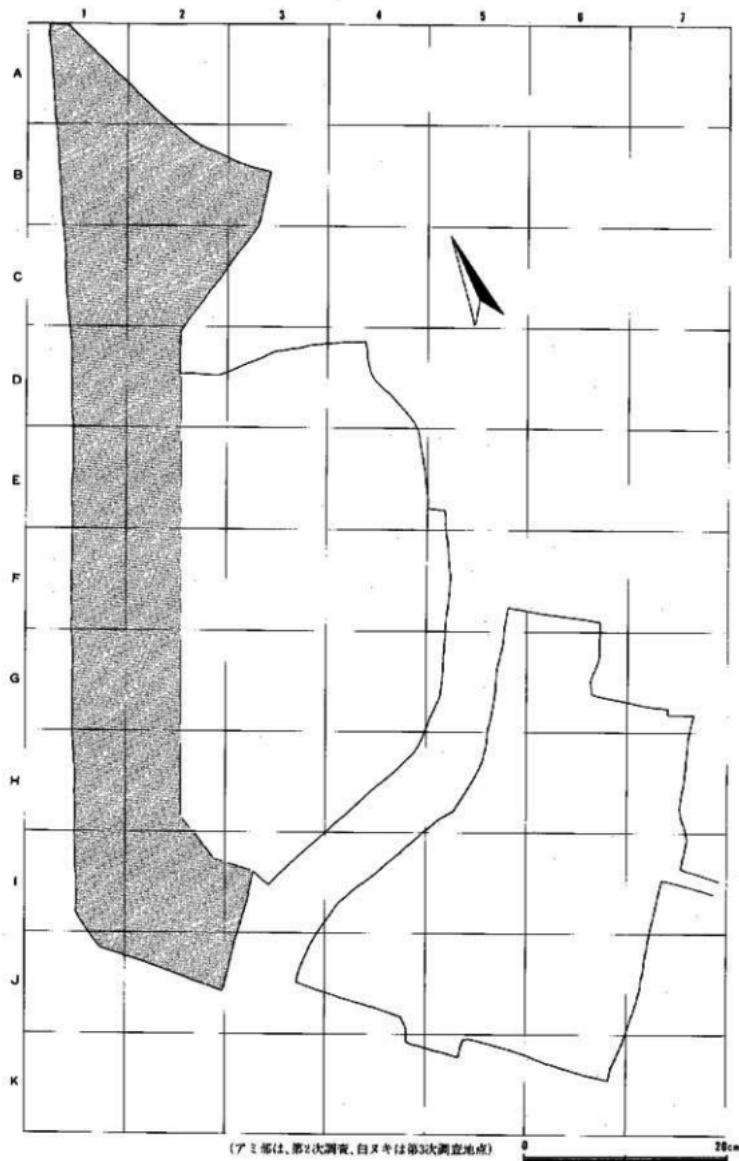
遺構は丘陵を形成する第3紀元層の風化土である淡黄褐色土上面で検出される。丘陵端部付近ではややシルトがかかった土質となる。丘陵頂部付近は表土直下に遺構面が存在するが、東側斜面を主として暗褐色土の包含層が上層にみられ、縄文時代～古墳時代の土器、石器が出土している。第2次調査区の南北では畠地造成時と考えられる段落ちがあり、落ち際は大きく削平を受け淡黄白粘質土が露出する。遺構面の標高は2.0m～6.2mを測る。

遺構は古墳時代の集落が主体で、4世紀末～7世紀初頭の堅穴住居、掘立柱建物、土坑、溝等が良好に検出された。また、南側緩斜面には弥生時代の円形堅穴住居が1軒認められた。他に古代、中世の土坑、溝がある。遺構は丘陵全域に分布するが、頂部を中心とした南北斜面に集中する。特に、今回の調査では古墳時代の滑石製品製作工房跡と推察される遺構が検出され、多数の滑石製品と共に未製品が出土している。また、遺構面とした第3紀層風化土中には旧石器時代の遺物が包含されていることが判明し、第3次調査では該期の調査も実施した。なお、遺構覆土中には縄文時代後晩期の土器が混入しており、今回の調査では明確にできなかった該期の遺構が、周辺に存在する可能性を示唆するものと考えられる。

調査の方法及び報告については両調査区での整合を測るために、まず調査時に同一のトラバースを用い、第4図に示したグリッドを設定した。南北方向は北からA～K、東西方向では西から1～7と呼称し、以下の報告にあたってもこのグリッド表記を統一して使用している。また、例言と重複して述べるが、遺構番号は第2次調査は0001～、第3次調査は1001～を遺構の種別にかかわらず付しており、両調査区での番号の重複はない。なお、両調査区での同一遺構の報告にあたっては、基本的に第2次調査時の番号を優先させ用いている。

第2次調査は事業地の外周道路部分を対象とし、平成6年11月7日に重機による表土剥ぎから開始した。翌日より作業員を投入し、北側部分より調査を開始した。丘陵南側斜面は遺構の重複が著しく、時間を要したが、平成7年1月20日に埋め戻しを行い、調査を終了した。調査面積は1,211m²である。

第3次調査は学校校庭部分を対象として、平成7年4月3日より重機による表土剥ぎを始めた。調査は第2次調査区に隣接する西側部分より調査に着手し、遺構掘り下げの終了した7月上旬からは旧石器時代の調査を行なった。調査面積は2,260m²である。



第4図 調査区グリッド設定図(1/500)

2. 旧石器～縄文時代の調査

1) 概要

第3次調査において、古墳時代に属する遺構の埋土中及び遺構検出面等から細石刃、ナイフ形石器等が出土したため、調査区内に旧石器時代に属する遺物が含まれている可能性が高いと判断した。このため3次調査区内において弥生時代以降の遺構掘削が終了した後、比較的削平の及んでいない南半部分を対象に発掘を行った。

調査区は既に対象地内に設定していた10mグリッドを利用し、これを基準にして設定した2mグリッドを1単位として掘り下げを行った。この際遺物が確認された箇所では分布状況を確認するためグリッドの拡張を行った。この結果全部で32箇所について掘り下げを行い、調査面積は128m²である。

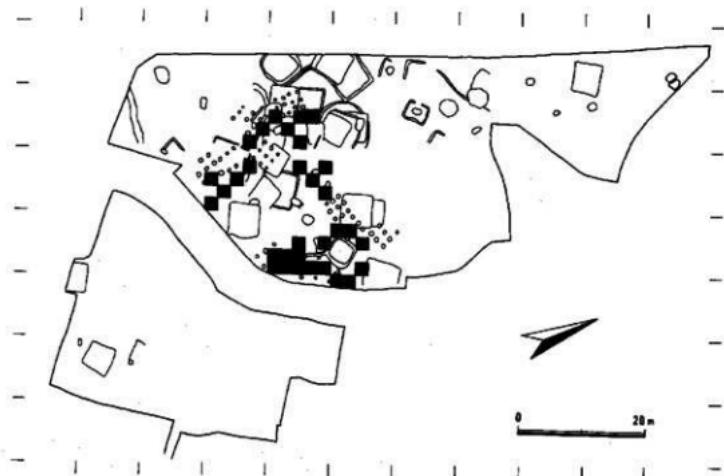
2) 出土層位

本遺跡の立地する丘陵は第3紀層の風化土によって形成されており、厚さ30cm程度の旧表土を除去すると弥生時代以降の遺構面である赤褐色粘質土(1層)を検出する。1層は厚さ20cm～40cmであり、1層中から遺物が出土している。また調査区北半部では1層が削平され下位の層が露出していたため調査は行っていない。以下2層：やや砂っぽい黄白色粘質土、3層：2層よりバサバサする明黄褐色粘質土、4層：更にバサバサし粘性のない青白色粘質土となる。2層以下では遺物の出土はまったく見られなかった。

出土遺物は混入品を含め総数で224点を数えその多くが黒耀石の剝片である。しかし調査によって得られた遺物には良好なものは少なく主体は既に削平されているものと考えられた。また遺物の集中は3箇所において認められた。この中でもっとも広い分布範囲を示したのが東端のブロックで出土数137点で出土総数の半数以上がこのブロックから出土している。

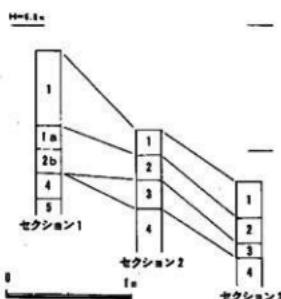
3) 出土遺物

(1) 概要

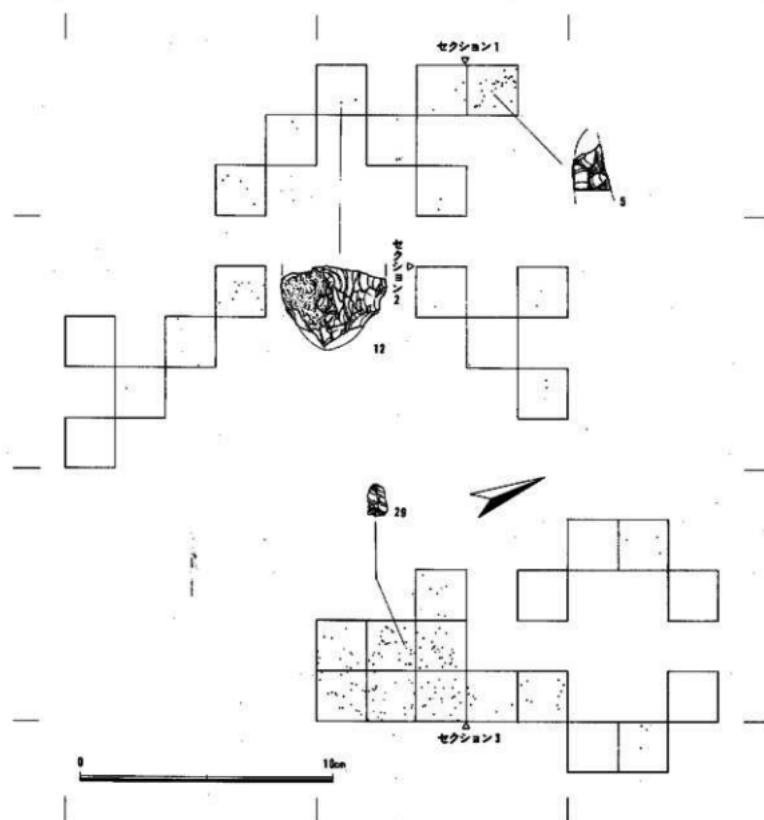


第5図 旧石器時代調査区設定図(1/800)

第3次調査の旧石器時代調査区からは数百点の剥片石器関連遺物が出土した。しかし、前項で述べたようにこの中には弥生時代、繩文時代の遺物が含まれている。このなかで確実に旧石器時代と判断できるものを抽出した結果、21点の石器を得ることができた。また、第2次調査でも包含層や後出する造構内から、8点の旧石器時代の遺物を採集した。ここではこれらを一括して報告する。石器の内訳は剥片尖頭器2点、ナイフ形石器5点、三稜尖頭器1点、削器・搔器4点、細石刃核3点、細石刃9点、剥片4点である。この石器類は組成や形態から見て共伴するとは考えにくい。ナイフ形石器、三稜尖頭器を主とする石器群と、細石刃を主とする石器群に二分されると見られる。しかし、出土状態で区分できないこと



第6図 調査区土層図(1/40)



第7図 遺物出土状況図(1/200)

から以下では、器種ごとに報告する。

(2) 剥片尖頭器(第8図)

1は先端と基部を欠損する剥片尖頭器である。石材は漆黒色の良質な黒耀石である。大型の縦長剥片を素材とし、打点を基部として、その両側に造り出し状の抉りを入れている。先端方向からの強い加熱により先端から右側辺を破損し、かつ基部も腹面側からの圧力により欠損している。現状での長さ5.4cm、幅3.4cm、厚さ1.3cm、重さ23.05gを測る。

2は完形の剥片尖頭器である。珪岩(珪化木)製であり、筋理に沿って剥離した不整な縦長の剥片を素材とする。基部を主に二側辺にプランディングを施す。また、刃部となる右側辺に微細な剥離が認められる。長さ7.5cm、幅2.9cm、厚さ1.5cm、重さ28.11gを測る。

(3) ナイフ形石器(第9図 3~7、第10図 9)

3は右側辺に新しい傷があるもののほぼ完存する小型のナイフ形石器である。半透明黒耀石で、背面に自然面を残す縦長剥片を素材とする。二側辺にプランディングを施している。基部の調整角は甘く、断面三角形になる。長さ2.4cm、幅1.0cm、厚さ0.6cm、重さ1.06gを測る。4はナイフ形石器の基部破片である。漆黒色黒耀石で、幅広の縦長剥片を素材とする。一側辺にプランディングを施している。現状の長さ1.5cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ0.85gを測る。5は先端と基部を欠くナイフ形石器破片である。先端の欠損は新しい。半透明黒耀石で、縦長剥片を素材とする。一側辺にプランディングがある。現状の長さ1.4cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重さ0.67gを測る。6はナイフ形石器の側辺部と見られる破片である。漆黒色黒耀石であり、素材剥片の形状は不明である。側辺部に浅い角度のプランディング様の調整がある。ただし、剥片背面から腹面への、いわゆるインヴァースリタッチとなっており、疑問も残る。現状で長さ2.2cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.44gを測る。7は先端を欠損するナイフ形石器である。石材は漆黒色の黒耀石であり、背面に円礫状の自然面欠損している。現状で長さ5.0cm、幅2.8cm、厚さ0.8cm、重さ9.88gを測る。

(4) 三稜尖頭器(第9図 8)

8は完形の三稜尖頭器であり、三面加工の石器である。良質で透明な水晶を素材としており、剥離調整の觀察が難しい。背面には素材整形時の縦長の剥離が数条見られる。整形剥離は二側辺から施されており、先端の削出は不十分である。長さ4.6cm、幅1.7cm、厚さ1.4cm、重さ11.82gを測る。

(5) 削器、搔器(第10図 9~12)

9は完形の削器である。石材は漆黒色の黒耀石であり、腹面は角礫状の自然面である。素材は剥片残核であり、一側辺を腹面側から調整し、刃部を設けている。長さ4.9cm、幅2.5cm、厚さ1.1cm、重さ11.35gを測る。10は刃部に近い搔器の破片である。基部と先端部を欠損している。明茶色のチャートであり、背面に円礫面を残す剥片を素材としている。右側辺に調整がある。現状での長さ2.5cm、幅2.8cm、厚さ1.8cm、重さ11.58gを測る。11は完形の搔器である。漆黒色黒耀石であり、分厚く幅広い縦長剥片を素材としている。先端から左側辺に小剥離があり、刃部を形成している。刃部は直線的で角がある。長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ1.1cm、重さ5.56gを測る。12は完形である。剥片先端に小剥離があることからここに記す。白色半透明の石英であり、縦横比のほぼ等しい剥片を素材としている。剥片先端は階段状剥離となり、ここに小剥離が見られる。長さ2.7cm、幅2.5cm、厚さ1.1cm、重さ9.06gを測る。

(6) 細石刃核(第11図 17~19)

17は完存する細石刃核である。石材は黑色黒耀石であるが、表面は風化が進んでいる。石核片側(a)面は円礫面のままである。c面は周囲からの石核調整がある。打(d)面は作業面側からの一打で剥出さ

れている。細石刃剥離面は4面の剥離が残されるが、いずれも平板となり、左側の階段状剥離が最終剥離であり、作業を終了している。長さ2.7cm、幅2.1cm、厚さ2.0cm、重さ9.95gを測る。

18は完存した細石刃核である。半透明黒耀石を素材とし、背面は円錐面のままである。打面は二打の調整があるが、約半分は自然面である。細石刃剥離面は最終の二面が認められる。長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm、重さ2.29gを測る。

19は分割した細石刃核である。漆黒色黒耀石を素材とし、背面に自然面をもつ。石核調整は背面に一面見られるのみである。細石刃剥離面から打面両設と見られる。図上の下方からの細石刃剥離後、180°打面転移し、打面調整しているが、一打で階段状剥離となり作業を中断している。石核の分割は下方からの打撃によって発生しているが、これが打面転移の前か後かは剥離の切り合いがなく不明である。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ1.0cm、重さ2.38gを測る。

(7) 細石刃(第11図 20~29)

20は先端、基部を欠く。灰色黒耀石を素材とする。長さ1.6cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.19gを測る。21は先端、基部を欠く。黒耀石を素材とし、左側辺と基部割れ面に微小剥離がある。長さ1.9cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.17gを測る。22は先端を欠き、基部を新しく欠損する。黒耀石を素材とする。長さ1.1cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.17gを測る。24は先端を欠き、基部を新しく欠損する。黒耀石を素材とする。長さ1.4cm、幅0.4cm、厚さ0.1cm、重さ0.07gを測る。25は先端を欠き、打面が残り、左側辺を新しく欠損する。黒耀石を素材とする。長さ1.0cm、幅0.5cm、厚さ0.1cm、重さ0.07gを測る。27は打面が残り、先端を新しく欠損する。黒耀石を素材とする。長さ2.3cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.44gを測る。28は先端を欠き、打面が残り、右側辺を新しく欠損する。半透明黒耀石を素材とする。長さ1.1cm、幅0.5cm、厚さ0.1cm、重さ0.07gを測る。29は完形品である。半透明黒耀石を素材とし、形状から剥離面調整剥片か破片の可能性もある。長さ0.9cm、幅0.6cm、厚さ0.1cm、重さ0.05gを測る。

(8) 剥片(第10図 13~14、第11図 15~16)

13は幅広寸詰まりの縦長剥片である。黒耀石を素材とし、打面、剥離面調整がある。剥離は全て一方向である。左側辺には石核調整剥離がある。二次調整はない。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ2.01gを測る。14は石核調整剥片とみられる。良質黒耀石であるが、風化が進み、石理が観察される。打面、剥離面の調整があり、背面には直交する剥離面が認められる。打面転移直後の調整剥片とみられる。長さ2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、重さ2.56gを測る。15は先端を一部欠損する剥片である。背面にボジ面を残す。打面調整は入念であり、剥離面の調整剥片であり、連続的な横長剥片の剥出が考えられる。長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ0.99gを測る。16は横長剥片である。石材は漆黒色黒耀石であり風化が強い。打面調整は入念であるが、一部に自然面を残す。背面には2面の先行する剥離面があり、打点をずらしながら連続して横長の剥片剥離を進めたとみられる。長さ2.1cm、幅3.2cm、厚さ0.6cm、重さ4.95gを測る。23は縦長剥片の破片である。基部、先端、両側辺を新しく欠損する。半透明黒耀石を素材とする。背面、腹面とともに剥離方向は一方向である。二次調整は不明である。現状で長さ1.2cm、幅0.7cm、厚さ0.2cm、重さ0.16gを測る。

4) 小結

三苦遺跡第2・3次調査で出土した旧石器時代遺物は、数量も少なく、出土状況も二次的な移動が多いために決して良好な資料とは言い難い。しかし、これまで福岡平野より東側における旧石器時代資料は、表面採集資料を主とする少量で断片的なものであった。今回の資料はいわばこの地域では数少ない本格的調査で得られた一括資料といえる。なお、本調査の前年に調査された三苦永浦遺跡 A

地点でも旧石器時代遺跡の調査がおこなわれ、少量の石器資料が出土している。

さて、今回出土した石器類は出土状況からも本来の共伴関係は不明であり、時期や石器群の特徴はそのままでは明らかにし難い。そこで、これまでの当該期研究の成果と比較しながら本来の石器組成や形成時期を推定してみたい。

まず、ナイフ形石器を主とする石器類が挙げられる。ナイフ形石器は黒耀石の縦長剝片を素材とする小型の一群と不定形横長剝片を素材とする大型のものがある。後者は剝片形態はいびつであるものの、前者との形状や石材の差や、基部調整が入念であることから見て、いわゆる「剝片尖頭器」との関連が予測される。また、剝片尖頭器や水晶製の三稜(三面加工)尖頭器もこれらに伴うことは間違いない。

19の細石刃核も背面に自然面を残すこと、石核調整が少ないとことなどから、いわゆる「野岳・休場型」細石刃核の範疇に含まれるものと予測され、船底形の細石刃核が主体となる以前の時期と考えられる。

以上の検討から見て、本遺跡の旧石器時代石器群は前後二期に区分され、この両者は連続しないものと判断される。ここではナイフ形石器段階を1期、細石刃段階を2期とする。

なお、この他に出土した削器・搔器や剝片は、その所属時期が明確でない。このうち比較的厚めの剝片石器である搔器の石材にチャートや石英が利用されること、剝片の打面調整や縦長主体で不整形の横長剝離がみられることから見て、これらは1期に伴う可能性が高いと推定される。

さて、こうしてみると1期の石器群はナイフ形石器、三稜尖頭器、削器・搔器、剝片からなる。こうした器種構成は大分県岩戸遺跡1次調査第I文化層に対応するものであり、市内では有田遺跡第6次調査地点石器群に近く、剝片の形状からやや後出する時期と予測できる。西北九州の当該期の編年研究を進める萩原博文氏による後期旧石器時代中期後半に位置付けられよう。量は少ないが、この時期の石器組成をほぼ備えていることになる。なお、本遺跡における特徴として、大型の器種にチャート、石英、水晶などの珪岩質の石材の利用が目立ち、北部九州西部における輝石安山岩に対応する存在となっている。これらの石材利用の地域性や、その入手ルートの検討も課題となろう。なお、全体を見ると剝片に対する石器の比率は高く、石核、剝片、碎片などの剝片剝離作業を示す資料は少ない。これは北部九州の当該期の一般的な方によく合致している。

2期については、出土資料が少なく細石刃、核以外の石器は不明である。細石刃核で見ると、市内では蒲田遺跡に先行し、井尻B遺跡第2次調査例に近い時期と予測される。遺物量が少ないとことは調査地点が本来の中心地点から離れていたのか、本来長期の居住地でなかったことも考えられる。これらの検討については、未調査の西側丘陵一帯の調査を待ちたい。

なお、三苦地域を中心とする旧石器時代石器群の様相は「三苦永浦遺跡」の調査報告書に詳細を示した。参考とされたい。

【註】

芹沢長介編1976「岩戸」東北大学考古学研究室

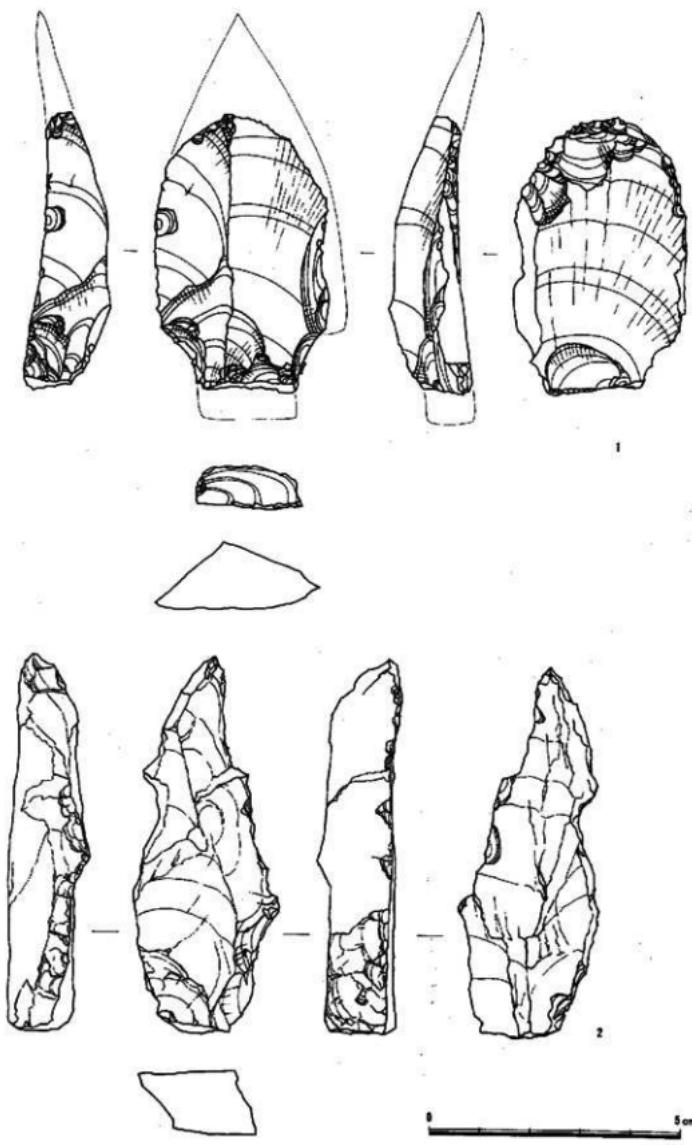
山口謙治・山崎純男他1994「有田・小田部第19集」福岡市教育委員会

橋昌信・萩原博文1983「九州における火山灰層序と旧石器石器群」「第四紀研究」22-3

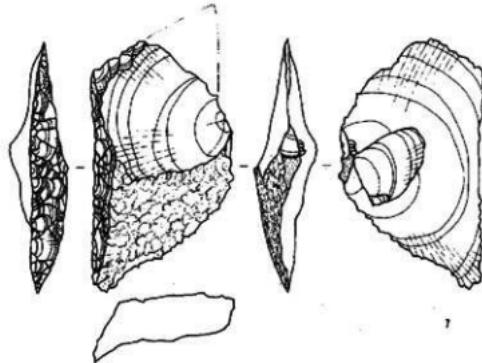
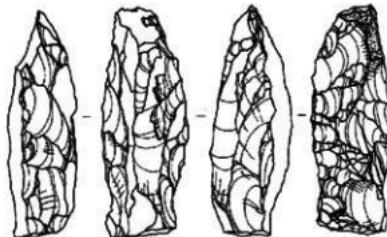
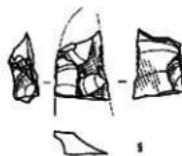
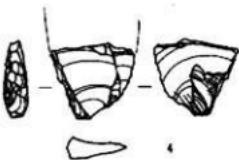
二宮忠司1975「蒲田遺跡」福岡市教育委員会

山口謙治1988「福岡平野における先土器時代の様相」「井尻B遺跡」福岡市教育委員会

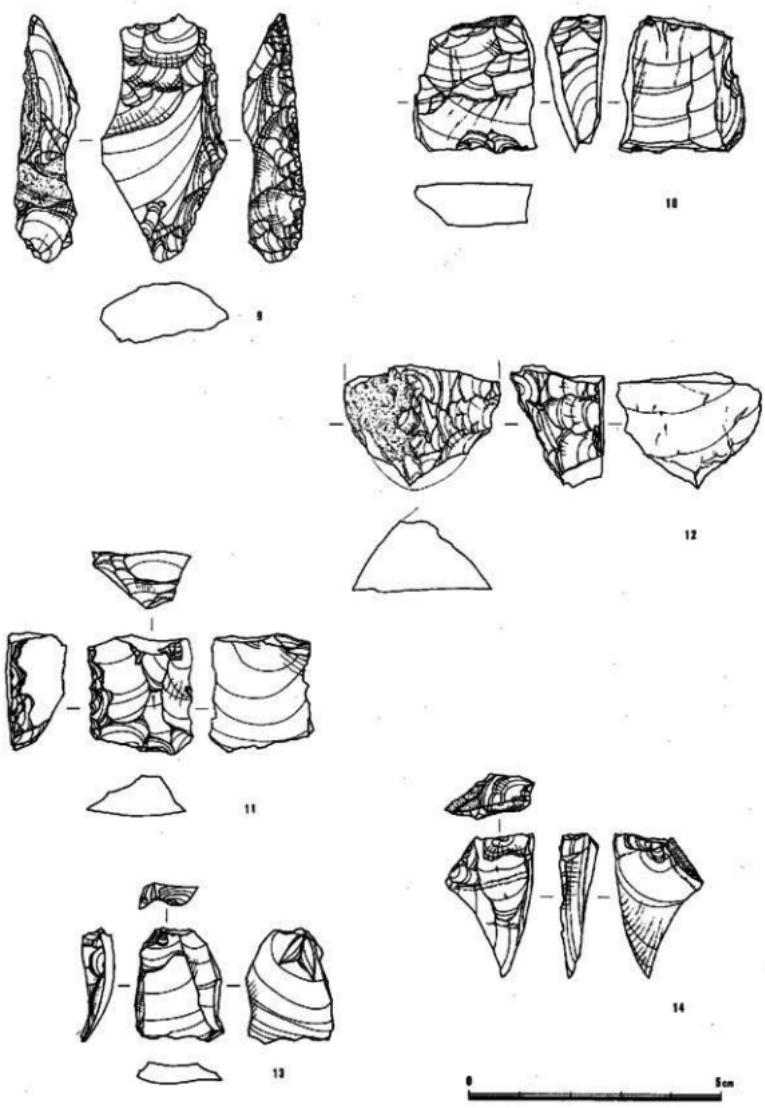
吉留秀敏編1996「三苦永浦遺跡群」福岡市教育委員会



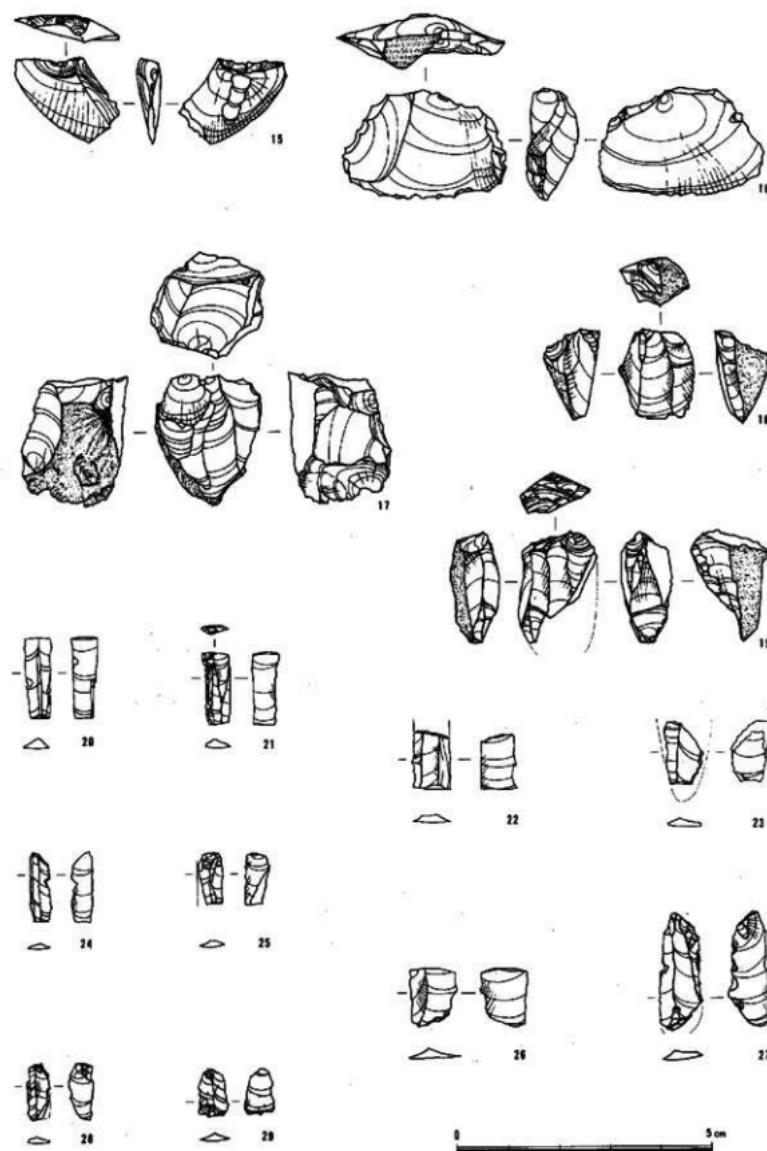
第 8 図 旧石器時代出土遺物 1 (1/1)



第9図 旧石器時代出土遺物 2 (1/1)



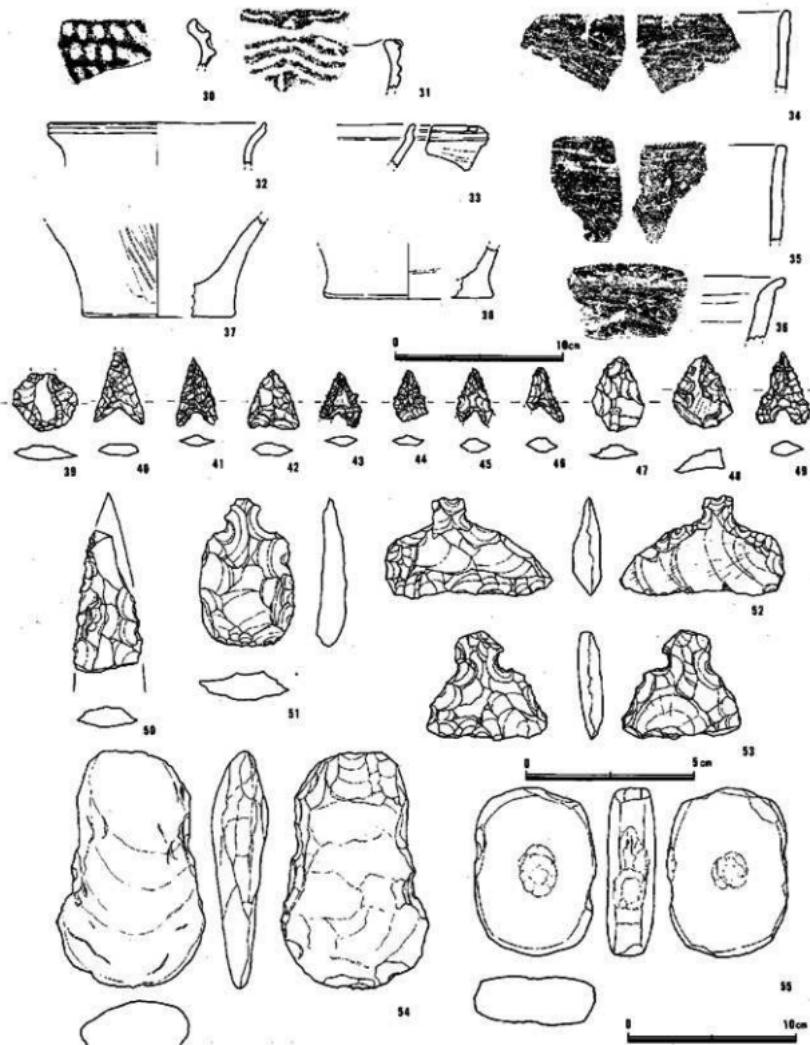
第10図 旧石器時代出土遺物 3 (1/1)



第11図 旧石器時代出土遺物 4 (1/1)

5) 繩文時代の遺物

調査区内では縄文時代に属する遺構は認められなかったが、弥生時代以降の遺構埋土、包含層等から縄文時代に属する土器・石器が出土したためここに図示する。30はキャリバー状の口縁部を有し外面に棒状工具による刺突を行う。船元式の深鉢であろうか。31は凹線を施す鍔ヶ崎式深鉢である。32-33は精製、34-38は粗製の鉢である。石器は鐵が目だって多くその他石槍、石匙、打製石斧等がある。縄文時代の遺物は調査区南側1/3で特に多く、各遺構から土器小片等が出土している。



第12図 縄文時代出土遺物(39~53は2/3、30~36・54~55は1/3)

3. 弥生時代以降の調査

1) 概要

本節では弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺構について報告を行なう。

まず、弥生時代に属するものにはF・G-2区で検出した中期後半の円形竪穴住居が1軒ある。復元径9mを測る大型住居である。他には該期の遺構は検出されていない。

古墳時代の遺構は今回の調査での大半を占める。時期は4世紀末～7世紀初頭に及び、遺構には方形竪穴住居36軒、掘立柱建物10棟、土坑、溝等がある。

竪穴住居は4世紀末に出現し、7世紀初頭に至るまで継続的に集落を形成する。特に6世紀の後半代には著しい住居の増加がみられる。5世紀以降の住居には竈が設置され、遺存状況も比較的良好である。立地は丘陵頂部を中心に南北緩斜面に集中し、重複が著しい。また、竪穴住居として報告するもののうち、6世紀前半のSC0001からは滑石(末)製品、滑石屑等が多量に出土し、滑石製品工房跡と推定される。なお、滑石屑、滑石末製品は5～6世紀代の他の遺構覆土からも出土するが、量的には混入と考えられる。ただ、全体的な出土量・立地等を勘案すると今回検出したSC0001以外の工房が丘陵高所に更に存在した可能性を考慮する必要がある。なお、今回の報告では多量に出土した滑石製白玉については、時間の制約上、図化を一部の遺構を除いて割愛したことであらかじめお断わりしておく。

掘立柱建物は竪穴住居と重複する位置に7世紀初頭に造営されるもので、2間×2間の総柱が主体となり、関連施設的な建物を配するものがある。建物には重複関係が認められず、主軸方向も略一定していることから竪穴住居廃絶後の短期間に企画性をもって建てられたものと推察される。

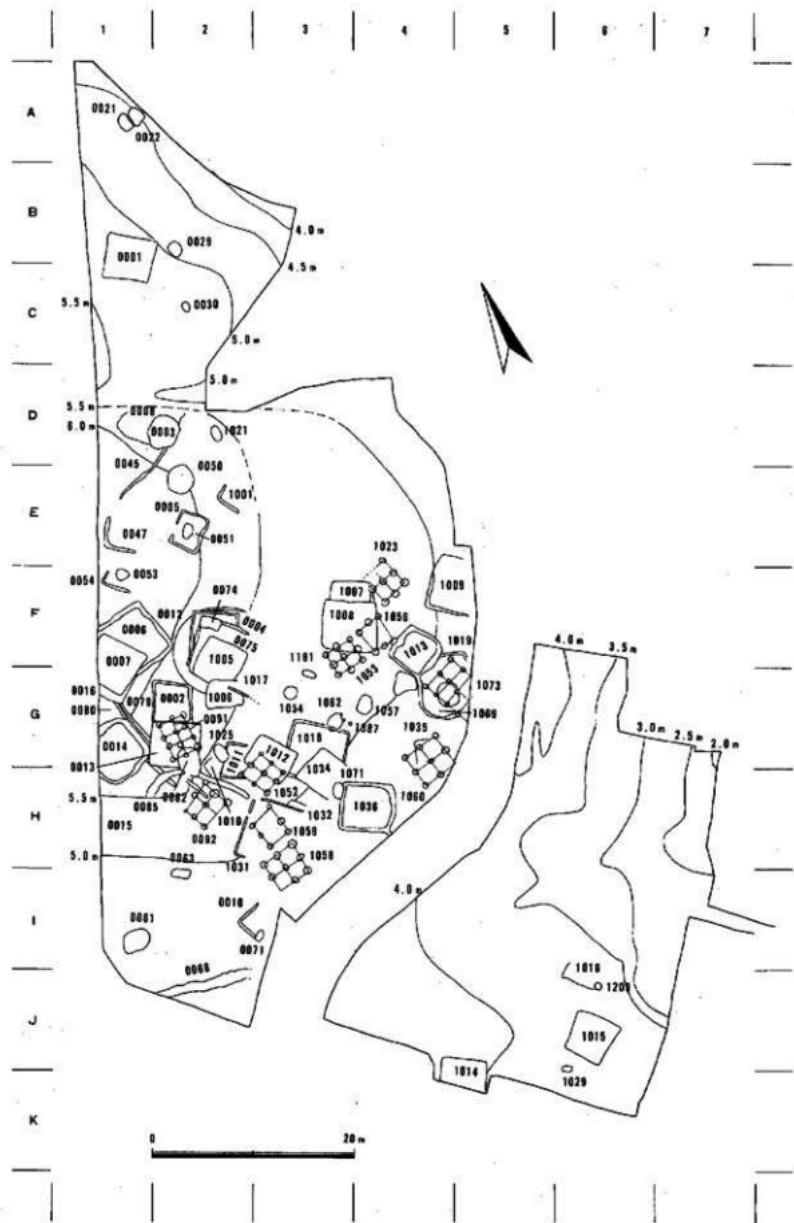
古代、中世の遺構は単発的な感があり、少数の土坑、溝、ピットが検出されたにとどまる。

2) 遺構と遺物

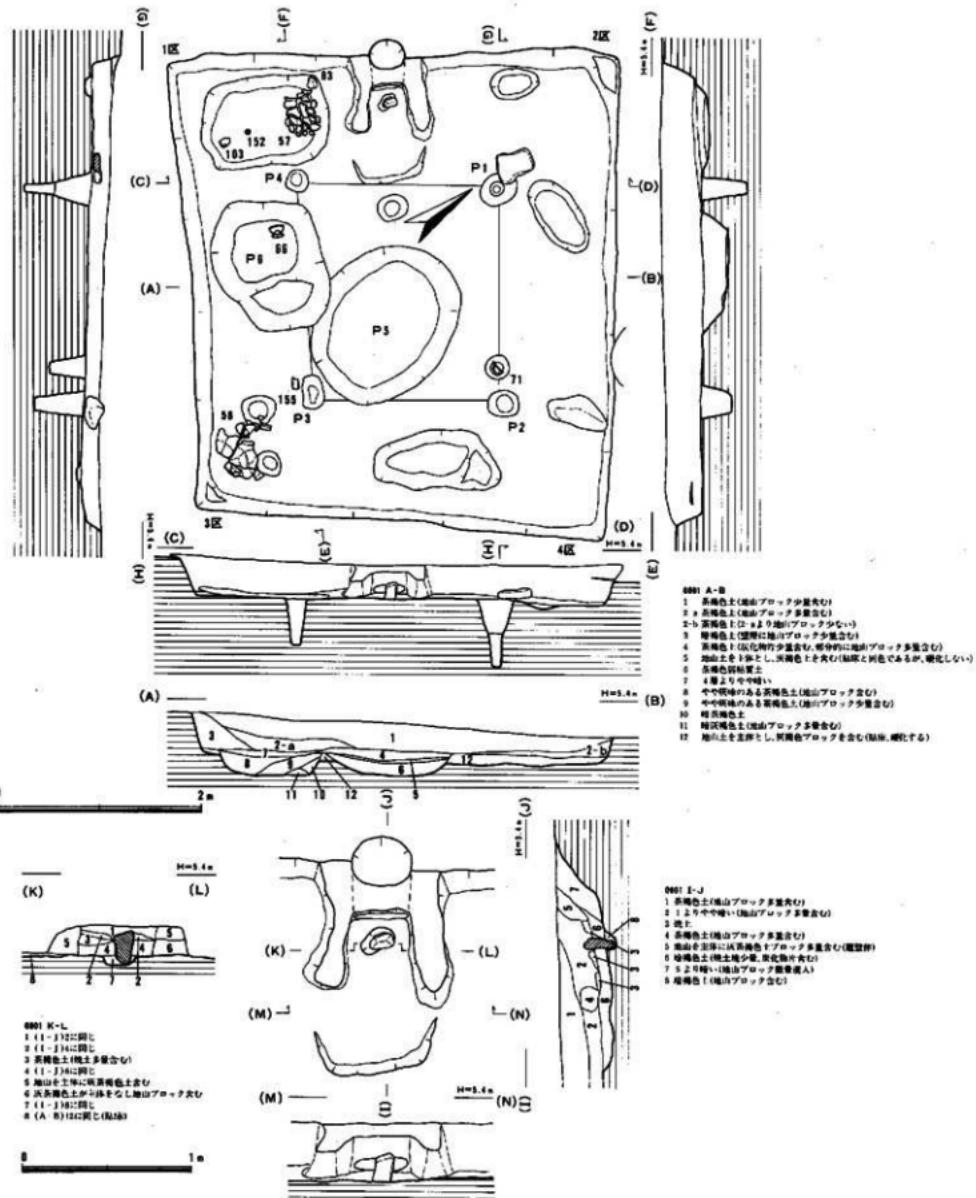
(1) 竪穴住居

SC0001(第14図) B-C-1-2区で検出した。丘陵北側緩斜面に立地し、今回の調査区で最北端に位置する。南北4.0～4.5m、東西4.5～4.8mを測るやや不整な方形プランを呈する。壁は南側で40cm、北側で20cmを測り、遺存状況は比較的良好である。掘り下げ途中で覆土中に滑石屑が含有されていることを確認したため覆土の採取を行なった。採取は人工層位を用いて5～10cm毎に上層より床面までを1～4層に区分(土層図A-Bとは不一致)した内の3・4層を対象とし、平面的には2方向のセグションベルトを境界とした1～4区に区分して実施した。洗浄後の詳細な結果は「IV. 結語」で後述するが、多量の滑石屑(末)製品が出土し、滑石製品工房跡であると考えられる。主柱はP1～P4の4本柱で、各柱間は2.0～2.2mを測り、平面プランに沿うようにやや東西方向が長い。柱穴は円形、梢円形を呈し、径30～40cm、深さ30～65cmを測る。中央部と南側際中央には作業用と考えられる土坑状の掘り込み(P5-P6)を有する。深さは共に25cm前後で底面は平坦である。また、P1際とP2の北東側には作業台と思われる自然石が床面上で検出された。滑石の原石あるいは加工を加えたものも床面で出土している。なお、竈の大半含む北側コーナー部分を除いて厚さ5～10cmの貼床(12層)が施される。地山の黄褐色土を主体とし、硬化する。

西壁中央部には竈が構築されている。地山土を主体とした壁体(横断面土層図K-L5・6層、縦断面土層図I-J4層)が良好に遺存しており、上位に焼土化が著しい。I-Jのブロック状の2・3層は天井部の崩落土と考えられる。焼成部の基底面より幅35cmの煙道が約40°の角度で外方に延びる。煙出しに近い先端部は焼土化する。袖先端より約1mに緩い段落ちが認められ、焼成部に向かって浅皿状を呈する凹みには炭化物・焼土が含まれる。掘き出しによって堆積したものであろう。また、焼成部の略中央には長さ20cm程の礫岩の自然石の端部を梢円形の小ピットに埋め込んで使用した支脚が遺存する。上半部が加熱により赤変する。



第13図 弥生時代以降遺構配置図(1/500)



第14図 SC0001実測図(1/50, 1/30)

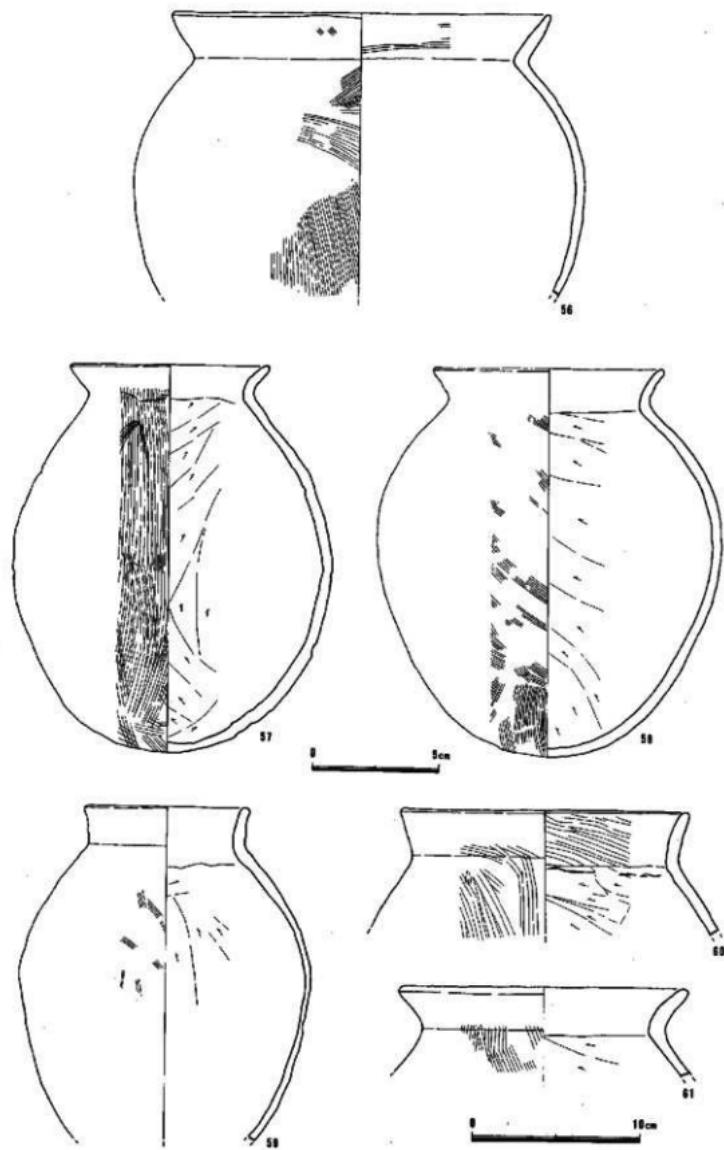
出土遺物(第15図～第19図) 土師器壺・高环・鉢・塊・瓶・タコ壺・手捏ね土器、須恵器蓋壺・高环・壺、陶質土器、滑石(未)製品、鉄器等が出土している。

土師器(56～104) 56～65は壺である。56は復元口径29.5cmを測る大型品で、球形の胴部に「く」字状に屈曲する口縁部を有する。外面に刷毛目が僅かに残る程度で器面が風化する。57は西側のコーナーで検出された浅い土坑状の掘込みの竈寄り上面において横倒しの状態で潰れて出土したものである。長胴の体部に緩く屈曲する短い口縁部を有する。体部外面は縦方向の刷毛目、内面には粗いヘラ削りが施される。口縁部の内外面はナデる。また、体部の上位から口縁部にかけて黒斑が認められる。口径15.2cm、器高30.5cmを測る。58は南側コーナーの床面で出土した。2/3程度遺存する。緩く屈曲する口縁部が卵型の体部につく。器面が風化するが外面には刷毛目、内面にはヘラ削りが認められる。復元口径17.8cm、器高30.5cmを測る。59は長胴の体部に直立気味の口縁部を有する。復元口径は13.0cmである。60～65は体部下半を欠失する破片資料である。体部外面には刷毛目、内面にはヘラ削りを施す。60・64の口縁部内面には刷毛目が残る。60・62・63の口縁部は外反の度合いが緩い。60の端部は緩く凹む面を有する。61・64は反り気味に外反する。65は内湾して立ち上がる。外面は赤褐色を呈し、器壁は薄く仕上げる。また、60・62・64は頸部内面に接合痕を残す。

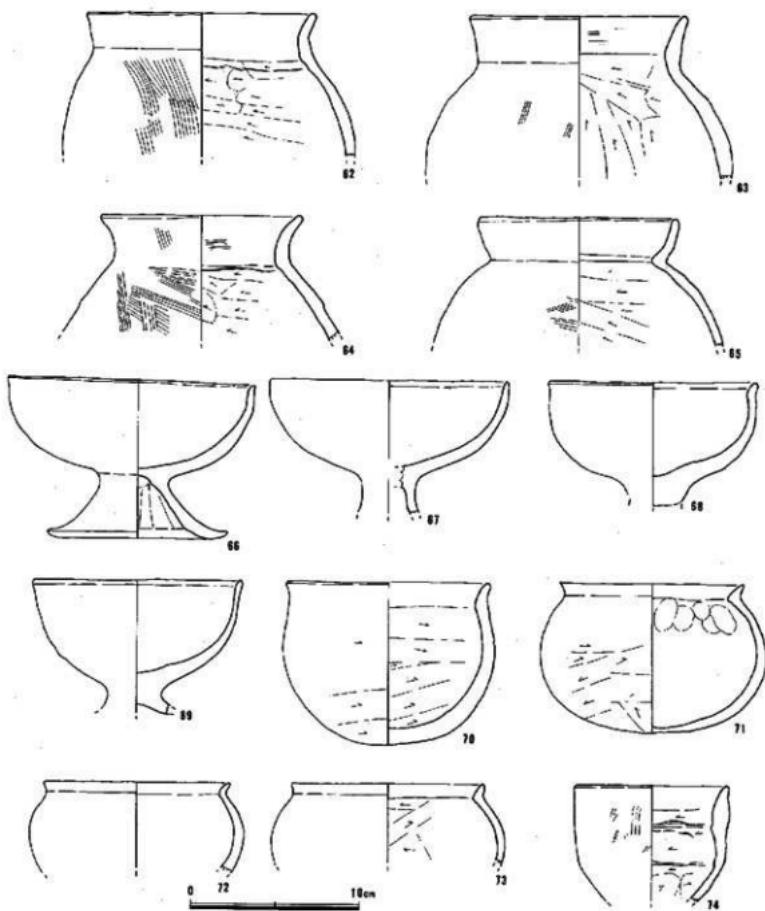
66～69は高环で、塊状の坏部を有する。赤褐色を呈する。66はP6の上面で出土した。口縁部と脚部の一部を欠失する程度で完形に近い。口縁端部をわずかに外反させ、脚部は低脚で大きく開く。脚部内面にはヘラ削りが認められるが、他は器面が剥落する。口径14.4cm、器高9.4cmを測る。67は復元口径14.0cmを測る。坏部の外面に黒斑が残るが、器面は風化する。68は脚部を欠失するものの、坏部は完存する。器壁は厚手で、口縁端部は外反させる。他の高环に比して砂粒を多量に含む。P5の上面で出土した。口径は12.0cmである。69は66同様に口縁端部を僅かに外反させるが、坏部がやや深めとなる。遺存する脚部から大きく開脚するものと推定される。復元口径は12.4cmを測る。

70～74は鉢である。70は丸味のある器壁の厚い体部に緩く外反する口縁部がつく。底部を除く外面は二次的加熱により器面の剥落が認められる。体部外面はヘラ削りを施す。復元口径11.8cm、器高9.7cmを測る。71～73は偏球状の体部に、短く「く」字状に折れる口縁部を有し、赤褐色をなす。71はP2の北西に隣接するピットの底面付近で出土した。底部の器壁は薄い。口縁部内外をナデ、体部外面はヘラ削りを行い、内面の肩部には指頭圧痕が残る。復元口径11.0cm、器高8.8cmである。72は71に形態が類似するが、口縁内面の稜が緩い。73は胴部に張りがあり、口縁部はやや上方に立ち上がる。74は直線的に延びる口縁部、胴部と焼き、体部下位で屈曲する。内面には明瞭に接合痕が残る。調整は外面に刷毛目を残すがナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りを施す。

75～100は塊である。全体的に器面の風化が著しく調整の観察可能な個体が少ない。口縁部の形態より、内湾気味に収めるもの(75～89：1類)、直線的に延びるもの(90～94：2類)、僅かに外反させるもの(95～100：3類)の大きく3群に分類できる。1類のうち75～81は口径に比して器高が低くやや扁平な感を受ける。77は口径15.2cm、器高5.0cmを測り、底部付近は器壁が薄い。79は復元口径12.8cmとやや小振りで、器高は5.0cmである。80は完形に近い個体で、口縁部に歪みが生じる。胎土には砂粒が多く認められる。口径14.0cm、器高5.3cmを測る。また、82～89は前者より器高が高い。83は57の塊と同一地点で出土した。復元口径14.6cm、器高6.3cmを測り、底部の器壁は厚手である。外面の上位には刷毛目が部分的に残り、下半はヘラ削りである。内面はナデを施す。85は復元口径13.4cm、器高5.5cmで内外面に器面が著しく荒れる。胎土には砂粒が目立つ。86は底部の接地面が広く安定感があり、器壁も厚い。底部付近には僅かに刷毛目が認められる。復元口径は13.8cm、器高5.7cmである。87は口縁部が屈曲気味に内湾し、端部は薄く収める。外面には黒斑が認められ、刷毛目をナデ消

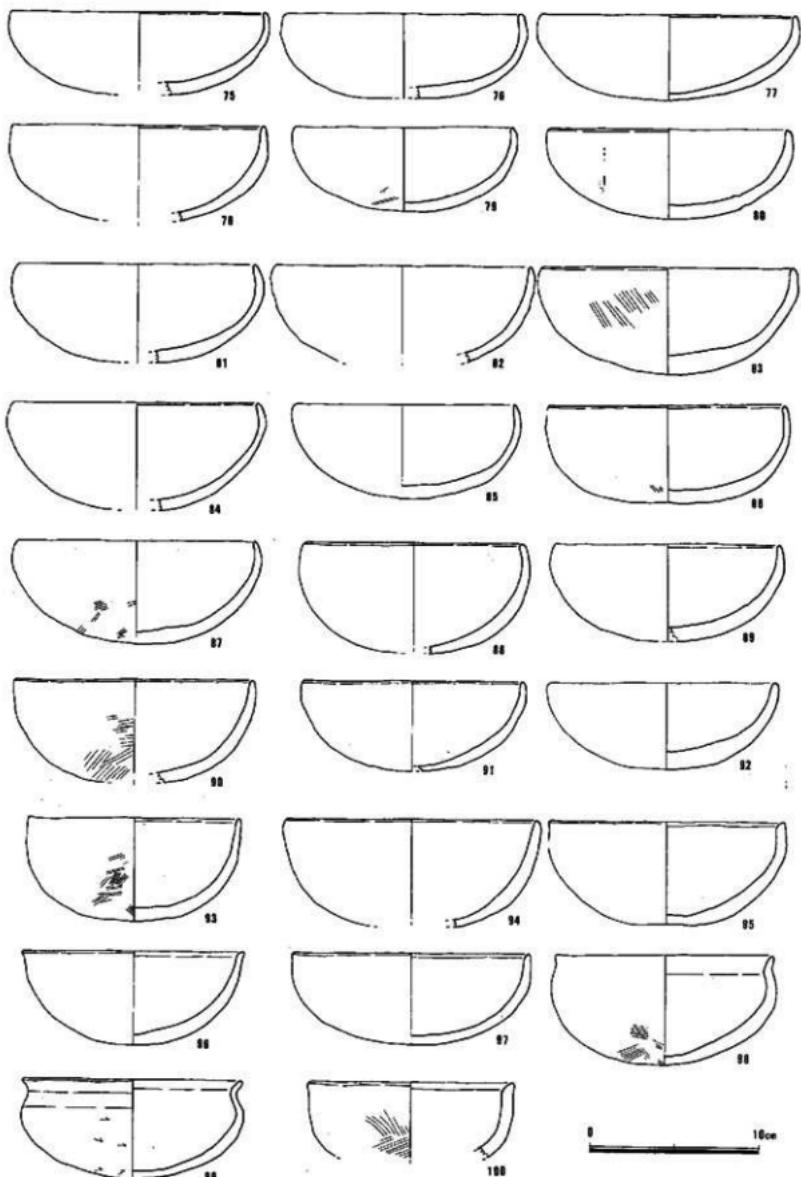


第15図 SC0001出土遺物実測図 1 (56~58は1/4、他は1/3)

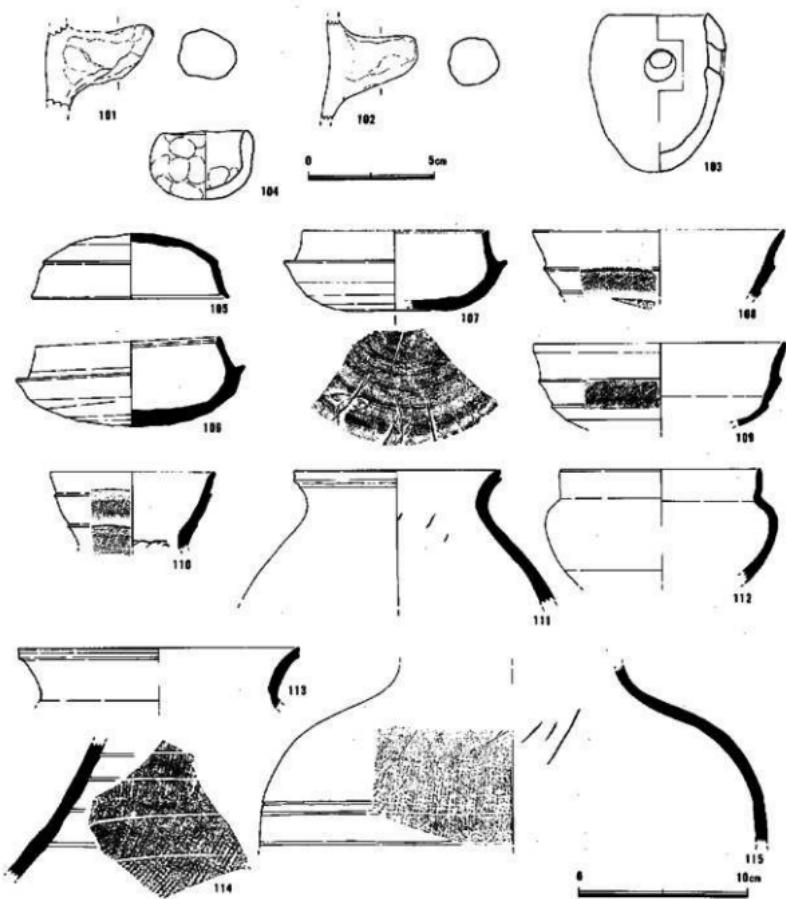


第16図 SC0001出土遺物実測図 2 (1/3)

す。復元口径14.0cm、器高6.1cmを測る。なお、1類の色調は82が淡黄橙色を呈するのを除いて暗赤褐色をなす。2類のうち90は体部外面の下半には粗い刷毛目が施され、口縁部付近はナデる。内面はナデて仕上げる。復元口径14.0cmを測る。92は全体的に厚手の器壁を有し、胎土には砂粒が多い。93は深みのある器形で口縁部が上方に延び、薄く收める。外面は刷毛目が残り、炭化物の付着が底部に認められる。復元口径12.4cm、器高6.1cmである。色調は91が淡黄橙色で、他は(暗)赤褐色である。3類としたものでは、95・97は口縁部が上方に延びる。端部を極僅かに外反させ、内面には緩い稜を有する。共に赤褐色を呈する。95は復元口径13.8cm、器高6.1cmを測る。外面は刷毛目をナデ消し、口

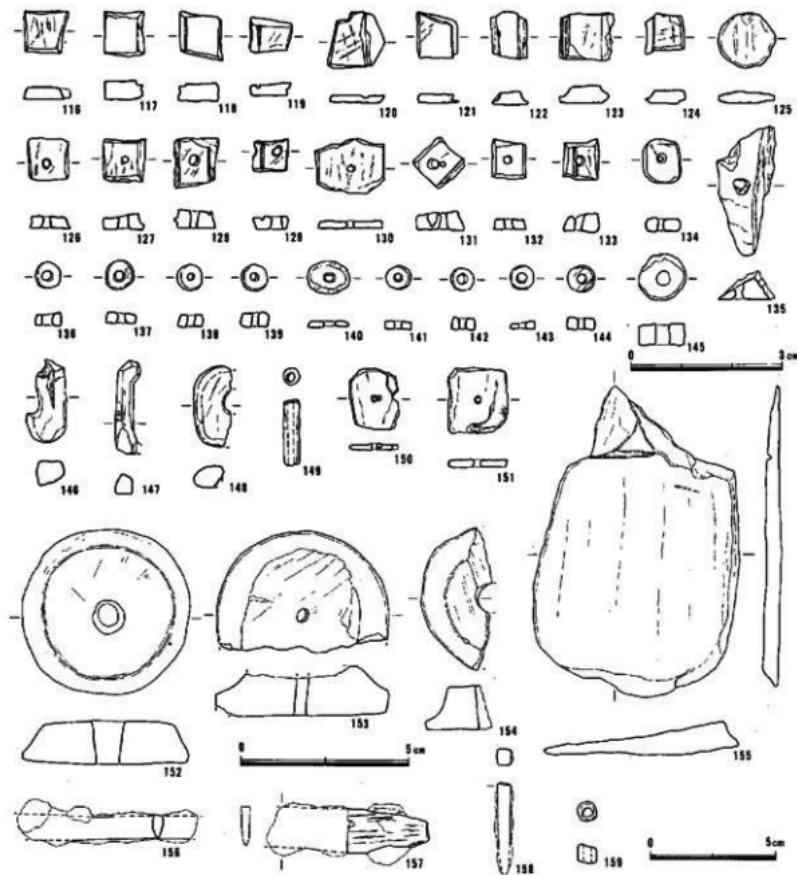


第17図 SC0001出土遺物実測図 3 (1/3)



第18図 SC0001出土遺物実測図 4 (104は1/2、他は1/3)

縁部内外面はヨコナデを施す。96の口縁部は外方に開き、端部を外反させる。色調は淡赤茶褐色で、復元口径13.0cm、器高5.5cmを測る。口縁部内外面をヨコナデする。98-99は3類の中で外反が明瞭で、胴部が張る形態である。98は外面下反部に刷毛目を残し、内面の器面が剥落する。完形に近い個体で、口径は12.6cm、器高6.5cmである。赤褐色を呈する。99は98より外反の度合いが強く、器高が低い。胴部には緩い稜が生じる。器壁は全体的に薄手である。57と同一位置より出土した。口径12.8cm、器高5.9cmを測り、色調は淡赤褐色をなす。100は厚手の器壁を有し、口唇部内面は面をなす。外面は粗い刷毛目、内面は横方向の板状工具による擦過痕が認められる。口縁部内外はヨコナデする。色調は淡



第19図 SC0001出土遺物実測図 5(116~145・158・159は1/1、156・157は1/2、他は2/3)

黄橙褐色を呈する。

101・102は楕の把手である。共に胎土には砂粒を多量に含む。103は飯ダコ壺の完形品で、口径5.9cm、器高9.3cmを測る。口縁部は僅かに内傾し、端部は孔の上部のみ尖り気味に收め、他は、丸く收める。下方に向かってすぼまり、不安定な底部を有する。なお、孔は焼成前に外面下方より内側上方に向かって穿たれており、孔の内面周辺には粘土が隆起する。器面は風化のため調整は不明である。黄白色を呈する。104は手捏ね土器の完形品である。指オサエで成形され、つくりは粗い。淡黄橙色の色調である。

須恵器(105~115) 105は坏蓋である。復元口径11.6cm、器高3.9cmを測る。天井部と口縁部の境界

には稜を有する段がつく。口縁部は外反し、端部の内面には沈線状の段が認められる。調整は外面の天井部の約1/2を回転ヘラ削り、内面の大井部はナデで、他は回転ナデを施す。色調は外面が灰色、内面は暗赤茶褐色を呈する。106・107は坏身である。106は内傾する直線的な高い立ち上がりをもち、端部内面には沈線上の段を有する。外底部の1/2強は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整である。内外面共に灰色で、復元口径は10.7cm、器高は5.0cmである。107は内傾する立ち上がりの端部を短く外反させ、その内面に106に比して緩い沈線状の段を有する。106と同様の調整が施される。外底部にはヘラ記号がある。復元口径は11.0cm、器高4.7cmを測る。色調は淡灰色である。108・109は無蓋高杯で、同一個体の可能性がある。共に復元口径15.0cmを測る。口縁部は緩く外反し、尖り気味に端部を収める。体部には2条のやや鈍い凸線を巡らせ、その間に櫛描きの波状文を施す。回転ナデ調整で、108は内外面、109は内面に自然釉がかかる。110は長頸壺の口縁部で、内渦気味に開き、端部は丸味を帯びる。2条の凸線が巡り、2段に櫛描きの波状文を配する。復元口径は9.8cmを測る。内面には自然釉が認められる。112は短頸壺で、復元口径は11.8cmである。口縁部は内渦気味に直立し、肩が張る器形である。体部外面の下位に不整方向のナデを施す。胎土には砂粒が目立つ。111・113～115は甕で、このうち111・114・115は陶質上器の可能性をもつ。111はナデ肩の体部に外反する口縁部がつき、端部は尖り気味となる。口縁下には凸線が巡る。内外面は回転ナデで、肩の下位には一部ナデが認められる。色調はやや赤味のある暗灰色である。復元口径は12.2cmを測る。113の口縁部は外反し、口唇部は四線状に窪む。内外面に回転ナデが施され、淡灰色を呈する。復元口径は16.4cmである。114は胴部の下半と考えられる破片資料である。外面の上位は繩蓆文による叩きの後に鈍い沈線を施文し、下位ではその後に格子目の叩きを加えている。内面には粗いナデが認められる。にぶい赤茶褐色を呈する。115は肩の張る器形で、胴部外面には繩蓆文の叩きの後に、沈線が3条巡る。肩は横方向のナデ、頸部は回転ナデで、内面は板状工具による横方向のナデが施される。色調は外面がやや赤味がかったにぶい灰色で、内面がにぶい赤褐色である。

滑石製品(116～155) 116～135は白玉の未製品である。このうち、116～125は側面未研磨、穿孔前の板状方形あるいは円形を呈するものである(以後、白玉未製品A)。白玉未製品Aは全体で104個出土しているが、117～122に図示したようにスリット(筋目)を残すものが多く見受けられた。125は唯一円形を呈するもので、側面を薄く加工する。126～135は未製品Aに穿孔を施したもの(以後、白玉未製品B)で、側面は未研磨及び研磨途中(130・131・134)のものがある。なお、135は肩を利用した未製品である。未製品Bは321個(うち、欠損品277個)出土した。136～145は白玉製品で、未製品Bの側面を研磨し、円形に仕上げる。201個(うち、欠損品64個)が出土した。

146～148は勾玉の欠損品である。147は断面を方形に研磨し、別途模造品の可能性もある。149は管玉で良質の滑石を用いて丁寧に作り上げる。重量は0.7gを測る。150・151は有孔円盤の未製品で、150は全周に粗い研磨痕を残す。孔は2ヵ所に認められるが、1つは穿孔途中である。151は表裏面は粗い研磨を施すが、側面未研磨である。152～154は鋸鍛車である。152は光成品で、西側コーナー附近で出土した。全面を丁寧に研磨する。径4.9cm、厚さ1.3cm、重量51.6gを測る。153・154は欠損品である。155は板状の原石の片面に研磨を加えたもので、側面には調整が施されていない。また、先端部を折り取るためと考えられるスリットを片面に有している。

鉄製品(156～158) 156・157は刀子で、共に銹化がすすむ。156は背部は面をなさず、丸味を帯びる。157はP5から出土したもので、刃元から茎部にかけてが遺存し、木柄もしくは鹿角柄が装着される。159は錐の先端部付近と考えられ、断面方形を呈する。

ガラス製品(159) 淡緑色を呈する小玉である。

SC0002(第20図) G-2区で検出した。丘陵の頂部よりやや下った南側緩斜面に位置し、南壁をSC0013に切られる。検出当初はSC0013との前後関係が不明瞭であったため、南北方向のセクションベルトに沿ったトレンチを設定し、切り合い関係を把握した。やや歪な正方形プランで、一辺4.0m前後を測るものと推定される。削平を受け、壁は10cm程度しか残存しない。SC0001同様に覆土中に滑石屑が含まれており、一部の土を採取した。2方向のセクションベルトを境界とした1~4区別に土層図A-Bの1層を上・下層(1・2層)に任意に区分したうちの2層(下層)部分で実施し、後に洗浄を行った結果、製品は少量であったが、滑石屑が多量に出土した。また、西壁の略中央からやや離れた位置の床面で作業台と考えられる扁平な自然石が出土している。これらより同様の滑石製品製作工房跡とも考えられるが、SC0001でみられた作業用土坑が検出されず、通常の堅穴住居と構造的な差異が認められないことから断定には躊躇する。主柱はP1~P4の4本柱で、東西方向の柱間1.6m、南北1.8mを測る。柱穴は円形で、径20~40cm、深さ20~60cmを測り、径の大きなP1は浅めである。P3・4は貼床除去後に確認できた。また、壁際には幅20~35cm、床面からの深さ約10cmの壁溝が設けられるが、南西コーナーでは途切れる。なお、竈の周囲約50cmを除いて床面には厚さ5~10cmの地山土を主体とする貼床(5層)が施される。

竈は西壁の中央部に設置される。地山土を用いた幅20~30cmの袖部(K-L4層)が遺存する。焼成部には焼土塊が検出されたが、炭化物の堆積は認められなかった。縦断面土層図I-J7層は壁体と考えられ、その除去後の床面には壁溝が連続して検出された。竈の構築は貼床を竈周囲以外に施し、壁溝を掘削した後に竈設置箇所部分の壁溝を埋め戻して整地(I-J8層)し、行っている。

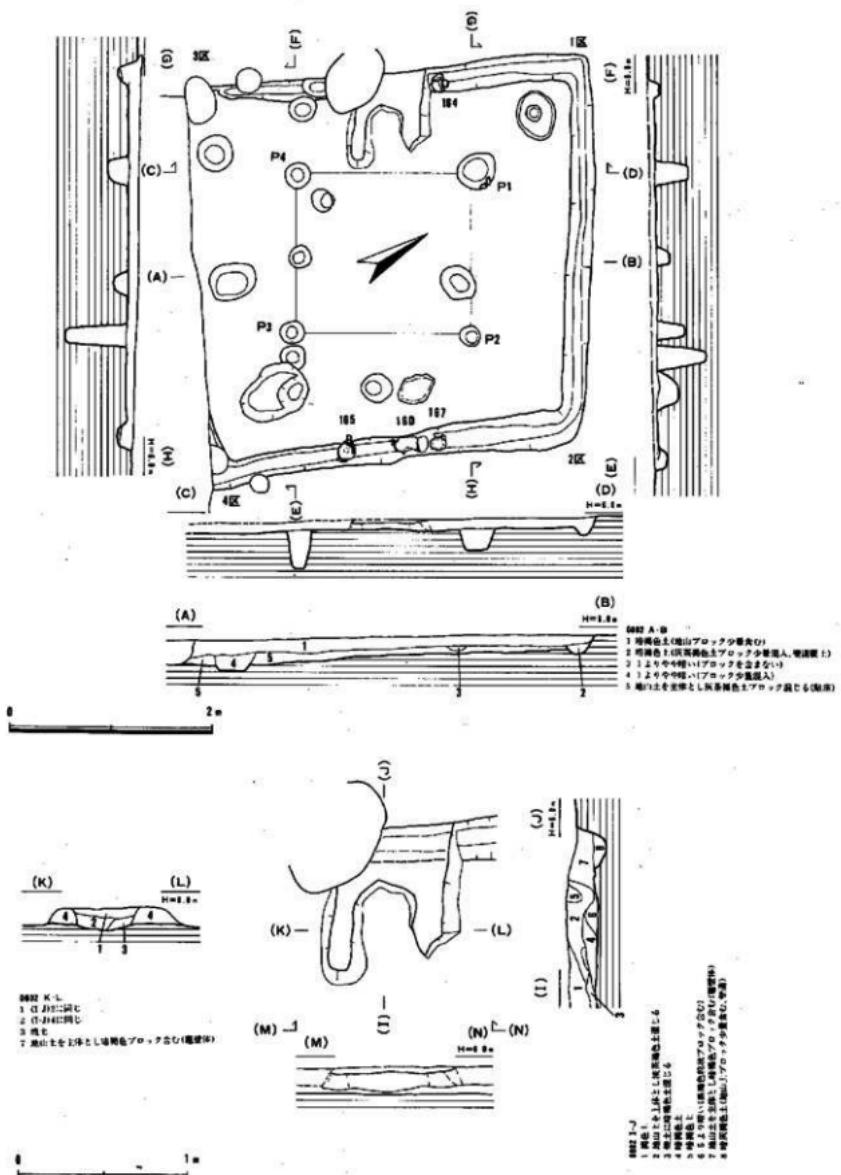
出土遺物(第21図) 土師器、須恵器、滑石(未)製品等が出土している。

160~167は土師器で、このうち160~163は壺である。160はやや肩の張る胴部に反り気味に外反する口縁部を有し、端部は丸く收める。外面の頸部の屈曲は緩い。器面が磨滅するが、体部外面には細かい刷毛目が部分的に残存し、頸部下内面にはヘラ削りを施す。西側壁溝より出土した。胎土には砂粒を多量に含む。復元口径14.6cmを測る。161は大型の壺の底部である。外面に器面の荒れが著しい。砂粒を多量に含み、くすんだ赤橙色を呈する。162はナデ肩の体部に外反の度合いの弱い口縁部がつく。胴部外面から頸部にかけて縦方向の刷毛目、口縁部外面はヨコナデで、内面は粗い刷毛目、頸部下よりヘラ削りを施す。163は球体の体部で、口縁部を欠失する。外面は2次的加熱により器面が剥落する。内面はヘラ削りを施し、全体的に器壁を薄く仕上げる。160南側の壁溝中より出土した。164~165は高环で、赤褐色を呈する。164は塊状の环部で、口縁部は緩く外反する。やや長めの筒部に脚部が広がる。調整は脚部内面にヘラ削りがみられるものの他の器面は磨滅し、不明である。竈北側の壁溝中より出土した。165は环部を欠くが、脚部の形態は164に類似する。166~167は塊で、166は口縁部を外反させる。外面に刷毛目、内面はナデを行う。167は完形品で、口径12.8cm、器高5.0cmを測る。口縁部は内湾して收め、胎土は精良、明黄橙色を呈する。器面は磨滅する。160北側の壁溝中より出土した。

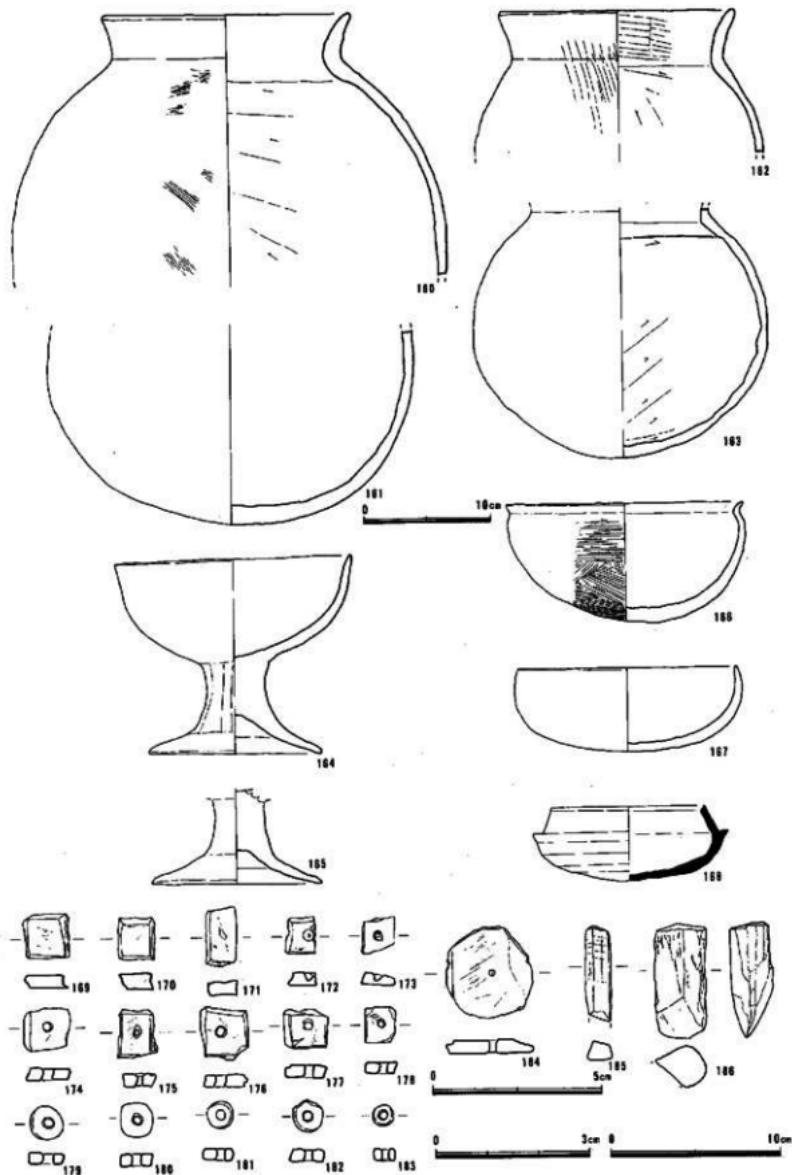
168は須恵器の壺身である。内傾する直線的な立ち上がりを有し、端部を僅かに外反させる。端部は内面は内傾し、凹線状に窪む。外底部は1/2強を回転ヘラ削りする。

169~185は滑石製品である。169~173は臼玉未製品Aで、172~173は穿孔途中のものである。総数は56個である。174~178は未製品Bで、169個(うち、欠損品139個)が出土した。179~183は臼玉製品である。180は觸丸を呈し、研磨途中の可能性がある。製品の出土数は35個(うち、欠損品25個)である。184是有孔円盤の未製品で、スリットを残す。185は棒状を呈する不明品である。

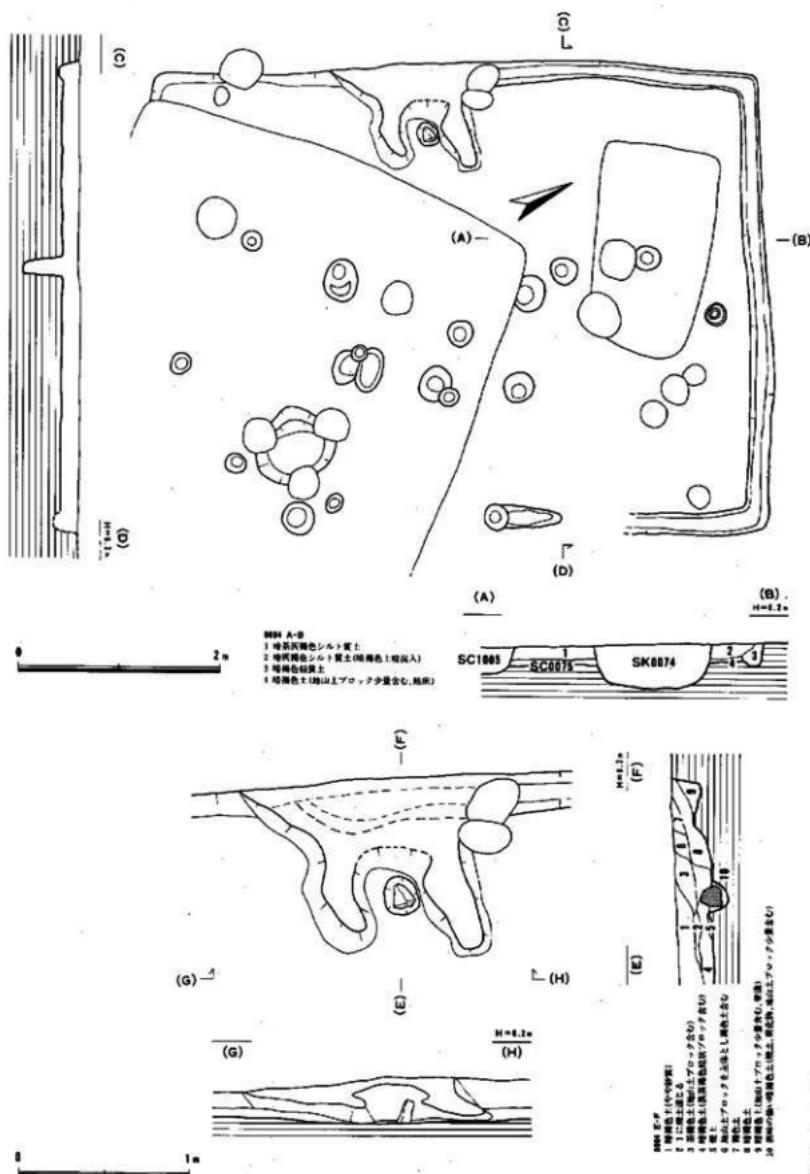
186は混入と考えられる磨製石斧の欠損品である。



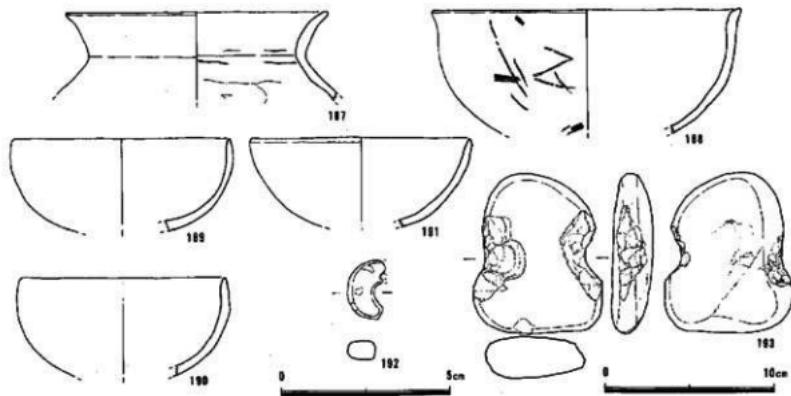
第20図 SC0002実測図(1/50、1/30)



第21図 SC0002出土遺物実測図(163は1/4、184・185は2/3、169～183は1/1、他は1/3)



第22図 SC0004実測図(1/50、1/30)



第23図 SC0004出土遺物実測図(192は2/3、他は1/3)

SC0004(第22図) F-2区で検出した。SC0012・SC0075を切り、南半部をSC1005に切られる。丘陵頂部に近い南側緩斜面に位置する。南北6.0m、東西4.6mを測る長方形のプランを呈する。壁は15cm程度遺存し、竈南側を除いて幅15~20cm、床面からの深さ10cmの壁溝を設ける。主柱穴は明確にできなかった。床面には部分的に薄く貼床が施される。

竈が西側の中央南寄りに設置される。幅30~40cmの袖が高さ10cm程度遺存し、地山の黄褐色土に淡灰茶褐色土を混じて構築される。袖内側は焼土化する。壁側の構造は不明瞭で、縦断面土層図E-Fより復元を試みる。SC0002同様に竈下にも壁溝が認められる(9層)が、断絶する。壁溝の西側には狭い平坦面があり、燃焼部に向かって掘窪められる。その上位に認められる6~8層のうち6層は7・8層と明確に区分できる地山の黄褐色土を主体とする層でこれを壁体と推定すると7・8層は煙道の埋土と考えられる。調査時には7・8層を壁溝の延長と誤認し掘り下げた。焼成部には径25cmの小ピットを掘り込み、断面三角形の自然石の底辺部を据えて支脚としている。竈除去後に両袖の先端部には浅い窪みが検出された。

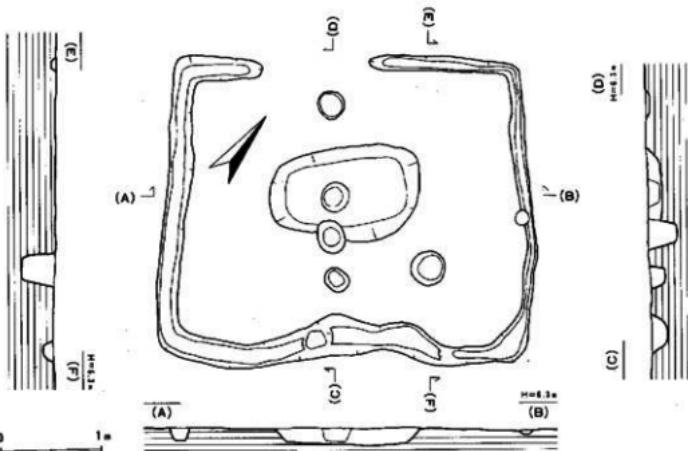
出土遺物(第23図) 土師器、須恵器数点が出土したが、細片が多い。他に滑石、混入と考えられる赤生土器、石錠がある。なお、土器の図化は土師器のみ行った。

187は甕で、反り気味に外反する口縁部を有する。体部内面には横方向のヘラ削りを施す。頸部内面には接合痕が明瞭に残る。復元口径は15.2cmを測る。

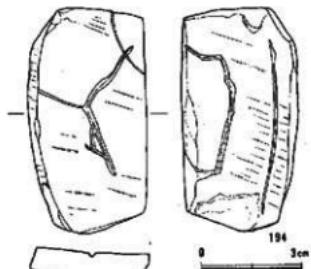
188~191は塊である。188は竈の北側袖中より出土した復元口径18.2cmを測る大型のものである。口縁端部は緩く外反させる。外面は刷毛目のように施したヘラ状の工具による擦過痕が残る。内面はヘラナデにより平滑に仕上げる。暗褐色を呈する。189・190は口縁部を内湾気味に収める。189の外面には黒斑が認められる。191は口縁が外方に開く。

192は滑石製の勾玉で、先端の孔部分で欠失する。断面は隅丸方形を呈し、重量は1.9gを測る。この他に滑石屑が43.7g出土した。

193は両側面を打ち欠いた砂岩製の石錠である。重量は227.0gを測る。



第24図 SC0005実測図(1/50)



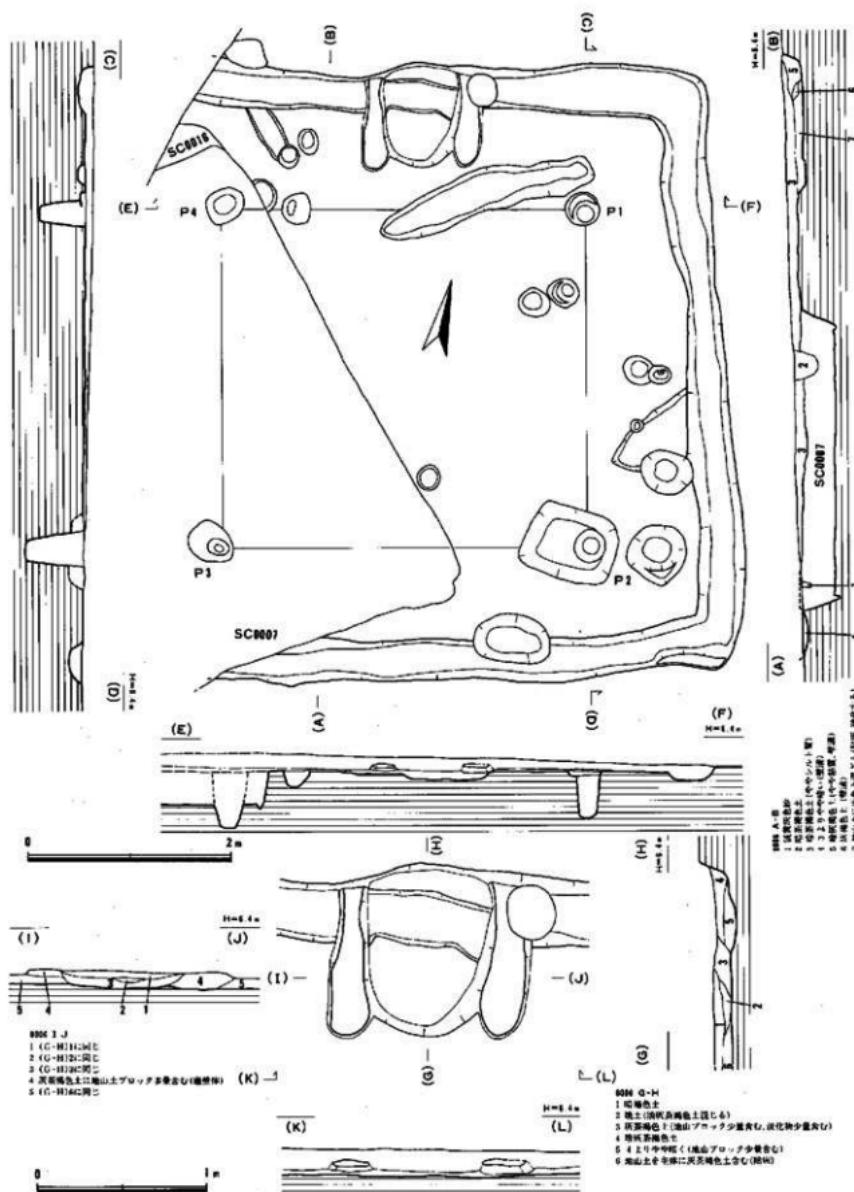
第25図 SC0005出土遺物実測図(2/3)

SC0005(第24図) E-2区で検出した。当区周辺は丘陵尾根線付近に該当するものと考えられ、削平が著しい。本遺構は壁溝のみが遺存したものと考えられる。南北3.0m、東西3.7mを測る長方形の小規模なプランを呈する。壁溝は幅10~40cmで、深さ5~10cm程度が残り、一部途切れる。覆土はやや砂質がかった暗褐色土である。主柱穴は略中軸上に対峙する2本が考えられるが、北側の柱穴は極めて浅く、疑問が残る。なお中央部に位置する土坑はSK0051として後述する。

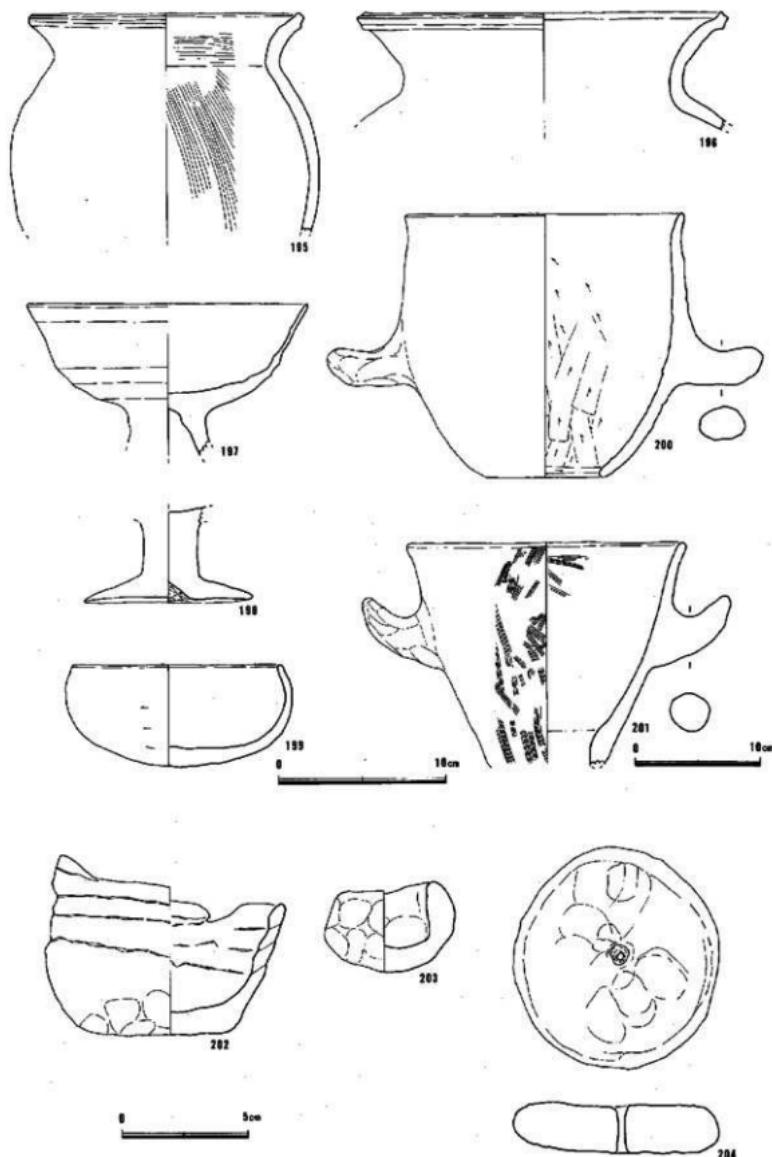
出土遺物(第25図) 土器には土師器、須恵器、弥生土器があるが、いずれも細片である。図示したのは滑石の板状品で、両面及び側面を粗く研磨し、両面には先端の鈍い工具による刻線が認められる。重量は42.54gを測る。

SC0006(第26図) F-1・2区に位置する。SC0007・SC0016を切り、北西コーナーは調査区外に延びる。検出当初はSC0007との前後関係が確定できず、全体に5cm程度掘り下げる実施した。土層図A-Bから看取されるように南側では壁面が遺存せず、壁溝を僅かに残すのみで、SC0007の覆土の一部が本遺構の上層覆土と略同一レベルで確認される。その結果、西壁のプランを確認できないままSC0007が検出された。規模は南北6.1m、東西は推定で6mを測る。主柱はP1~P4の4本柱と考えられる。P3・4はSC0007の床面で確認した。柱穴は円形もしくは梢円形で径30~50cm、深さ45~60cmを測る。實際には床面からの深さ5~10cm、幅40~50cmで断面逆梯形の浅くやや幅広の壁溝が巡る。北側の竈周辺の床面には厚さ5cm程度の貼床が施され、踏み締まる。

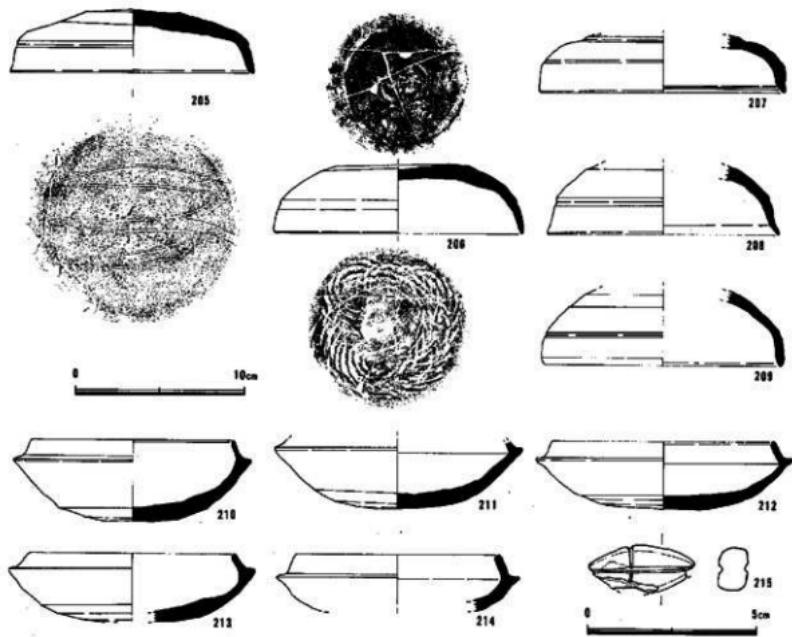
竈は北壁に設置される。幅20~30cmの袖部が貼床面上に高さ5cm程遺存する。焼成部は袖先端部より浅く掘り込まれ、焼土、炭化物の堆積がみられた。竈の構築はSC0002同様に貼床整地後、壁溝の



第26図 SC0006実測図(1/50、1/30)



第27図 SC0006山土遺物実測図 1 (200・201は1/4、202～204は1/2、他は1/3)



第28図 SC0006出土遺物実測図 2 (215は2/3、他は1/3)

掘削を行い、焼成部の壁溝部分を埋め戻し、壁体の構築を行ったものと推定される。

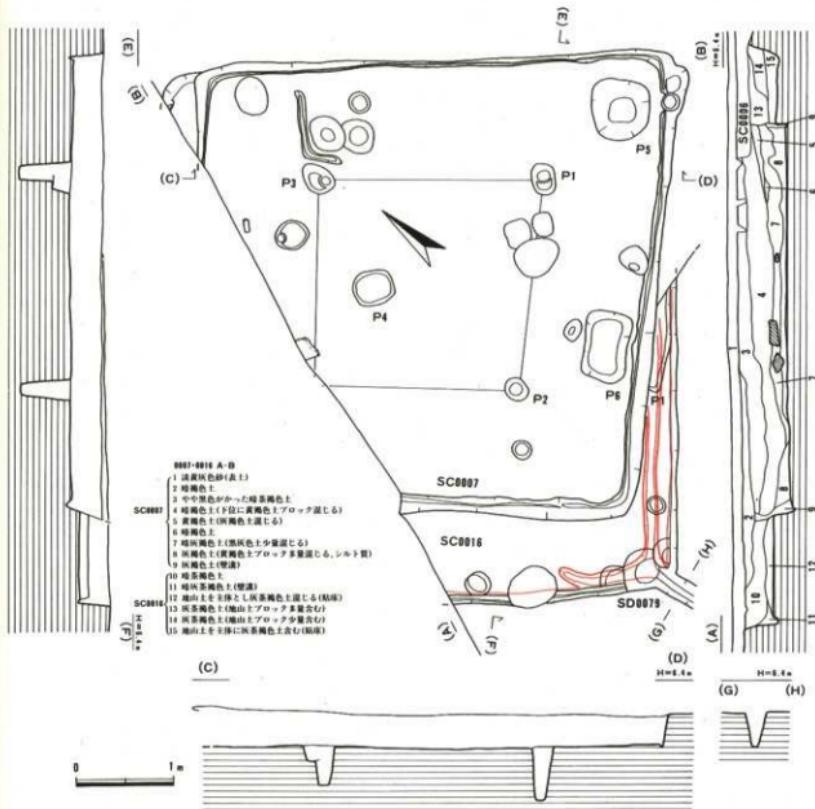
出土遺物(第27図・第28図) 土師器、土製品、須恵器、滑石が出土した。

195～203は土師器で、そのうち195・196は壺である。195は卵形の胸部に外反する口縁部を有する。口縁部の形態は須恵器壺を模倣したものと考えられ、端部を上方に引き上げ口唇部は凹線状に痙攣する。内面には刷毛目が残るが、外面は器面の剥落が著しい。復元口径15.8cmを測る。196は195と類似する口縁部を有するが、端部は尖り気味に収める。肩は張る。復元口径は21.2cmである。197・198は高环で、197は壺部の下位で緩く屈曲し、外反気味に開く。器面は凹凸が著しく、風化する。口縁部の器壁は薄い。198は長めの筒部に裾が内湾気味に大きく開く脚部が遺存する。筒部の内面はヘラ削りを施す。199は復元口径11.2cmを測る場で、体部の中位より内湾する。体部外面はヘラ削りをする。200・201は底部単孔の壺である。200は復元口径21.6cm、器高20.9cm、底径9.2cmを測る。体部は丸味を帯び、口縁部は僅かに外反する。水平方向に延びる把手が体部のやや下半に付く。内面には縦方向のヘラ削りを施す。201は直線的に開く器形で、体部の中位よりやや高い位置に上方に延びる把手を有する。内面下半は肥厚し、端部は欠失する。外面及び口縁部内面は細かい刷毛目、口縁下内面はヘラナデ調整を行い、口縁端部の内外面はヨコナデを施す。復元口径21.6cmを測る。202はつくりの粗い鉢で、上半部には内傾接合する粘土帶の巻き上げ痕が明瞭に残る。粘土帶は略一周ごとに終点を始点部分の上に乗せ、次の粘土帶の始点を前の終点に乗せている。外面は指オサエ、内面は粗くナデを行う。

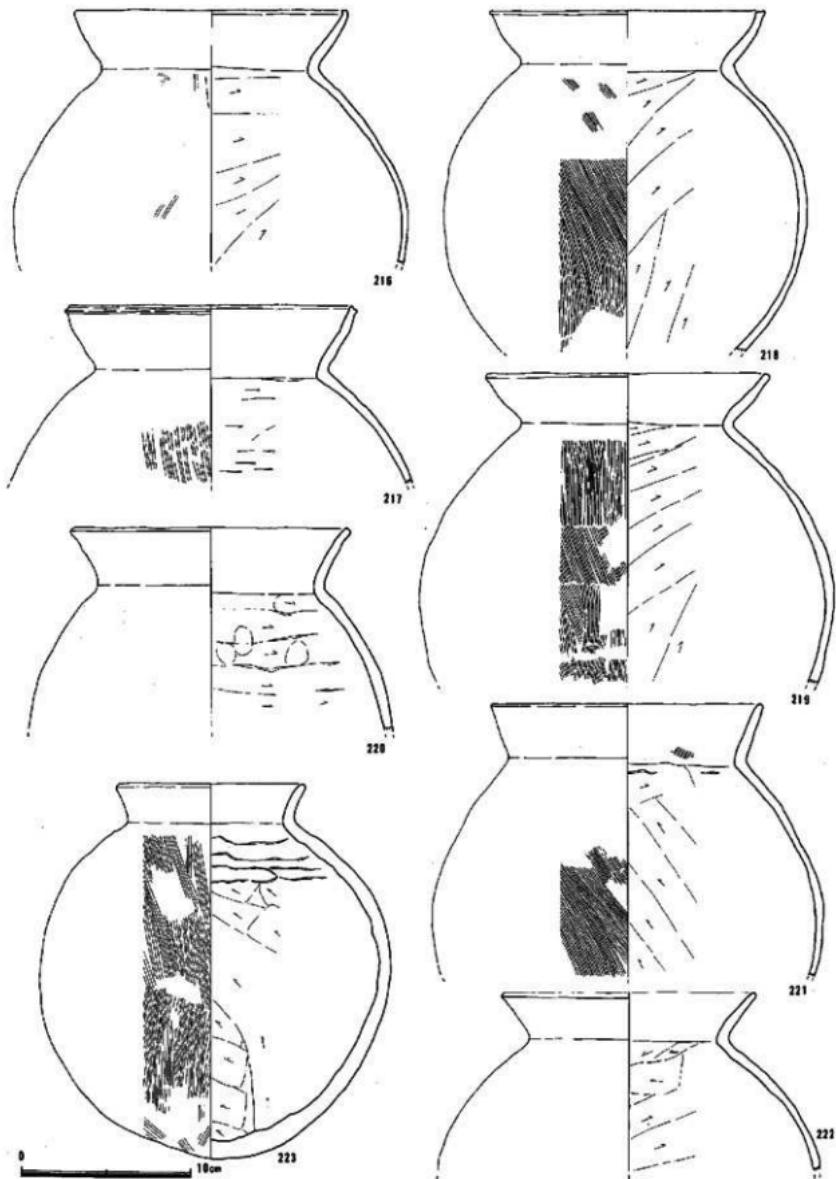
204は円形の土製品である。径8.2cm、厚さ1.8cmを測り、中央部には径0.4cmの孔を穿つ。指オサエ、ナデで調整する。重量は168gである。

205~214は須恵器で、205~209は杯蓋である。いずれも口縁部と天井部の境界に沈線が巡り、天井部外面の1/2弱を回転ヘラ削りする。206~209は天井部と口縁部の境界が丸味を帯びる。205~207の口縁端部内面は内傾し、浅い沈線を有する。205の天井部内面、206の天井部外面にはヘラ記号が認められる。また、206の天井部内面には同心円文の當て具痕が残る。210~214は坏身である。内傾する立ち上がりは比較的短く、端部は丸味を帯びる。外底部の回転ヘラ削りは1/2弱である。211は焼成がやや軟質である。

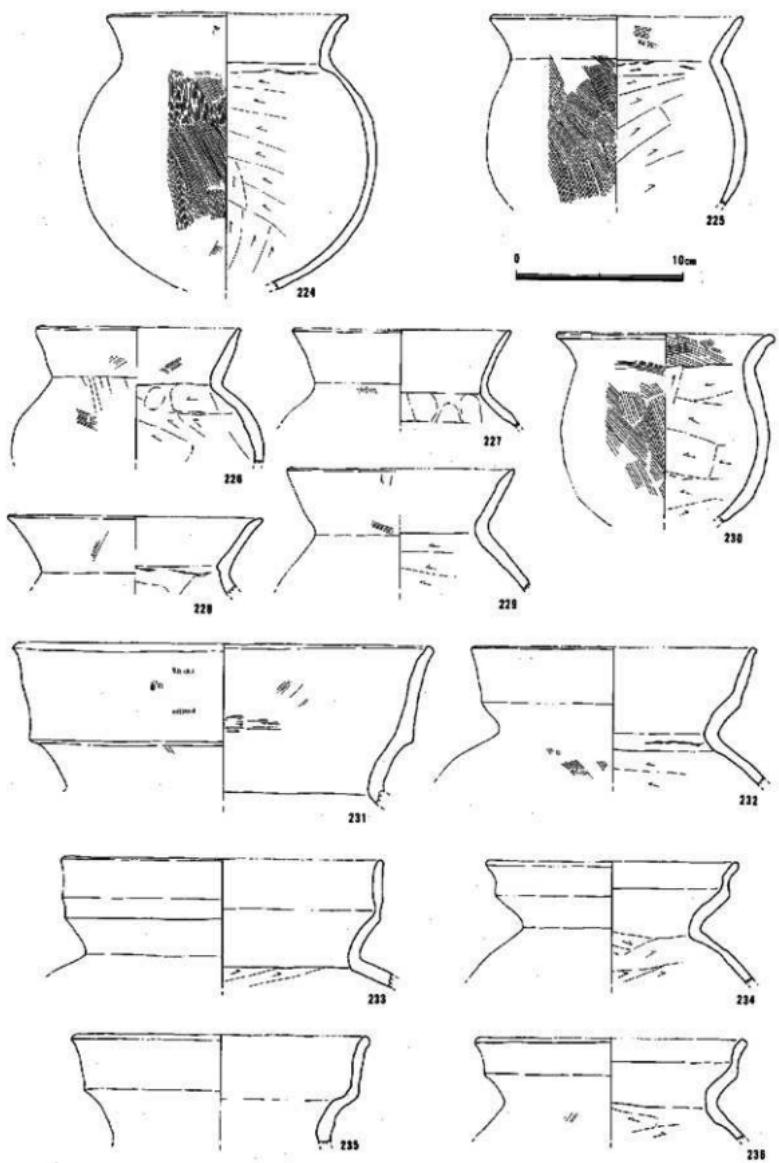
215は滑石製の錘で、端部を欠失する。やや胴部の張る紡錘形を呈し、十字溝をめぐらす。重量は5.52gを測る。他に滑石屑が56.7g出土した。



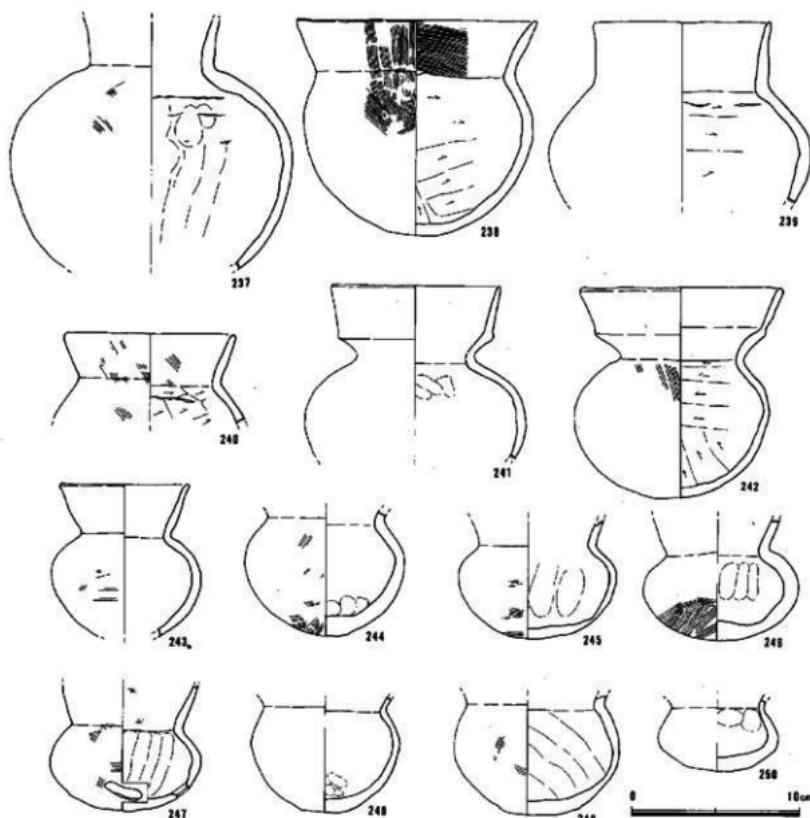
第29図 SC0007・SC0016実測図 (1/50)



第30図 SC0007出土遺物実測図 1 (1/3)



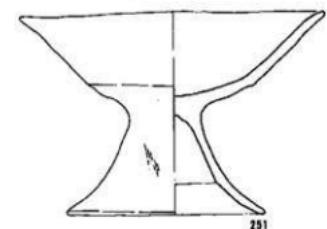
第31図 SC0007出土遺物実測図 2 (1/3)



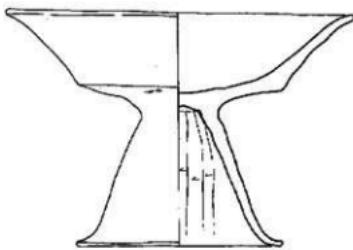
第32図 SC0007出土遺物実測図 3 (1/3)

SC0007(第29図) F-G-1区で検出した。SC0006に切られ、SC0016を切る。西側は調査区外に延びる。やや不整な正方形で、一辺約4.8mを測る。遺存は比較的良好で、壁は35cm前後を測る。主柱は4本柱と考えられ(P1～P3)、西側の1本は調査区外に位置するものと考えられる。柱穴掘方は小規模な円形もしくは梢円形で、径25～35cm、深さ50～55cmを測る。壁際には断面V字形の狭小な壁溝が巡る。土層観察から板状の材を壁面に立てていたものと推定される。中央西寄りに位置し、断面浅皿状を呈するP4の壁面には焼土が認められ、炉と考えられる。また、比較的大きな掘り込みに東側コーナーに位置するP5、東壁沿いのP6がある。前者は隅丸方形プランで、深さ30cmを測り、後者は隅丸長方形プランで深さ25cmを測る。なお、床面に貼床は認められなかった。

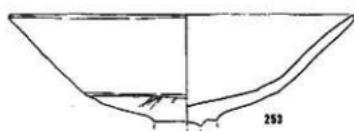
出土遺物(第30図～第34図) パンケース10箱近い多量の遺物が出土した。SC0006の項で前述したように前後関係の確認時に両者の遺物が上層で混在しており、ここでは中層(土層図の略4～6層に該



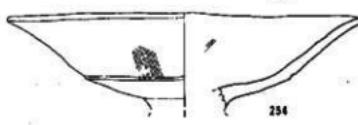
251



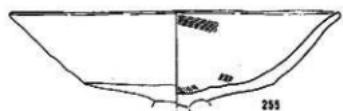
252



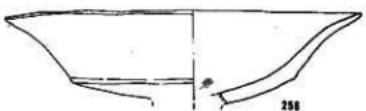
253



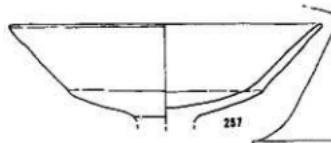
254



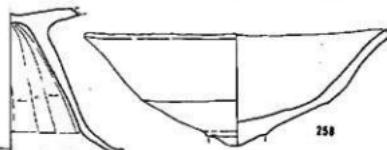
255



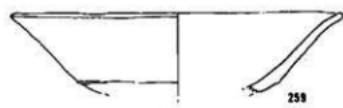
256



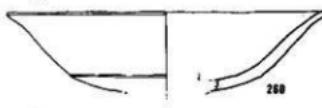
257



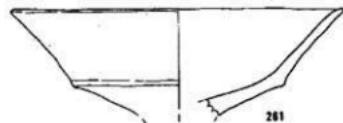
258



259



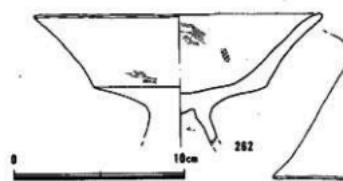
260



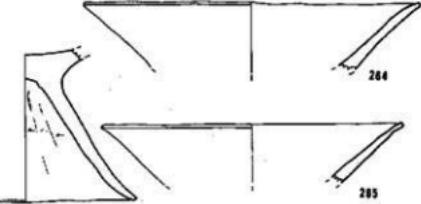
261



262



263



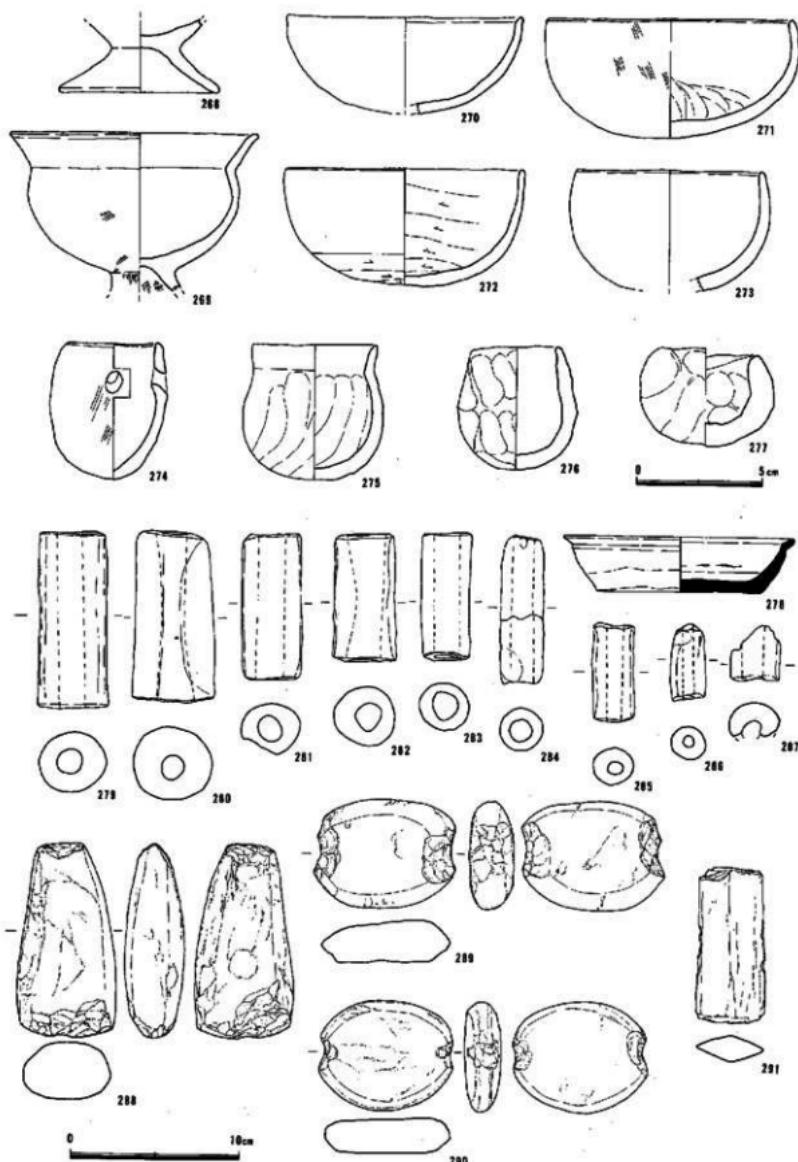
264



265



第33図 SC0007出土遺物実測図 4 (1/3)



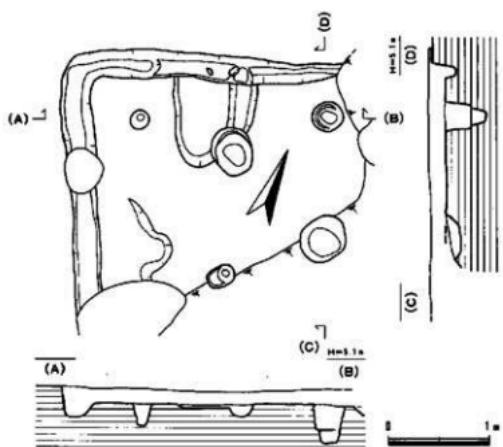
第34図 SC0007出土遺物実測図 5 (274～277は1/2、他は1/3)

当)、下層(同じく7・8層に該當)として取り上げた遺物について記述する。土師器壺・煮・高杯・壺・タコ壺、土鍾等が出土した。

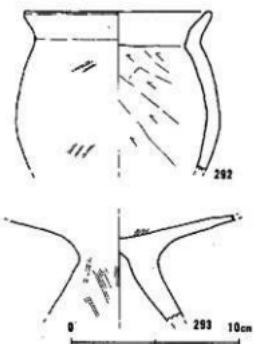
216~230は壺である。216~219は丸味を帯びる体部に内湾気味の口縁部を有する。復元口径は15.8cm~16.6cmを測る。体部外面は縦方向の刷毛目、内面はヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデを施す。216は口縁部上面が平坦をなし、端部内面はつまみ出す。217の口唇部は強いヨコナデによって凹面を形成し、端部内面は浅くつまみ上げる。P6から出土した。218は口縁部上端面が僅かに内傾し、緩い凹面をなす。端部外面は口縁部下のヨコナデにより鈍く突出する。219の口唇部は面をなす。220~223の口縁部は直線的に外反する。220は口縁端部が緩く外方に屈曲する。内面に接合痕が残る。221はナテ肩の体部に外反の度合いの緩い口縁部がつく。222は220に口縁部形態が類似するが、肩の張りが大きい。223は球形の体部に僅かに反る短い口縁部を有し、内面肩部には輪状に接合痕が残る。器壁は厚手である。224~230は小型の壺である。224は球形の体部に反り気味に外反する口縁部と続き、端部は丸く収める。内面の屈曲部は緩い稜がはしる。225~229は「く」字状に外反する口縁部を有する。225は肩の張りが弱く、外面には細かい刷毛目を施す。226~229の口縁部は長めで、端部を尖り気味に収める。230は225に体部形態が類似するが、頸部の屈曲が緩く、口縁端部は外方に丸くつまみ出す。外面は刷毛目を施し、口縁部は粗くナデ消す。口縁部内面は横方向の刷毛目を残し、頸部下にはヘラ削りを加える。

231~250は壺で、このうち231~236は複合口縁の大型・中型壺である。231は緩く外反する口縁部下に直線的に開く上半部を有し、端部を僅かに外反させる。復元口径24.1cmを削り、器壁は厚手である。232は頸部より強く外反させ、直線的な口縁部を上半にのせる。端部は面取りされる。内面の頸部下にはヘラ削りを施す。233は頸部から稜をもって外反し、直線的に上方に立ち上がる。立ち上がりの下半は強いヨコナデによって窪む。234~236の口縁部上半は反り気味に外反し、屈曲の稜は緩い。体部内面はヘラ削りする。235の口縁部下半は頸部より緩く外反し、上半は反り気味に開く。端部は面取りされる。外面の稜は緩く丸味を帯びる。237~250は小型の壺である。237~239は長頸の壺で、237の体部は球体を呈し、肩部内面には接合痕が残る。239は頸部にしまりがなく、胴部の張りが大きい。238は球体の体部に直線的な口縁部が大きく開く。外面には刷毛目を施し、体部下半は丁寧にナデ消す。内面は口縁部に横方向の細かい刷毛目、頸部下にはヘラ削りを行う。240の口縁部は「く」字状に外反する。241~242は複合口縁の小型壺で、偏球形の体部に強く外反する口縁部下半がつく。上半は共に直線的であるが、241は直立気味で、242は外方に開く。243~250は小型丸底壺である。口縁部を失するものが多く、体部の形態は偏球状を呈する。外面には刷毛目調整が残る。248~249は平底の底部を有し、頸部の継まりが弱い。250は下膨れで、体部高が低い。

251~267は高杯で、杯部は体部下半で屈曲し、外反気味に大きく開く口縁部を有するものが多い。内外面に器面が風化するものが大半で、色調は黄橙色もしくは淡赤褐色を呈する。全容を知り得る個体には251~252がある。251は復元口径18.0cm、器高11.9cmを測る。杯部の屈曲は弱く、裾広がりでやや低めの脚部を有する。口縁端部は尖り気味に収める。器面は磨滅が著しい。258も同様の杯部をなし、脚部との境界にソケット状の接合部が残る。252は262と類似した杯部をもち、明瞭に屈曲する。エンタシス状の脚部がつき、内面はヘラ削りを施す。復元口径20.4cm、器高13.9cmを測る。253~254、256~261は杯部の屈曲部に段を形成し、口縁部へと続く。263~265は接合箇所である屈曲部で欠失する。266~267は脚部のみが遺存する。266はエンタシス状を呈し、裾部に内面は稜をもって折れ、端部は面取りを施す。内面にはヘラ削りを行う。267はラッパ状に開脚し、端部が緩く折れる。257~258はP6から出土した。



第35図 SC0010実測図(1/50)



第36図 SC0010出土遺物実測図(1/3)

268・269は脚付きの鉢である。269は丸味のある体部に直線的に外傾する口縁部を有する。脚部との境界に刷毛目が僅かに残る他は器面が風化する。復元口径は14.2cmを測る。

270～273は塊である。270は口縁端部を僅かに外反させる。271・273は内湾気味に収める。271は完形に近く、口径14.2cm、器高7.0cmを測る。胎土は精良で、赤褐色を呈する。273は深みのある器形で平底風の底部を有する。272は口縁部が上方に延びる。外底部にはT字状のヘラ記号を有する。

274は略完形の飯ダコ壺である。口径5.2cm、器高8.0cmを測る。口縁部は内傾させ、丸く収める。外面から内面向かって小振りの孔が穿たれる。器面が磨滅する。

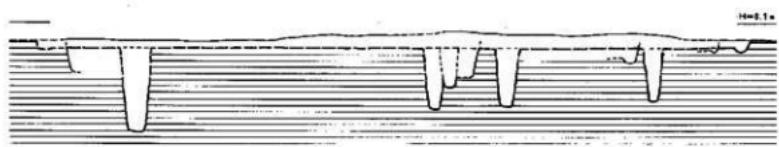
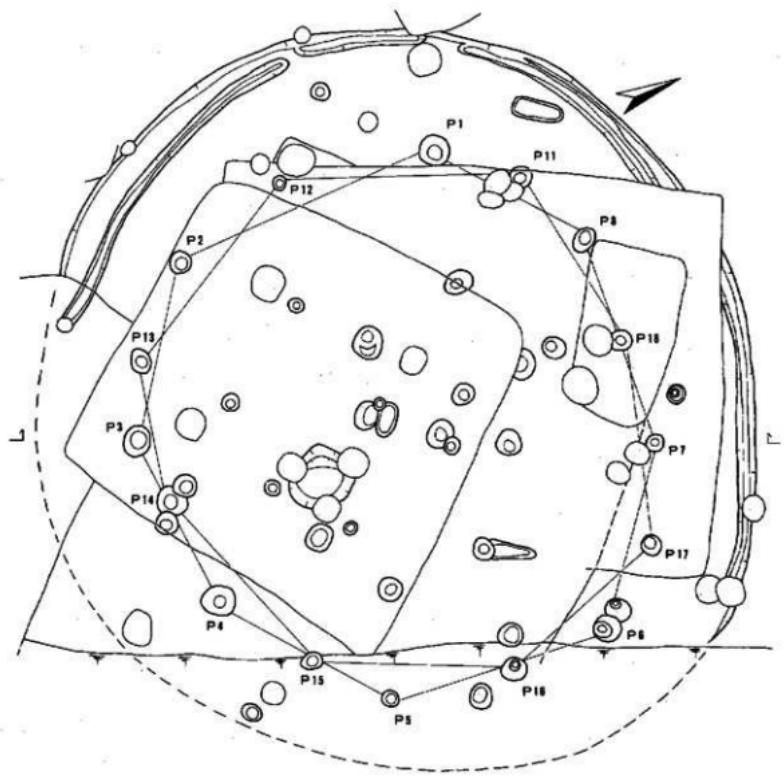
275～277は手捏ね土器で指オサエによる調整が顕著である。275は外反する口縁部を有する。276は直口の短い口縁部をつくりだす。277は塊を模した形態で、器壁が厚い。

278は陶質土器の鉢で、下層より出土した。復元口径13.4cm、器高3.3cmを測る。平底の底部に内湾気味の体部が延び、口縁部は短く外反させる。端部は丸味を帯びる。外底部は磨滅により調整が不明瞭であるが、外面の体部下半には回転ヘラ削り、上位から内面にかけては回転ナデ、内底部は粗いナデを施す。「釜山社邱洞遺跡」に類例があるが、時期的に隔絶しており、本遺構の上面で検出できなかった別遺構に帰属していた可能性が高い。出土位置からSC0006の付属ピットを推定し得る。

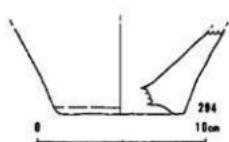
279～287は管状土錘で、筒形を呈する。大(279・280)、中(281～284)、小(285)がある。286・287は欠損品である。280は径4.7cm、重量266gを測る。

288～291は混入と考えられる石器・石製品である。288は磨製石斧で、両端部は欠損する。重量は374.9gを測る。289・290は両端部を打ち欠いた石錘で、それぞれ185.4g、156.7gを測る。291は頁岩製の磨製石剣の欠損品で、中央にやや鈍い鎌を有する。

SC0010(第35図) I-2-3区で検出した。丘陵南側斜面の端部付近に位置し、南側は段落ちによって削平を受ける。また、SK0071に切られる。P1・2を主柱穴とすると一辺3.5mを測る方形プランを呈するものと推定される。壁は15cm程度遺存し、壁際には幅20～30cm、床面からの深さ5～15cmの壁溝が巡る。なお、北壁沿いの中央には浅い掘り込みがあり、焼土・炭化物が認められた。窓部の掘り込みと推定されるが、壁体は検出されなかった。遺構の覆土は黒味の強い暗褐色土で、床面には厚



第37図 SC0012実測図(1/60)



第38図 SC0012出土遺物
実測図(1/3)

さ数cmの黄褐色土を主体とし、灰茶褐色土がブロック状に混じる貼床が薄く施される。

出土遺物(第36図) パンケース1箱弱が出土したが、細片が多い。土師器が大半で、須恵器が少量含まれる。また、臼玉未製品Bの欠損品が1点、滑石屑が50.1g出土している。

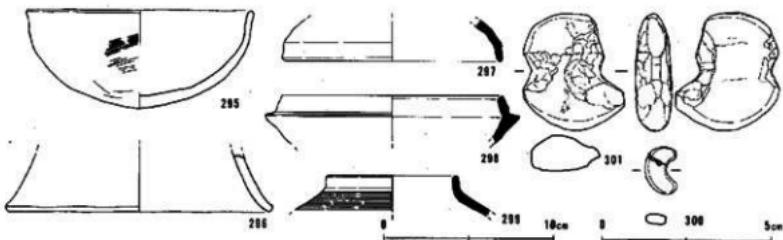
292は復元口径10.8cmを測る小型の土師器壺で、ナデ肩の体部に「く」字状に外反する口縁部が付く。内面にはヘラ削りを施す。293は高杯で、坏部は屈曲部上位が欠失する。

SC0012(第37図) F・G-2区で検出した。SC0002・0004・0075・1005・1006、SK0074に切られ、また、西側壁は段落ちによって削平を受けるため、壁際及び柱穴が遺存するにとどまる。円形プランを呈し、径は復元で約9mを測る大型堅穴住居である。今回の調査では弥生時代唯一の遺構である。壁は10~20cm遺存し、幅15~20cm、床面からの深さ5~10cmの浅い壁溝を断続的に設ける。本遺構の東西で調査区分が分断しており、主柱穴の復元は図上で実施した。その結果、P1~P8及びP11~P18の8本柱による建替えが想定できた。双方に重複がなく、前後関係は確定できない。なお、床面で検出した主柱穴はP1・6のみで、他はSC0012を切る遺構の床面で検出したもののうち出土遺物等を勘案し、抽出したものである。柱穴は円形を呈し、床面と推定される位置からの深さは25~90cmを測る。西側の柱穴は深く掘り込まれる。遺構覆土は灰茶褐色土を主体とし、床面には黄褐色土に茶褐色土ブロックの混入する貼床が10cm弱施される。

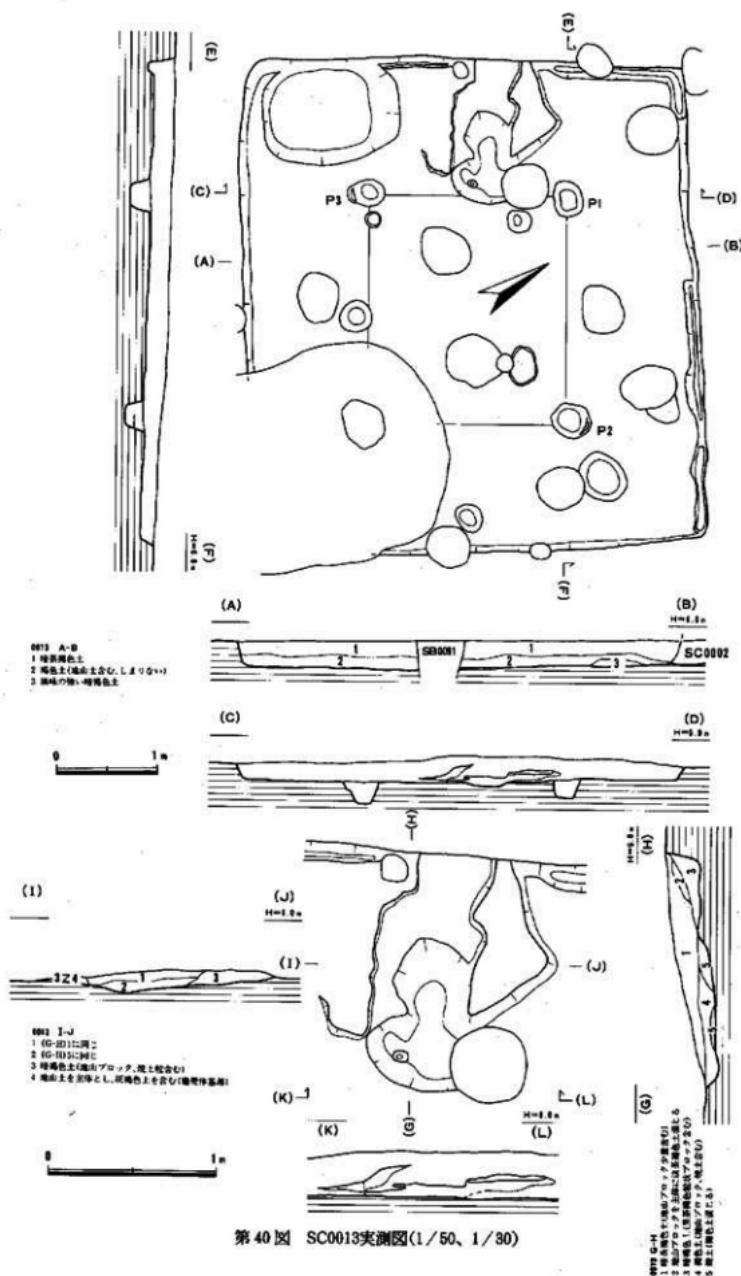
出土遺物(第38図) 出土遺物には弥生土器、黒曜石があるが、細片が大半を占める。また、繩文土器の粗製深鉢の混入が目立つ。294は弥生土器の壺底部で、端部は丸味を帯び、上げ底状を呈する。復元底径6.6cmを測り、外面は刷毛目と思われる僅かな条線が観察できる程度で、器面は風化が進む。

SC0013(第40図) G-2区で検出した。SC0002を切り、SK0082及びSB0091の柱穴に切られる。南北4.5m、東西4.9mを測る方形プランを呈する。壁は15~20cm残存する。主柱は4本柱と考えられ(P1~P3)、南側に想定される柱穴はSB0091の柱穴によって切られ遺存しない。柱間は南北2.0m、東西2.2mを測り、平面プラン同様に東西がやや長い。柱穴は円形で、径40cm、深さ20cm前後である。西壁及び北壁沿いには幅10cm、床面からの深さ5~7cmの壁溝が巡る。西壁の中央部には竈が設置されるが、その背面及び北壁の中央部では壁溝が途切れる。なお、貼床は施されない。

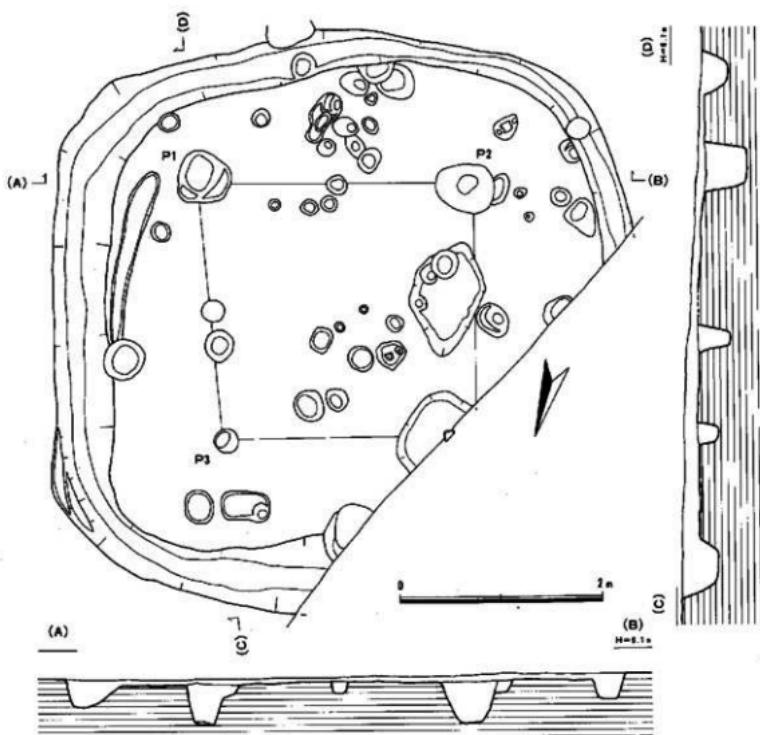
竈の遺存状況は悪く、袖部の崩壊が著しい。I-J4層は袖基部、同3層は袖の流出土と考えられるが明確な識別は困難であった。袖先端30cmから焼成部に向かって深さ5cm程浅く掘り込まれ、下層には焼土の堆積が認められた。



第39図 SC0013出土遺物実測図(300は2/3、他は1/3)



第40図 SC0013実測図(1/50、1/80)



第41図 SC0014実測図(1/50)

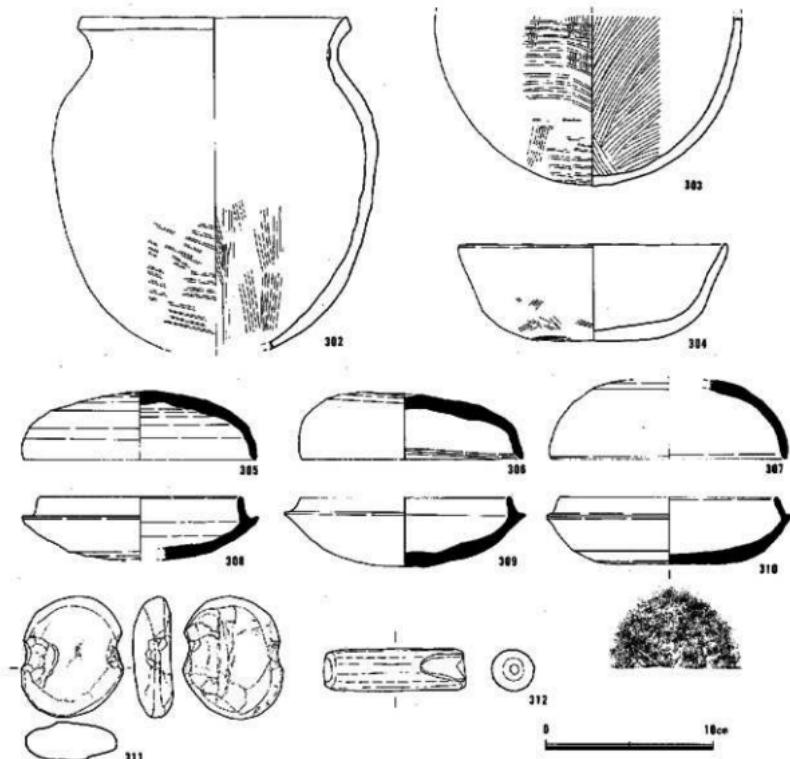
出土遺物(第39図) 土師器、須恵器、滑石が出土した他に弥生土器、縄文土器が混入する。

295・296は土師器である。295は壺で口縁部は僅かに外反させ、端部は丸く收める。外面の下半はヘラ削り、上半は刷毛目をナデ消し、内面はナデる。復元口径13.2cm、器高5.8cmを測る。296は高環脚部の壺で、内外面に磨滅する。

297～299は須恵器で、いずれも細片から復元図化したものである。297は壺蓋で、口縁部と天井部の境界は不明瞭に折れ、端部は丸味をもつ。内外面は回転ナデ調整である。復元口径は12.6cmである。298は壺身で復元口径13.0cmを測る。内傾する低い立ち上がりを有し、端部は内傾する鋭い面をもつ。内外面に回転ナデが施される。299は、短頸壺である。外面の肩部はカキ目、他は回転ナデで調整する。復元口径は7.8cmを測る。

300は滑石製勾玉で、孔の部分で折損する。断面は扁平に仕上げる。重量は0.6gを測る。他に白玉1点、滑石屑34.2gが出土した。

301は混入と考えられる砂岩製の石錘で、円錐の両端を打ち欠き、切込みをつくりだす。端部は欠失する。重量は95.5gを測る。

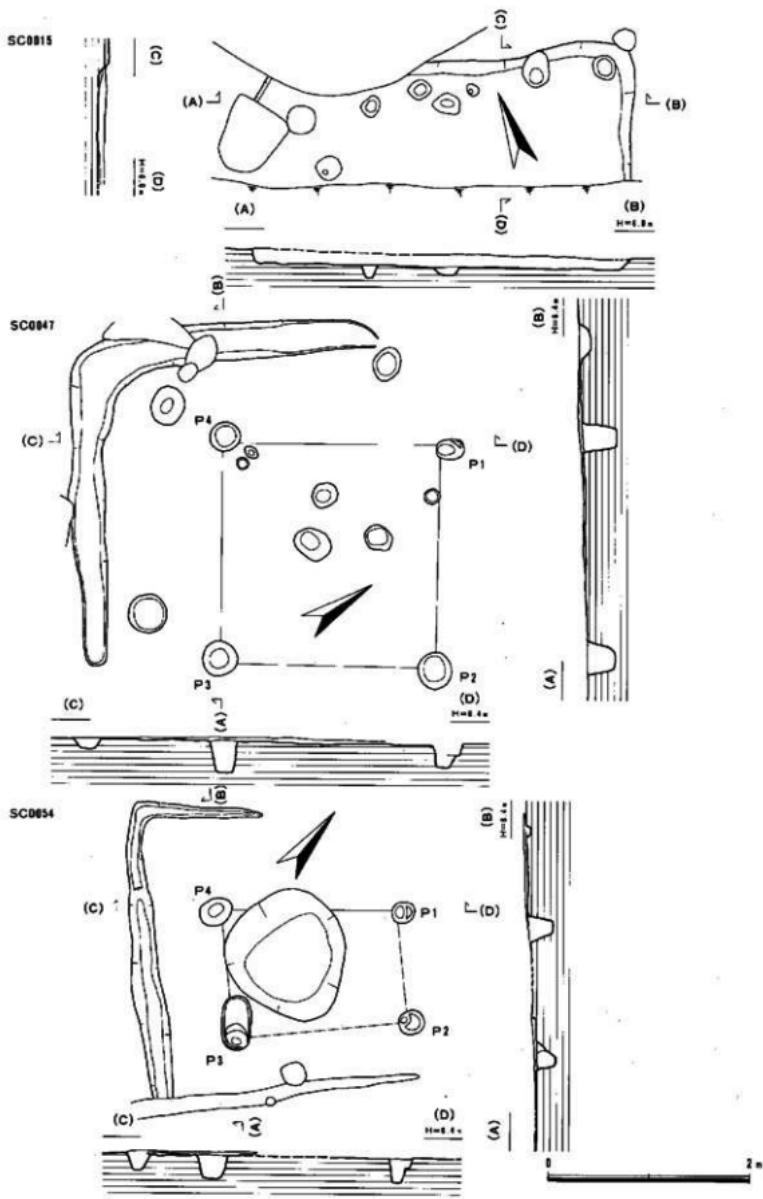


第42図 SC0014出土遺物実測図(1/3)

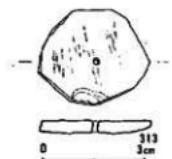
SC0014(第41図) H-G-1区に位置する。SC0015を切り、北西コーナーは調査区外に延びる。一辺5.8mを測る隅丸の正方形プランを呈し、壁は5~15cmしか遺存しない。主柱は4本柱と考えられ(P1~P3)、北西側の柱穴は調査区外に位置すると思われる。床面では多数ピットを検出したが、住居と類似した覆土のため上面での検出漏れが含まれると考えられる。柱穴は径20~55cm、深さ20~40cmを測るが、P3のみ規模が小さく疑問が残る。壁際には幅20~70cmのかなり幅広で、断面逆梯形を呈する床面からの深さ20cmの壁溝が設けられる。また、北側の床面のみに黄褐色土を主体とする貼床が薄く施される。なお、調査区中では甕は検出されなかった。

出土遺物(第42図) 土師器、須恵器、土鍬等の他に滑石屑が21.6g出土した。

302~304は土師器で、302・303は臺である。302はナデ肩の体部に外反する短い口縁部を有し、口唇部は面をなす。最大径の位置は胴部の上位にあり、底部に向かって緩くそぼまる。器面の上半は磨滅するが、胴部下半の外表面は横方向の叩き、内面は縦方向の刷毛目が残る。胎土には砂粒が多く含まれる。復元口径は15.6cmを測る。303は底部で302と類似した調整、胎土を有する。304は鉢である。や



第43図 SC0015・SC0047・SC0054実測図(1/50)



第44図 SC0015出土
遺物実測図(2/3)

や丸味のある平底の底部から外方に直線的な口縁部が延びる。外面の底部と体部の境界付近に刷毛目が僅かに観察できる程度で磨滅する。
305～310は須恵器で、305～307は壺蓋である。天井部外面に回転ヘラ削り、内面はナデ、他は回転ナデを施す。305は天井部と口縁部の境界に鈍い幅広の沈線が巡る。復元口径は13.6cmを測る。306は焼き歪みにより変形する。口縁端部内面には浅い段状の沈線が巡る。307は天井部と口縁部の境界は丸味を帯び、端部は丸く収める。軟質な焼成である。復元口径は13.8cmを測る。308～310は壺身である。外底部は309を除いて回転ヘラ削り、内底部はナデ、他は回転ナデで仕上げる。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。復元口径は11.9cm～12.8cmを測る。309の外底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。310はやや軟質な焼成である。

311は砂岩製の両端打ち欠きの石錘である。重量は122.7gを測る。

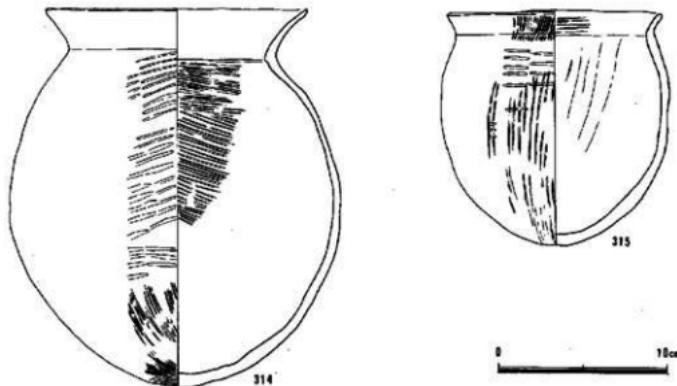
312は管状土錘で長さ8.4cm、径2.5cm、重量52.0gを測る。

SC0015(第43図) H-1区に位置する。北西コーナーをSC0014に切られ、南半部は段落ちによって削平される。東西3.7mを測り、壁は10cm程度遺存するのみである。主柱穴は明確にできなかった。覆土は暗褐色土である。

出土遺物(第44図) 土師器、須恵器が数点出土したが、細片が多い。313は滑石製有孔円盤で、両面及び側面を研磨する。重量は7.8gを測る。他に覆土中より滑石屑が35.3g出土している。

SC0016(第29図) G-F-1区に位置する。北側及び南側コーナーを除いてSC0007に切られ、全容は不明である。推定で一辺5.5mを測る正方形のプランを復元できる。壁は25～30cmが遺存する。なお、北側コーナー部分と南側は別造構の可能性もあるが、共に貼床が施され、床面のレベルが一致することから同一造構として取り扱う。南側では貼床面上で南西壁沿いに狹小な壁溝及び南東壁沿いに方形と思われる掘り込み(P1)等を検出した。また、貼床除去後の床面では赤刷りで示した壁溝を検出した。この壁溝は深さ5cmで、コーナーより南側へ延びるSD0079(後述)の底面とレベルを同じくし連結する。住居の建て替えによるものと考えられる。

出土遺物(第45図) 住居覆土からは土師器がビニール1袋程度出土したが細片である。314・315は

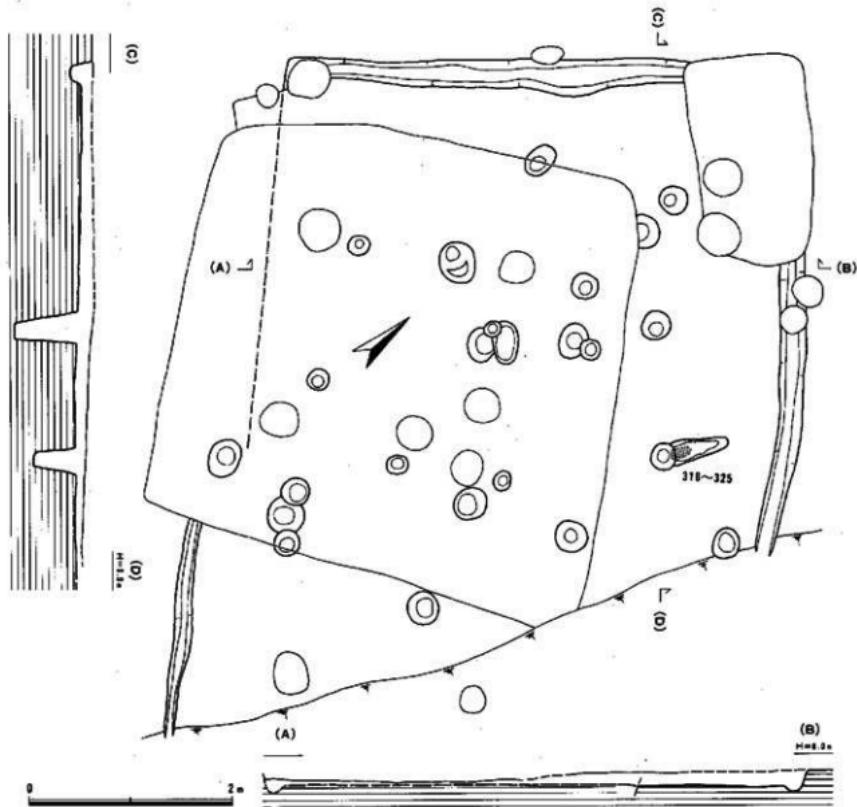


第45図 SC0016出土遺物実測図(1/3)

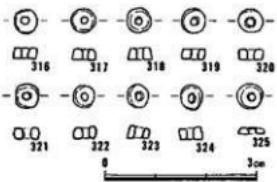
付属施設と考えられる P1 より出土した土師器甕である。314は復元口径15.4cm、器高22.2cmを測る。卵形の体部に反り気味に外反する口縁部が付き、端部は尖り気味に收める。外面の底部・胴部の上半部には叩き、下半及び胴部内面には細かい刷毛目を施す。口縁部外面は磨滅する。315は小型の甕で、復元口径12.6cm、器高14.0cmを測る。尖底気味の底部に「く」字状の短い外反する口縁部を有する。体部の外面は横方向の叩きの後粗い縦方向の刷毛目、口縁部内外面にも刷毛目を施し、体部内面はヘラ削りする。体部下半は二次的加熱により器面が荒れる。

SC0047(第43図) E-1区に位置する。丘陵尾根線上に位置するため削平が著しく、柱穴及び西側の壁溝が L 字状に遺存するにすぎない。壁溝は幅25~40cm、深さは5~10cmを測る。主柱は円形を呈する P1 ~ P4 の4本柱で、深さは20~35cmである。出土遺物には土師器、須恵器の細片が少量ある。

SC0054(第43図) F-1区に位置する。SC0047の南側に位置し、同様に削平を受ける。西側壁溝及び主柱穴と考えられる P1 ~ P4 が遺存する。壁溝は幅15~30cm、深さ 5~15cm である。円形の柱



第46図 SC0075実測図(1/50)



第47図 SC0075出土遺物 実測図(1/1)

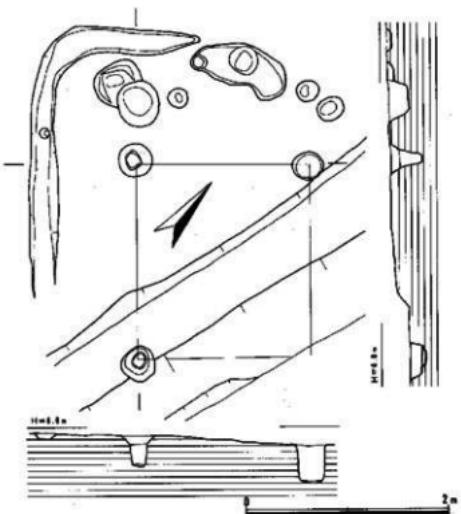
穴は深さ20~25cmを測る。遺物は土師器の細片が少量出土したにとどまる。

SC0075(第46図) F-2区で検出した。SC0004・1005・SK0075に切られ、SC0012を切る。南北5.3mを測るが、東側は段落ちにより削平を受けるため東西長は不明である。壁は10cm程度しか遺存しない。壁際には幅20~35cm、床面からの深さ10cm弱の壁溝が巡る。重複が著しく主柱穴は明確にできなかつた。

出土遺物(第47図) 土器は土師器、須恵器、弥生土器の細片が少量出土した。住居の北東部(図網かけ)では滑石製臼玉が床面において96個(うち欠損品7個)が一括出土した。法量は比較的均一で平均値は径4.5mm、厚さ2.1mm、孔径1.4mmを測る。316~325はそのうちの10個体を図化したものである。

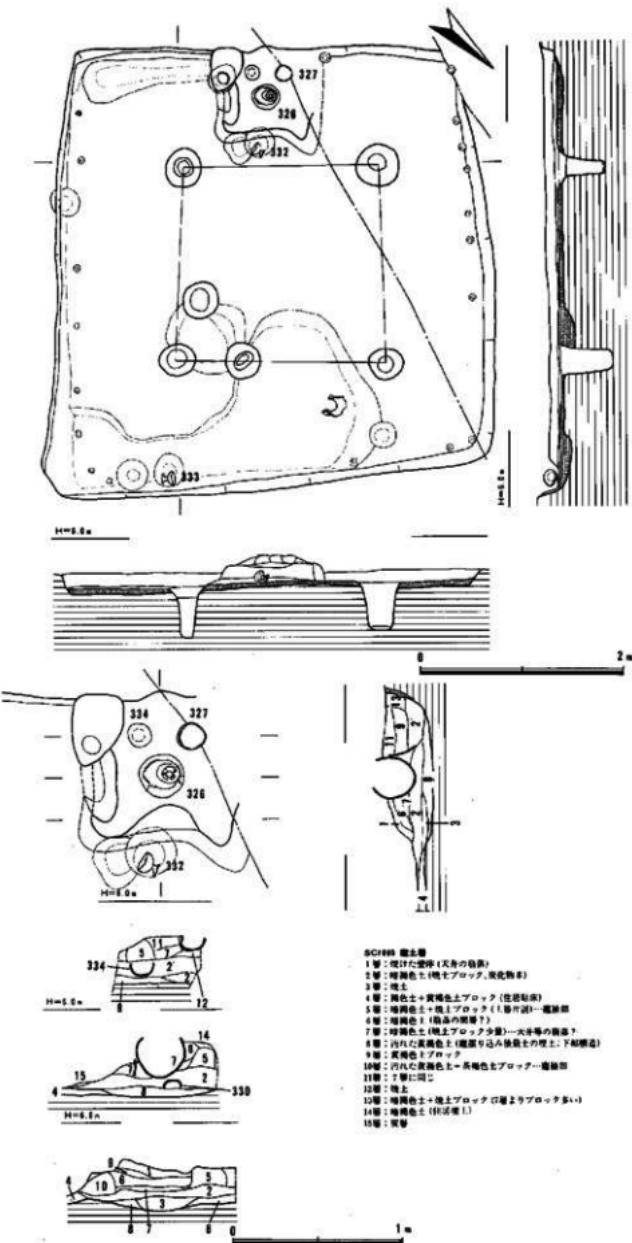
SC1001(第48図) E-2区で検出する。削平により西側コーナー部分の周溝のみを検出する。周溝埋土は暗褐色土。復元規模は南北長4.5m、東西長3.7m程度を測る長方形の堅穴住居跡であろう。主柱は4本と考えられるが攪乱により内の1本を欠失する。周溝は幅25cm、深さ5cmを測る。遺物は僅かで2次的に被熱赤変した土師器甕破片等及び臼玉未製品2個体が出土している。

SC1005(第49図) F-G-2区で検出する。SC0004・0075を切り、西側をSC1006に削平される。埋土は暗褐色土である。規模は一辺4.4mの略正方形である。主柱は4本で柱間は約2mを測る。床面には全体に5cm程の貼床が施され、これを除去すると東壁沿いに住居掘削時の不整な掘り込みを検出する。壁際には径7cm、深さ15cm程度の小ピットを検出している。壁体を支えるための杭状の施設であろう。

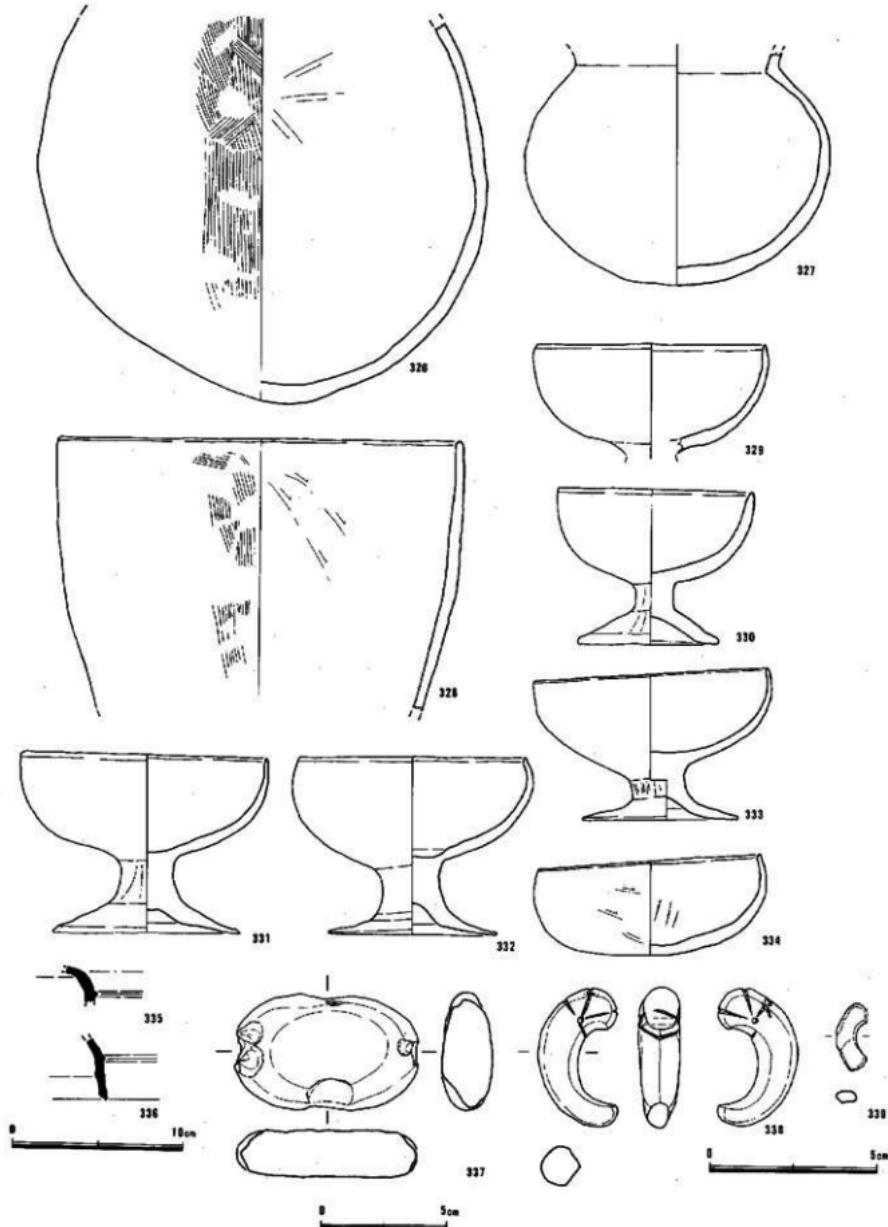


第48図 SC1001実測図(1/50)

また西壁中央部には竈が構築されている。煙道部分は住居壁より外側に広がっており、煙道を屋外に伸ばすものである。また煙道部の住居壁は熱により赤変している。竈には中央に中型の甕、右奥に小型の甕がそれぞれ懸けられたままの状態で廃棄されており、2つ懸け使用の状態を示しているものと考えられる。竈は貼床を行ったのちに構築部分を5cm程掘り進め、再び粘質土(8層)を充填して竈基底面を作っている。基底面上面に支脚となる高壙を倒立配置し、左袖下部には完形の壙を据え、炭化物・焼土を多く含む土(2層)によって作業面を形成する。この後2層上面から壁体の構築を開始している。2層形成については、竈



第49図 SC1005実測図(1/50、1/30)



第50図 SC1005出土遺物実測図(326~336は1/3、337は1/2、338・339は2/3)

構築に際しての祭祀行為が伴っていたものと考えられる。中央に据えられた甕については周囲が土器片によって固定されており、土器の取り外しを行わない所謂「はめころし」による利用が考えられる。また小型の甕については右袖部との関係が不明確であるが、焼土層(12層)を切り込んで設置されており、この上面に据えて使用したものと考えられる。更に甕前面には高坏が横倒しに据えられており、廃棄時にかかる祭祀行為の存在を伺うことができる。

遺物は床面から完形高坏3個体(内2個体図示)が横倒しで出土している。その外に土師器甕・高坏・椀・瓶、須恵器蓋・甕、石鍤が総量でパンケース7箱分出土している。また埋土から滑石製勾玉・白玉・白玉未製品等が出土している。遺物より6世紀前半に位置づけられる。

出土遺物(第50図) 326～334は土師器である。326は甕中央に懸かる甕である。削平により上半1/4を欠く。外面縦刷毛、内面板ナデによる。器壁は厚手で粗雑な印象を与える。底部付近に一方向のみ被熱により器面が変色する部分があり、甕の前面に当たるものと考えられる。全体に剥落、煤の付着等はほとんど無い。327は右袖部分に懸かる甕である。外面は全体に2次焼成のためピンクに発色し、器面が荒れている。

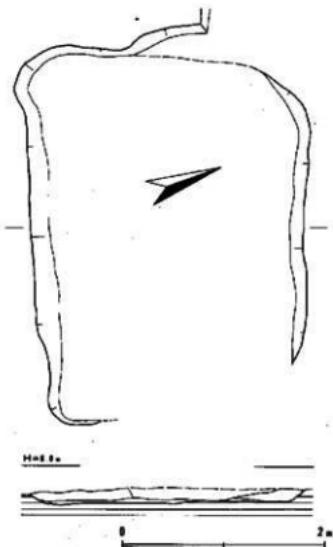
328は甕内で中央甕の固定に用いられていた箆破片である。把手部分は消失している。外面縦刷毛、内面縦方向のヘラ削りを行う。

329～333は椀形の坏部を有する高坏である。脚はいずれも短脚で、裾部は底平に広がる。329は甕内出土の破片資料である。坏部分のみ1/2程残存する。器面が荒れ調整不明瞭ながら、内面に粗いヘラ磨きが残っている。330は甕内で支脚として用いられていた物である。完形であるが、2次的な焼成により特に坏部内外面の器面の荒れが進んでいる。筒部～裾部外面に縦刷毛が残る。332は甕前面に横置してあったものである。坏部内面に横方向の磨きが残る。331、333は床面に横置された状態で

出土した。なお331は図示していないが住居ほぼ中央の床面直上で出土した。331は2次的に火を受けており、外面～脚部内面はややピンクっぽく発色し、坏部内面は荒れて剥落が見られる。状態は330に類似しており、支脚としての使用があった可能性が高い。調整は殆ど不明であるが脚部外面に痕跡的に刷毛目が残る。333は東壁沿いに横置されたものである。坏部下半には縦方向のヘラ削りが残る。坏部及び脚短部～内面に2次的な被熱の痕跡が残る。

334は甕内で基底面形成層に据えられていた完形の椀である。外底面に手持ちのヘラ削りを行う。また内面は横方向の板ナデを施している。

335、336は床面及び貼床内検出の須恵器坏蓋小破片である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部内面には明瞭な段を有する。また口縁部と天井部の境には断面三角形のシャープな突帯を有する。外面の回転ヘラ削りは境部分の近くまで施されている。



第51図 SC1006実測図(1/50)

337は砂岩製石錘である。重量95gを測る。長軸両端部を緊縛用に打ち欠き、両長側中央には紐擦れによる痕みが残っている。

338、339は滑石製勾玉である。338は床面直上出土の丁字頭勾玉である。重量12.2gを測る。339は勾玉未製品で、重量1.2gを測る。穿孔はなく、断面は偏平となる。

SC1006(第51図) G-2区で検出する。SC1005の西側を切る。東西長2.7m、南北長3.7m、深さ15cmを囲り、東壁は削平により消失する。埋土は灰褐色砂質土で他の住居跡と異なる。床面は細かな凹凸が多く、柱痕跡・焼土等は検出していない。出土遺物は土師器壺・碗・須恵器壺・坏蓋・はそう、白磁小破片1点が出土している。遺物・埋土等から考えて中世に属する竪穴造構と考えられるが、住居跡とする積極的な根拠には欠ける。

SC1007(第52図) F-3・4区で検出する。調査時には南半分をSC1008に削平されるものと考えられていたが、出土土器の検討及び1008出土倒置高坏(368)が位置的には1007に伴う竪穴構と考えられることなどから切り合いで逆転する可能性が高い。なお構造図は調査時の記録を掲載する。東西4.2m南北北復元長約5mの長方形を呈すると考えられる。主柱は4本柱に復元でき、柱間は心谷で2.5m及び2.7mを測る。床面中央部には2~5cm薄く貼床が行われている。貼床除去後には南半中央に隅丸長方形の土坑及び西壁添いに溝状の掘り込みを検出した。

中央部~東半の床面上を中心に土器がまとまって出土しており、出土遺物には土師器壺・壺・高坏・碗・須恵器壺・蓋・罐・鉄製刀子・鑑・滑石製白玉及び未製品がある。

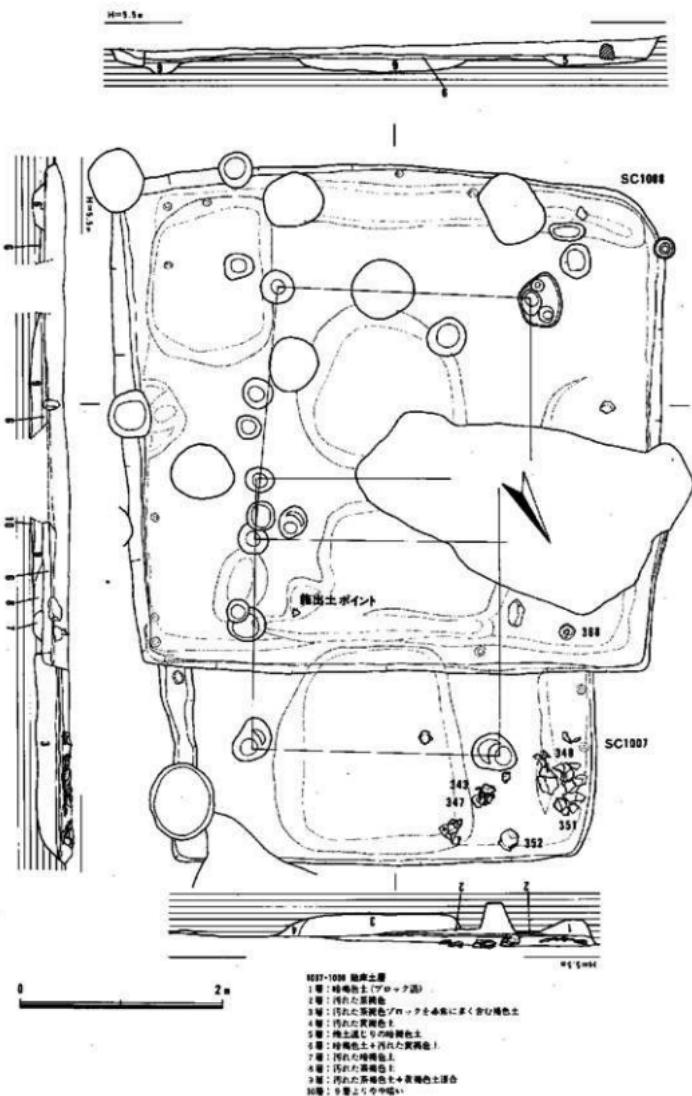
出土遺物(第53・54図) 340~353は土師器である。340、351、352は壺である。340は口縁部破片で口縁部は明瞭な稜をもたず緩やかに屈曲反転する。外面綫刷毛を行う。351は口径16.5cm、器高31.2cmを囲り、1/2残存している。口縁部は屈曲後直立し、端部付近で外半する。胴部は中位に最大径を有する球形を呈する。器壁は薄手で磨滅が著しい。内面は下半に板ナデを行っている。また胴部下半の一部に煤が付着している。352は厚手の壺である。1/2残存品であるが遠構の削平によるもので本来はほぼ完存状態であったものと考えられる。胴部は下彫れで、外面下半は2次焼成により、暗いピンク色に発色し、器壁が荒れている。内面は上半に煤の付着が見られる。調整は外面綫刷毛、内面ヘラ削りによる。

341~345は碗である。いずれも器面の磨滅が著しい。身が深く口縁部が如意形に端部を外半させるもの(341、342)と相対的に身が浅く端部を内湾させ窄めるもの(343~345)の2類がある。341は磨滅が著しいが外面下半縦方向のヘラ削り、上半横ナデによる。342は磨滅破損が著しい。343は外面に2次の被熱によるものか、赤変が見られる。内面は暗褐色を呈する。345も外面の一部に被熱赤変部分が存在する。344は明るい赤褐色を呈する。

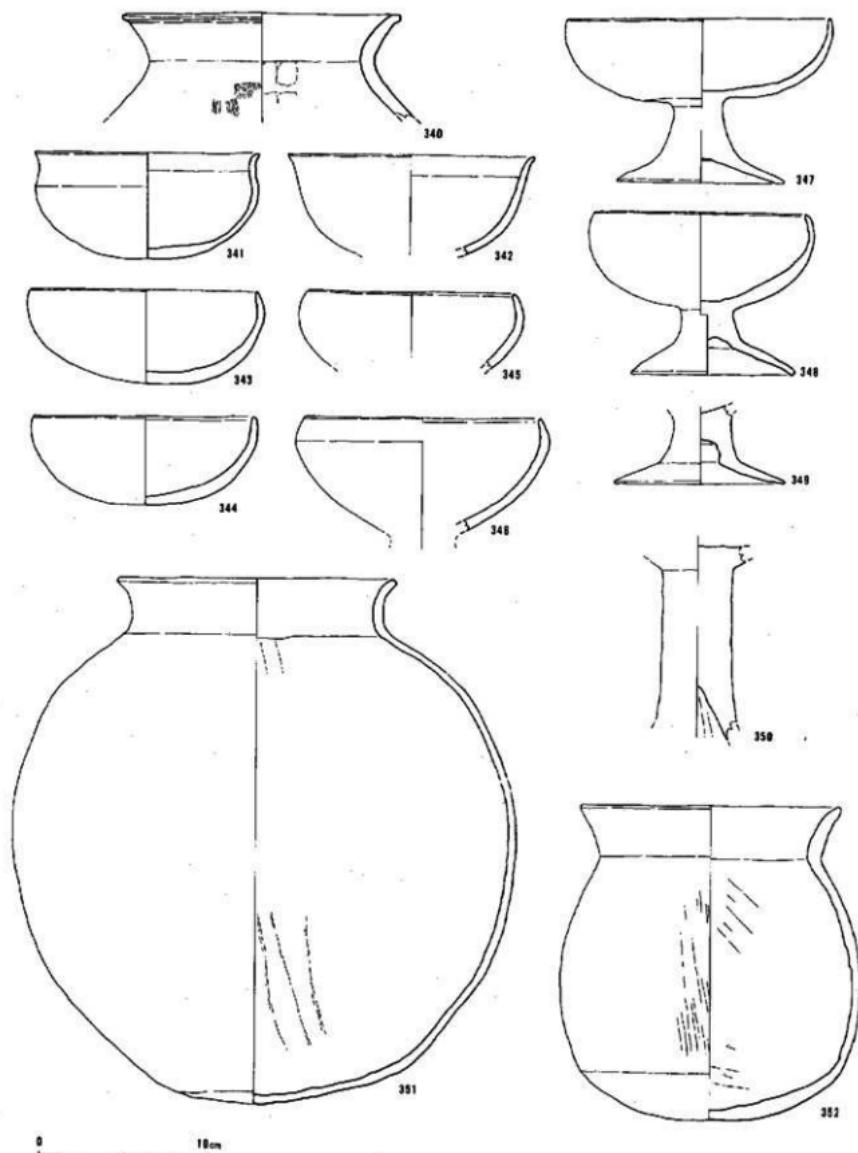
346~350は高坏である。坏部はいずれも内湾する湾形で、多くが2次的に被熱する。支脚としての恒常的な使用があったのであろうか。346は脚部を消失する。外面は2次焼成により暗赤褐色に発色する。347は外面全体が2次焼成を受ける。筒部は中実で脚部は直線的に「ハ」字状に伸びる。348は筒部は短く、脚部は踏ん張り気味に内湾しながら外方に伸びる。明瞭な2次調整の痕跡は残っていない。349、350は脚部破片である。349は内外面2次焼成を受ける。内面中央部は熱が低かったためか黒く煤けている。350は長い筒部である。脚部に広がる部分までは中実である。磨滅のため判然としないがこれも2次焼成を受けている。

353は壺である。口縁部は直立して端部を丸く納める。外面は2次的に焼成を受ける。また把手は挿入式で取り付けるもので、把手が消失しているため胴部に径2cm程度の円孔が残る。

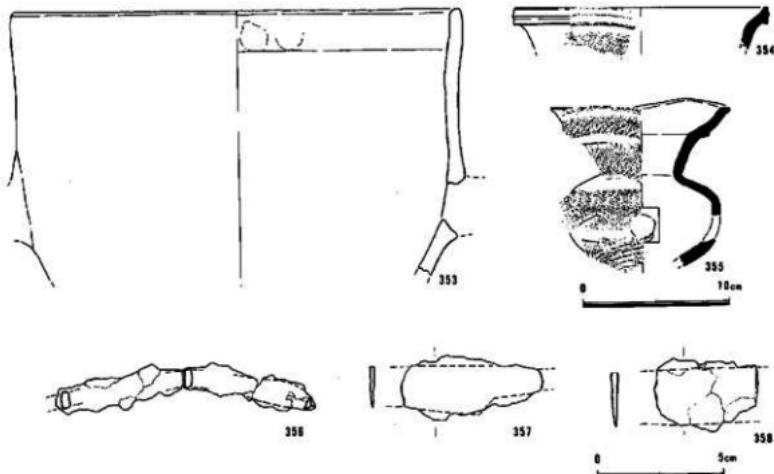
354、355は須恵器である。354は壺口縁部破片である。端部はシャープな三角形に作りだす。また頭



第52図 SC1007、SC1008実測図(1/50)



第53図 SC1007出土遺物実測図 1 (1/3)



第54図 SC1007出土遺物実測図 2 (353~355は1/3、356~358は1/2)

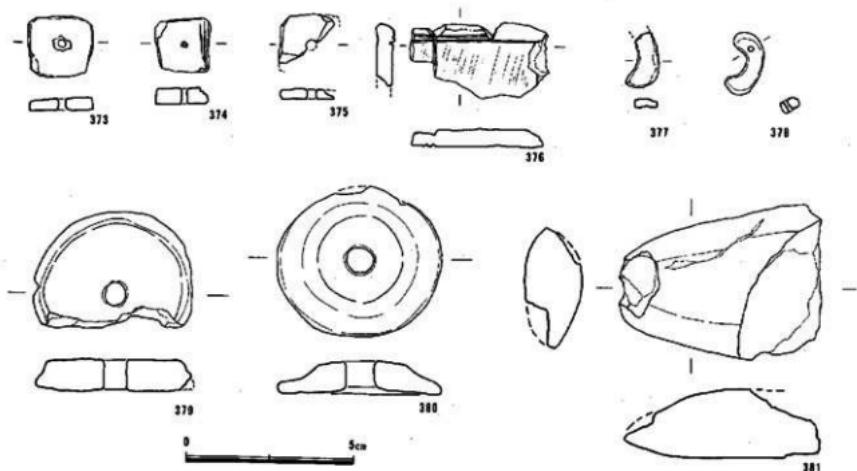
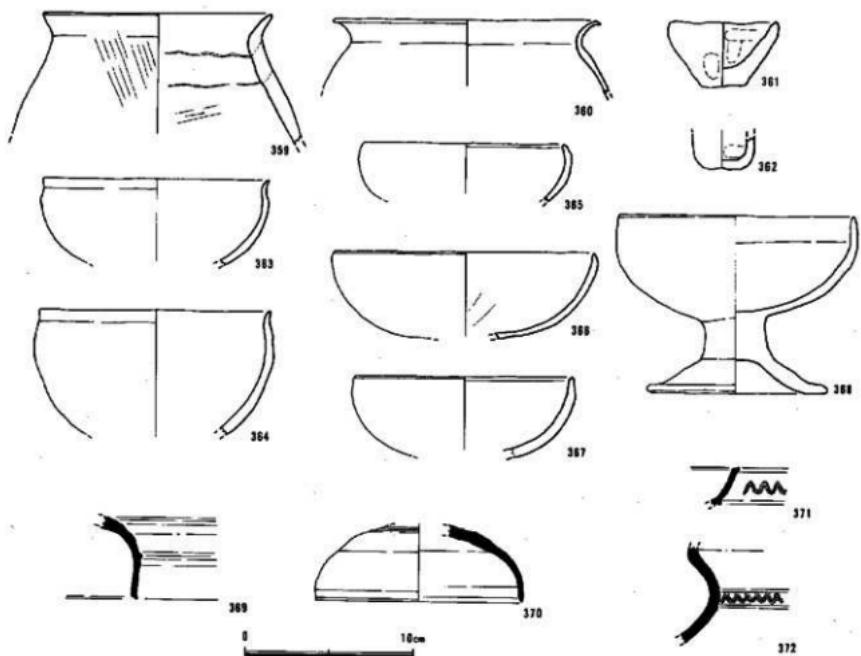
部に波状文を施す。355は甌である。口縁部は広く開き、端部は上面をナデにより压ませる。頸部は短く窄まっている。また口縁部との境に突堤を作りだす。胴部は肩が張り、扁球形を呈する。穿孔は外部上方から内部下方に向て行っている。底部付近には平行のタタキ痕が残る。口縁部・頸部・胴部の3箇所に波状文を施す。

356~358は鉄器である。356は鎧である。残存長10.3cmをはかる。茎部厚さ3mm、刃部厚さ2mmを測る。刃部には鎧を有する。357は刀子の茎部～刃部である。闊の部分は鎧により不明瞭である。358は刀子刃部破片である。鎧が多く形態は破断面観察によるものである。

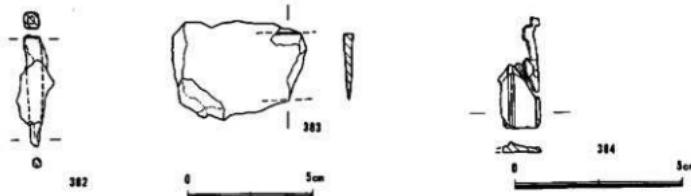
SC1008(第52図) F-3-4区で検出する。西側に大きな擾乱があり、南側はSB1023に切られている。東西長5.4m、南北長5m、深さ20cmを測る略正方形プランである。主柱は4本柱に復元でき、柱間は心々で2.5m及び2.3mを測る。西壁中央には1m×0.7mの長円形に焼土が広がり、壁近くより支脚が据えられた状態で検出された。廃棄時に竈が破壊されたものであろう。竈は貼床形成後に5cm程度掘り窓め焼土まじりの暗褐色土で再び充填して基底面を作り、その上に支脚を据えている。なお炉体は全く残っておらず、完全に破壊されている。またこの他に2個所に焼土を検出している。この内北側コーナー部分については焼土面上に脚據部が消失した高壙を倒置していた。なおSC1007の項でも述べたようにこの遺構についてはSC1007に伴う竈の可能性が高い。

住居床面全体には厚さ5cm程度の貼床を行っている。この貼床除去後に中央部及び壁沿い部分を中心的に、当初掘削された底面の土坑を検出した。貼床はこの底面の凹凸を埋め戻して全体を平坦にした後に行われている。

遺物は甌・壺・碗・高壙、手づくね土器、須恵器蓋壙、甌が出土している。また検出時に上面から青銅製鏡が出土している。混入と考えられるが、市内では東入部遺跡群第1次調査出土例に次いで2例目であり注目される。この他滑石製の紡錘車・平玉・勾玉・臼玉・未製品等が多く出土している。磁石等



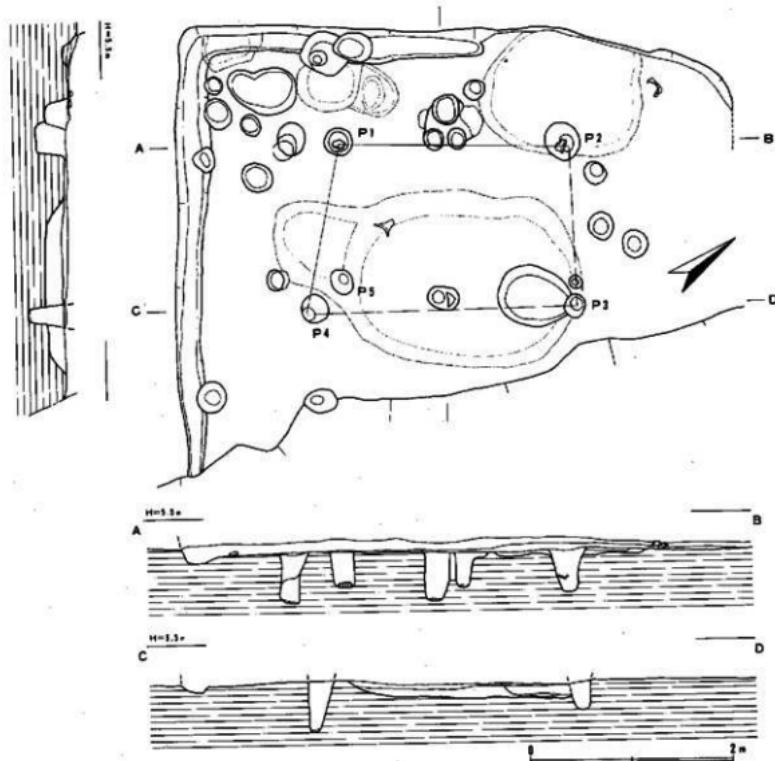
第55図 SC1008出土遺物実測図 1 (359~372は1/3、373~381は2/3)



第56図 SC1008出土遺物実測図 2 (382、383は1/2、384は2/3)

の出土がなくSC0001に見られる状況は無く工房とは考え難いが、出土量ばかりではなく種類も豊富である。

出土遺物(第55-56図) 359~368は土師器である。359、360は壺である。359は口縁部は短く屈曲反転する。また外面には粗い縦刷毛が残る。360は薄手の壺である。口縁端部は強く屈曲し、上面は横

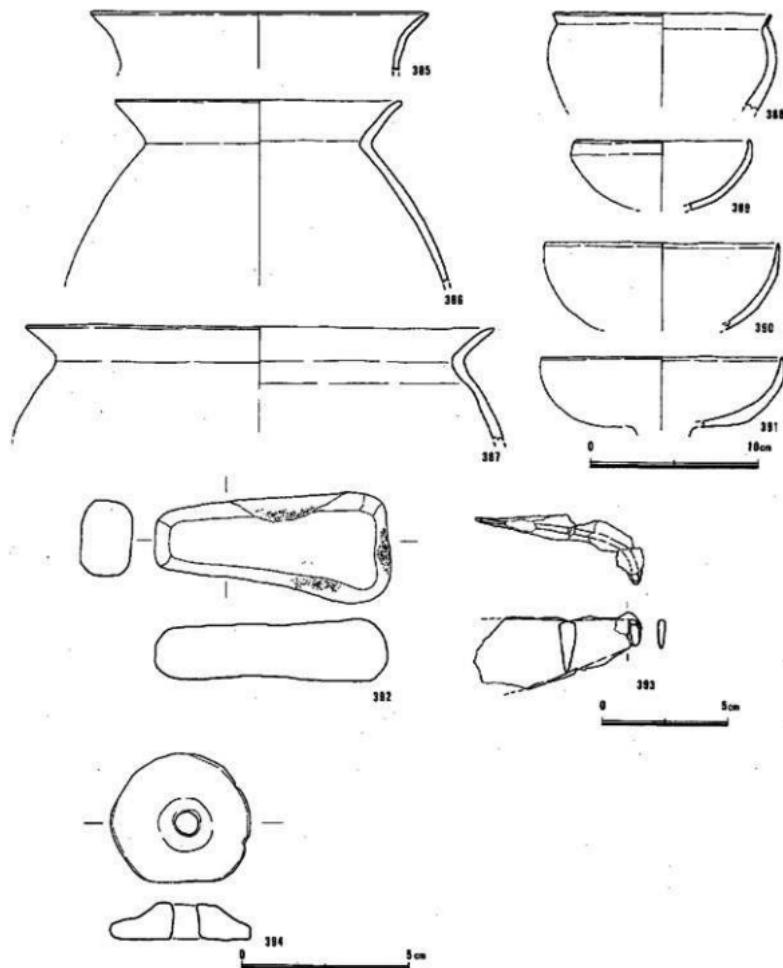


第57図 SC1009実測図(1/50)

ナデにより面取りを行う。外面にはタタキ痕が残る。

363～367は楕である。身が深く口縁部が如意形で端部を外半させるもの(363、364)と相対的に身が浅く端部を内湾させ窄めるもの(365、367)の2類がある。いずれも總じて器面の磨滅が著しく調整は不明瞭である。366は外底面に手持ちのヘラ削り、内底面に縱方向のヘラ削りが残されている。

368は北側コーナー部分床面直上で倒置状態で検出した高环である。SC1007に属する可能性も有るが、ここで説明を加える。脚部は短く低平で、环部は口縁部が僅かに内湾して納まる楕形の环を有する。外面は2次焼成を受け器面が荒れる。



第58図 SC1009出土遺物実測図(365～391は1/3、394は2/3、392・393は1/2)

361、362は手づくね土器である。鉢形を呈し、内外面に指頭痕が残る。

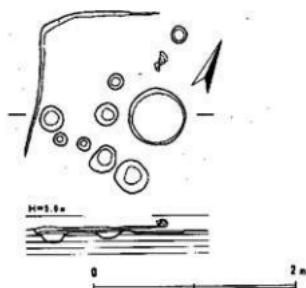
369～372は須恵器である。369、370は須恵器壺蓋である。立ち上がりはほぼ直立し、口縁端部は内側を窪ませ外方に肥厚させる。天井部との境には断面三角形の突帯を有し、天井部には境付近まで回転ヘラ削りが施される。370は天井部は丸みを有し、1/2程度に回転ヘラ削りを行っている。371は壺口縁部である。口縁端部は上面を窪ませ、口縁部外面に波状文を有する。また口縁部と頸部の境には垂下する突帯を巡らせる。372は壺胴部である。中位に2条の沈線を巡らし、間に波状文を施す。肩部には自然釉が付着する。

373～381は滑石製品・未製品である。373～375は有孔円盤の未製品である。374には折り取り用のスリットが残っている。スリットは断面シャープな三角形を呈し、鉄製刃器によるものと考えられる。またスリットによる折取は成形の初段階でありこの後穿孔→研磨の工程を踏むものであろう。なお374のスリットは3重に刻まれている。重量は373は2.5g、374は2.8gを測る。375は臼玉未製品である。板石にスリットを刻み、折取る工程中に遺棄されたものであろう。また既に石面には研磨が施されており、折取以前の板石の段階で既に研磨が行われていたことが伺える。377は勾玉未製品である。断面偏平で模造品とも考えられる。重量0.64g、378は勾玉である。重量0.92gを測る。379、380は纺錘車である。断面円錐台様で側辺部を2段に分けて研磨しているため、屈曲変換線を有する。重量はそれぞれ29.3g、26.7gを測る。381は磨製石斧の欠損品である。

382、383は鉄器である。382は錐状鉄器である。残存長4.3cm、茎部は6mm角の方形を呈す。刃先は潰れて歪みが生じている。383は鋒化が著しく不明瞭である。図面左側の部分が鋒が厚くなり鎌の基部折り曲げ部分の可能性が考えられる。刃部は幅2.6cmを有り、背部は面取りを行う。

384は上面から出土した青銅製鑄である。混入品と考えられる。削平により大きく削られており、刃部は欠損している。側辺部は湯回りが悪かったためか、歪みが生じるとともに外方に銅がはみ出ている。鋒化が著しく鎌はシャープさを欠き、側辺の肥厚も僅かである。

SC1009(第57図) E・F-4・5区で検出する。北側及び南端部を削平によって削り取られているが、復元東西長約4.5m、南北長5.5mの長方形プランの竪穴住居跡と考えられる。埋土は暗褐色土である。P1～P4の4本を主柱と想定しているが、P3・P4は住居プランに比べ西側に片寄って位置しており、P4より20cm程浅くなるが、P5が主柱となる可能性もある。またP1には根石が据えられていた。床面からは中央西より焼土広がりを検出した。また床面には4個所に円形～長円形の浅い掘り込みがあり、いずれもブロックまじりの茶褐色土により埋め戻されていた。これらは竪穴住居跡掘削時の掘り込みと考えられ、床面形成時埋め立てられたものであろう。出土遺物には土師器壺・高环・碗、



第59図 SC1010実測図(1/50)



第60図 SC1010出土遺物実測図(1/3)

須恵器蓋・壺、滑石製紡錘車・白玉・未製品がある。

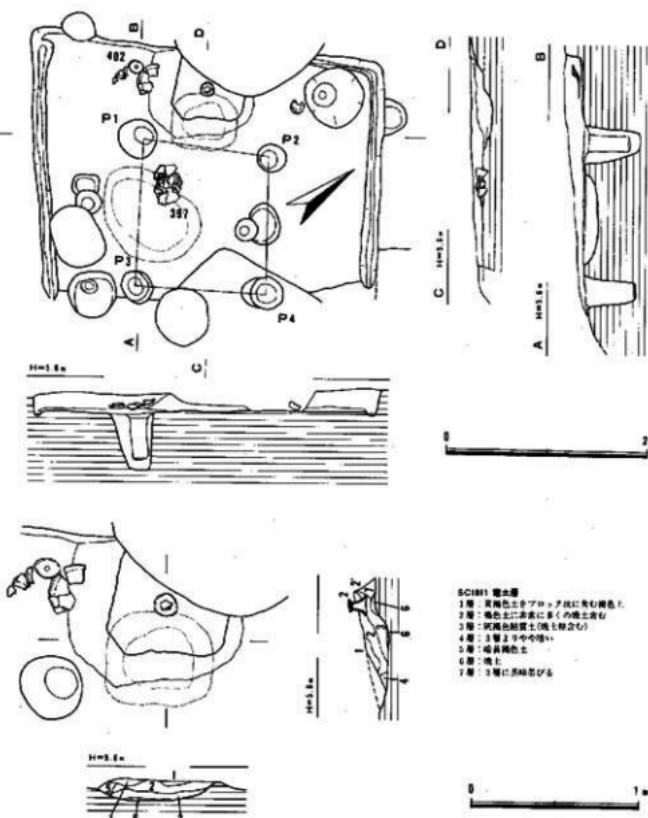
出土遺物(第58図) 385～391は土師器である。385～387は壺である。385は薄手の口縁部は辺である。386、387は口縁部は真っ直ぐ屈曲し、胴部は肩が張らない下彫れの器形である。器面は磨滅が進み調整は不明瞭である。

388～390は碗である。388は口縁部が一端窄まつた後に短く反転している。また身が深くなっている。389・390は僅かに内湾気味に口縁部を納めている。390・391は口縁部内面～外面に2次的な焼成を受ける。391は高杯である。

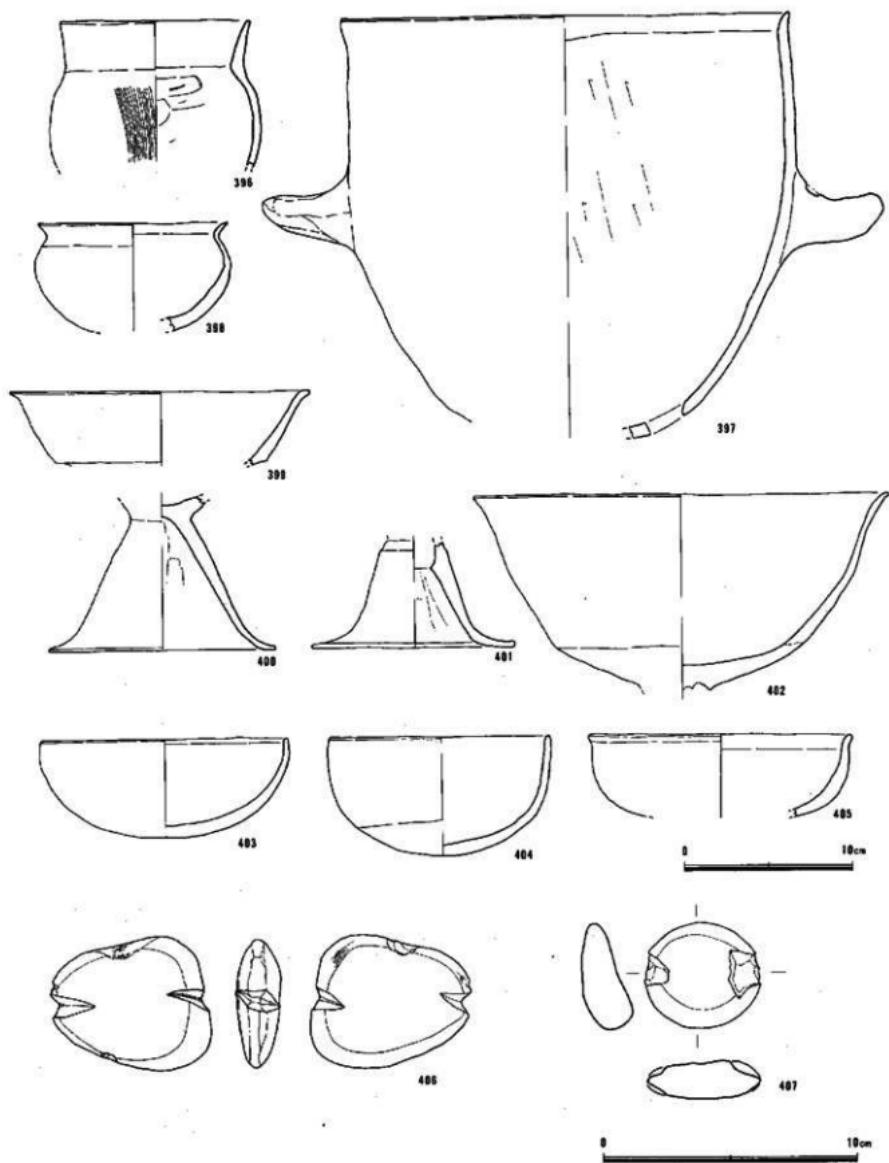
392は砂岩製の敲き石である。手持ち部分以外は各面に敲打痕が残る。

393は鉄製鎌であろうか。背部は直線的で、これに対し刃部は幅を増している。また端部は大きく湾曲し断面はほぼ長方形と成っている。僅かにメタルが残っている(H)。

394は周溝より出土した滑石製紡錘車である。略円錐台を呈し、重量25.9gを測る。



第61図 SC1011実測図(1/50、1/30)

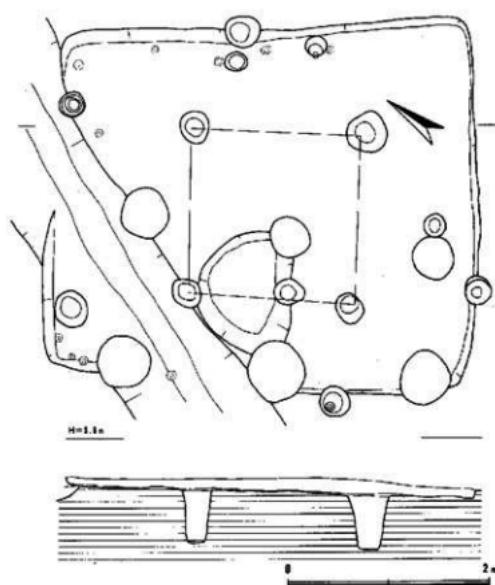


第62図 SC1011出土遺物実測図(396~405は1/3、406~407は1/2)

SC1010(第59図) G-H
-2区で検出する。削平により北西コーナー部分が残存しているのみである。残存壁高は5cm程度である。屋内施設は不明である。床面からやや浮いて須恵器壺が出土している。遺物から6世紀後半に位置づけられる。

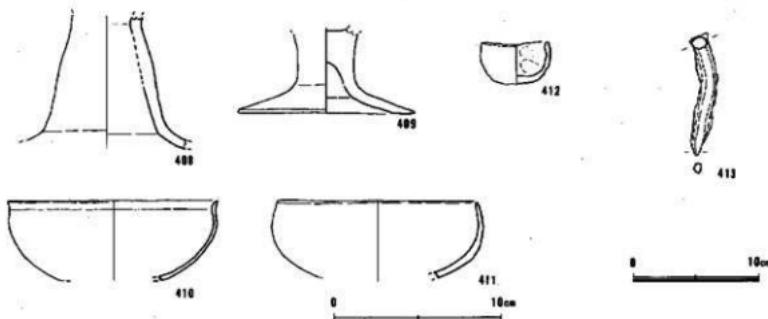
出土遺物(第60図) 395
は須恵器壺蓋である。口縁部は高く立ち上がるが、天井部と口縁部との境は明確な綾を持たない。また天井部には2/3程度まで回転ヘラ削りが行われる。

SC1011(第61図) G-2
区で検出する。南端部を削平によって欠失し、北壁中央部をSK1025、南側をSB
1052及びSC1012によって
切られている。復元東西長



第63図 SC1012実測図(1/50)

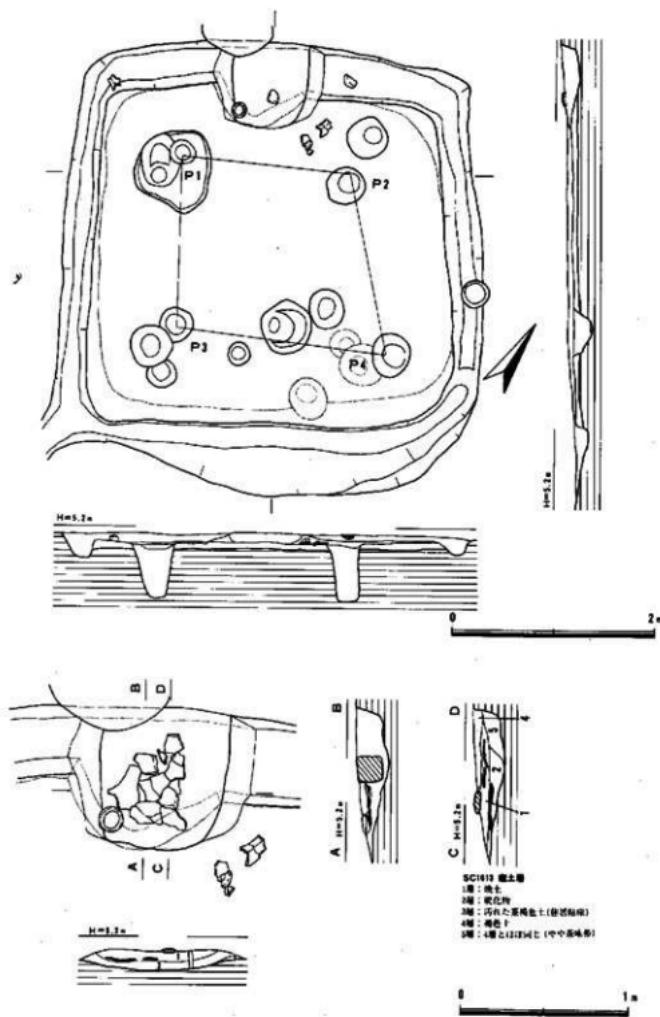
約3.3m、南北長3.4mの長方形プランを呈すと考えられる。埋土は黒褐色土である。P1～P4の4本を主柱とする。また南壁中央部に竈を作り付けている。竈は先ず燃焼部の位置に径50cm程度の浅い円形土坑を掘り込み、これに灰褐色土を充填し基底面を作る。この後支脚となる高壙を正置し、壁体を構築している。なお壁体部分は破壊を受けているため残存していない。床面には貼床は施されていないが、中央南寄りに埋土がブロックまじりの暗褐色土の土坑を検出している。SC1009と同様に床面



第64図 SC1012出土遺物実測図(408～412は1/3、413は1/2)

形成時に埋め戻されたものであろう。遺物は竈南側で壺・高杯・小型壺、竈前面で瓶1個体が出土している。その他埋土から土師器壺・壺・高杯・碗、須恵器小破片数点、石鏟が出土している。白玉及び白玉未製品が数個ずつ出土している。

出土遺物(第62図) 396～405は土師器である。396は小型の壺である。口縁部は反転後直立気味に伸びる。調整は外面縦刷毛、内面は横方向のヘラ削りによる。



第65図 SC1013実測図(1/50, 1/30)

397は竈前面から出土した多孔式の壺である。口縁部は僅かに外方に引き出して納める。把手は挿入により接合されている。また調整は内面ヘラ削りによる。

398は鉢である。胴部が一端窄まったのち口縁部は短く外反させる。明赤褐色を呈する。

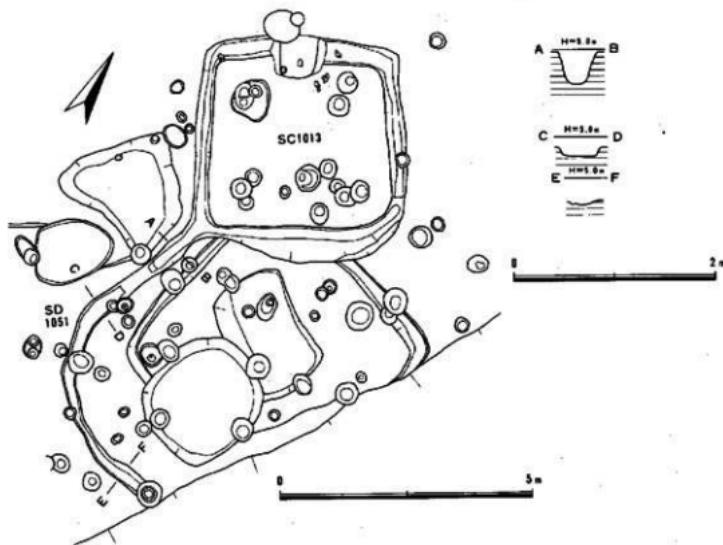
399~402は高坏である。399、402は坏部である。399は屈曲部から上部が接合部分で剥がれている。口縁部は内湾気味に伸び、端部はやや外方に引き出す。402は屈曲部より長く上方に伸び、身が非常に深くなっている。2次的な焼成は受けていない。400、401は脚部である。400は筒部が膨らみを持ちながら広がり、脚端部は明瞭な稜がなく短く外に引き出している。401は筒部が短く、脚部は内面に明確な稜を有し、比較的長めに裾を広げる。

403~405は椀である。403、404は口縁部は内湾気味に納め、405は口縁部を短く外方に引き出す。また404、405は外底面に2次的な被熱により煤が付着している。

406、407は石鍤である。406は滑石製で両小口部分に繫縛用の切り込みを入れる。切り込みは鋭利で鉄器の使用によるものか。また切り込み溝には縫擦れ痕が残る。また両長側辺は使用により瘤みが生じる。重量91g。407は砂岩製で重量40gを測る。略円形を呈し2方向を打ち欠き成形している。

SC1012(第63図) G-H-3区で検出する。北西部を現代の溝によって削平され、西半はSB1052に切られている。4.3m×3.7mの長方形プランを呈し、壁高は8cm程度である。埋土はやや茶味を帯びた黒褐色土である。主柱は4本で柱間は心々で1.6mを測る。壁添いに小ピットを検出しているが、南半では検出していない。竈・炉跡等の施設は認められない。遺物は土師器壺・壺・椀・高坏、不明の棒状鉄器が出土している。滑石の出土は殆ど見られない。

出土遺物(第64図) 408~412は土師器である。408、409は高坏脚である。408は筒部が膨らみを持ち



第66図 SC1013周辺構造配置実測図(平面図は1/100、断面図は1/50)

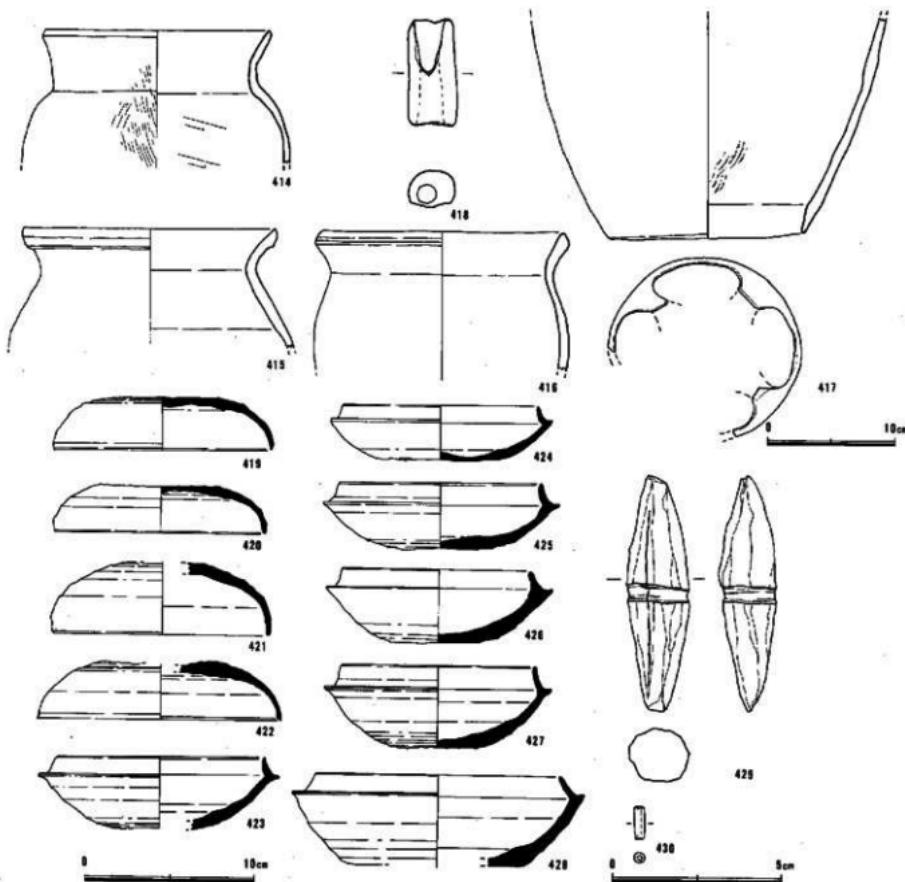
ながら広がり、脚端部は明瞭な稜がなく短く外に引き出すものである。409は低平な脚である。脚裾は内面に稜を有し、外方に広がる。

410、411は椀である。410は口縁端部を外側に引き出している。411は薄手で明赤褐色を呈する。

412は手づくねの椀である。指押さえのち横ナデを行う。

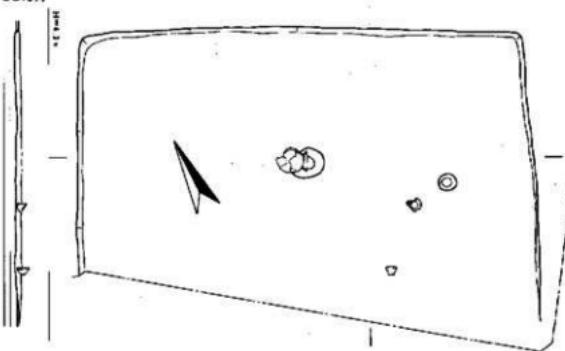
413は歪みの大きな棒状の鉄製品である。断面は上部は $6\text{ mm} \times 4\text{ mm}$ の長円形を呈する。また先端部は潰れているが、現状で径 3 mm 程度の不整な円形を呈している。錐状の鉄器若しくは製品の茎部。

SC1013(第65図) F、G・4区で検出する。北壁の一部を SB1056により削平されている。平面プランは略正方形を呈するが、南壁が大きく膨らんで広がっており、東西長4.2m、南北最大長4.4mを測る。埋土はやや茶味を帯びた暗褐色土である。主柱は P1～P4 の4本と考えられる。また床面は全体に 4 cm 程度の貼床を施している。

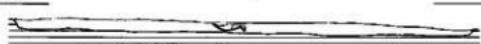


第67図 SC1013出土遺物実測図(417は1/4、414～416・418～428は1/3、429・430は2/3)

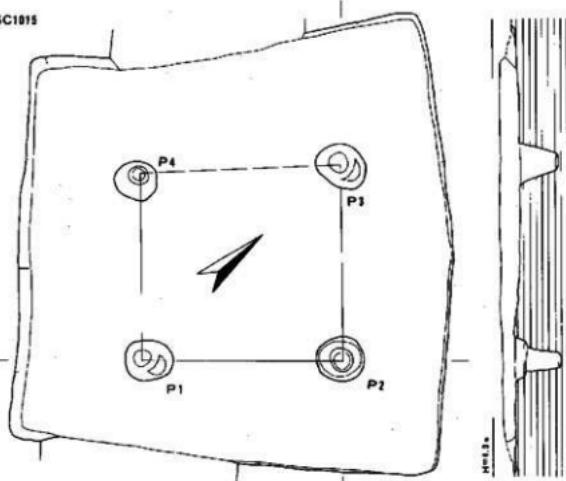
SC1014



H=4.2m



SC1015



H=4.3m



2m

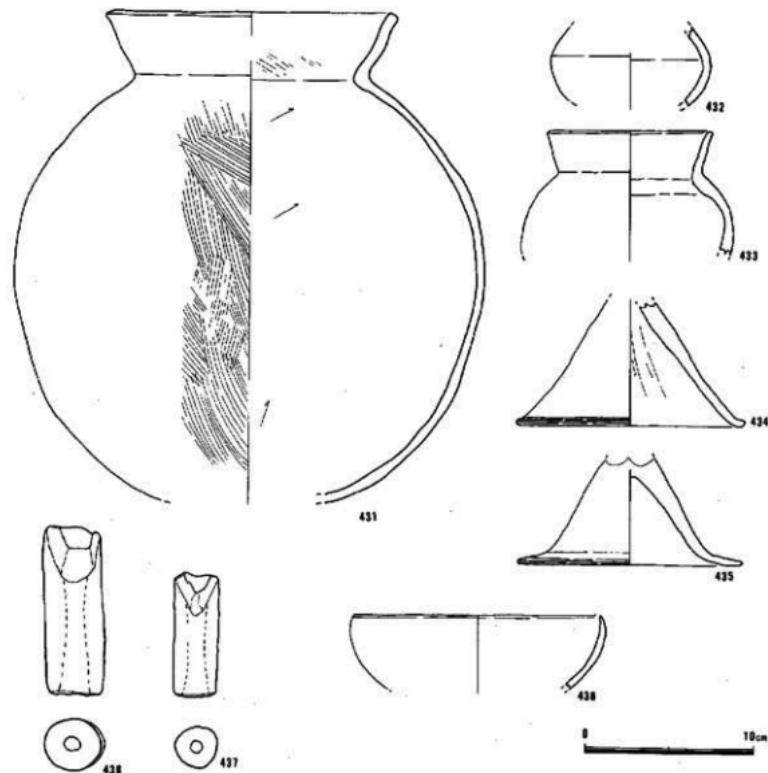
第68図 SC1014、SC1015実測図(1/50)

南壁中央部には竈が作り付けられている。構築部を浅く掘り窪め、そこに炭化物層を充填している。壁体は残存していない。支脚としては掘り方底面から据えている略円筒形の石材を用いているものと考えられる。更に炭化物層上面に竈体部破片を敷広げ、須恵器坏身を正置しており、廃棄時の祭祀行為に伴うものと考えられる。

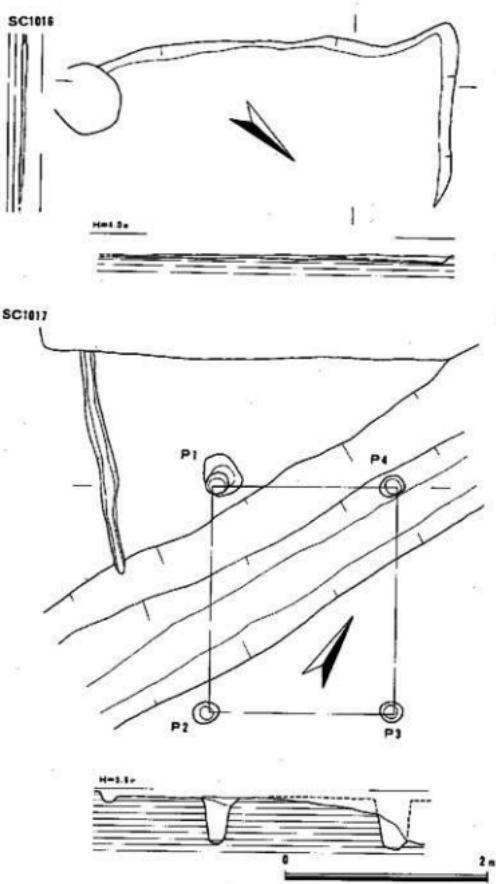
また住居周囲には周溝を巡らし、南コーナー部分から緩斜面方向に伸びるSD1051に繋がっている。これはSC1013に伴う排水溝の機能を有するものと考えられ東方向に湾曲して斜面下方に伸びている。

出土遺物には土師器壺・瓶・土錠、須恵器蓋坏・壺、滑石製白玉・石錠、管玉がある。遺物より6世紀後半に位置づけられる。

出土遺物(第67図) 414~418は土師器である。414~416は壺である。414は口縁部は外半球形に直立し、端部は先窄まりに納める。外面継刷毛、内面横ヘラ削りを行う。415は口縁端部を須恵器壺の様に玉縁を作る。頸部に横ナデを行い、肩部は張らない。2次焼成によるものか器面の磨滅が進んでいる。胴部の成形はタタキによるものと考えられる。この様な須恵器を模したかの様な器形・成形の土器は、特に壺・瓶の出土例が近年増加している。この土器に共通するのは器形・成形のみでなく、2



第69図 SC1014、SC1015出土遺物実測図(1/3)



第70図 SC1016,SC1017実測図(1/50)

次的な焼成を強く受けているものが多いことである。窯との関連もあり注目される。また出土地域は博多湾沿岸部に顕著で、特に早良平野・今宿平野の沿岸部に多く出土する。福岡市東部地域では唐の原遺跡等で出土している。また時期的にも6世紀の後半から7世紀初頭にその多くが集中しているようである。系譜的には所謂玄界灘式製塙土器へのつながりが考えられる。また本調査においてもSC0006、0014、0034等で出土している。416は器面の痛みが強く口縁端部の磨滅が進んでいるが、本来は面取りを行った断面三角形の端部を有するものであろう。胎土に砂礫を多く含む。

417は瓶底部である。底部に5ヶ所の孔を有する。また内面にタキアて目痕が残る。

418は円筒形の土錐である。1/3程度欠失しているが、重量40gを測る。

419~428は須恵器である。419~422は壺蓋である。口縁部の立ち上がりは短く、天井部との境は稜を持たない。天井部外面には2/3迄回転ヘラ削りを行う。423~428は壺身である。受け部立ち上がりは短く内側に伸びる。底部外面には2/3迄回転ヘラ削りを行う。

429は滑石製石錐である。削りにより筋縦形に作りだし、断面は略円形を呈する。中央部に溝を巡らせる。重量22.5gを測る。430は窯上から出土した碧玉製菅玉である。

SC1014(第68図) J-K-4-5区で検出する。南側を調査区外に伸ばすが、削平により残存状態は非常に悪い。東西長4.5m、南北長3.1m以上を測る。埋土はやや茶味を帯びた暗黄褐色土である。支柱、焼土等は検出していない。床面から横倒しになった土師器壺が出上している。その他土師器壺・高壺・土錐・滑石製白玉1個が出土している。

出土遺物(第69図 431~437) 431は床面中央付近で出土した壺である。本来は完形であったと考えられる。頸部に横ナデを行い、口縁部は僅かに内湾気味に伸び、端部は面取りを行う。

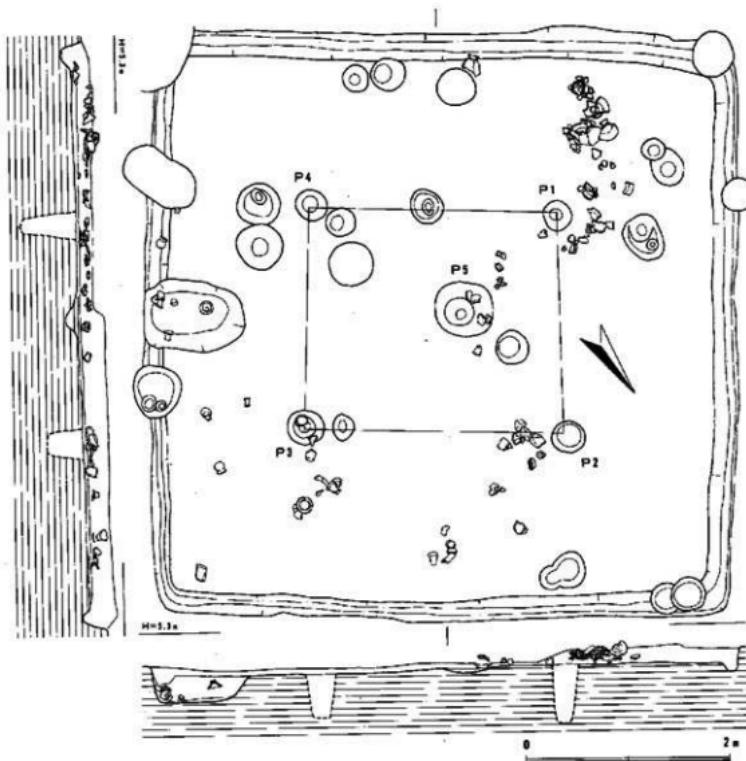
432、433は壺である。433は2次焼成を受ける。

434、435は高壺脚部である。いずれも筒部は中膨らみで外方に開く。433は内面に板状工具により横ナデを行う。434は筒部内外面に横方向の刷毛目が痕跡的に残る。

436、437はいずれも端部の一方の一部を欠く円筒形をなす土錐である。重量は436が125g、437が57gである。

SC1015(第68図) J-6区で検出する。北側コーナーは削平等により不明瞭となっているが、東西長4.2m、南北長3.8mの長方形プランと考えられる。P1～P4の4本が主柱と考えられるが、P3はやや開き気味に位置しており、北壁の広がりに関連しているのであろうか。埋土はやや茶味を帯びた暗褐色土である。遺構は削平により残存状況は悪く、壁高は2～5cmである。焼土・甕等は検出していない。遺物には土師器壺・高壺・瓶、須恵器壺小破片が若干出土しているのみである。

出土遺物(第69図 438) 土師器甕である。口縁部はやや内湾気味である。外面は2次的な焼成を受け、煤の付着及び器面の剥落が見られる。

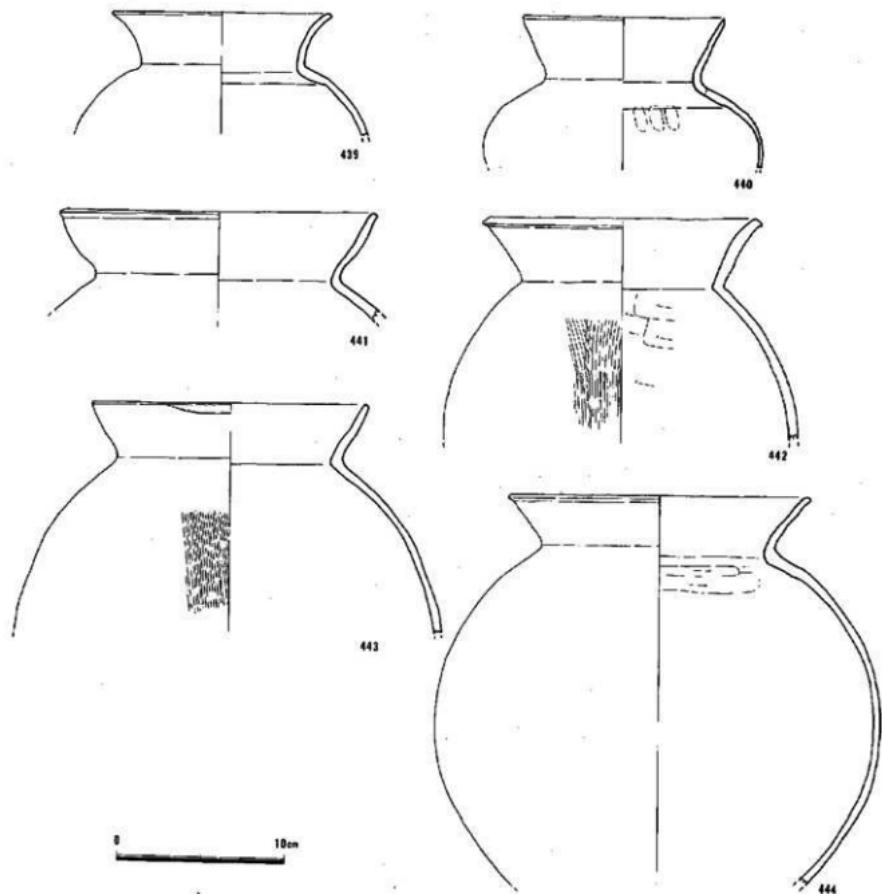


第71図 SC1018実測図(1/50)

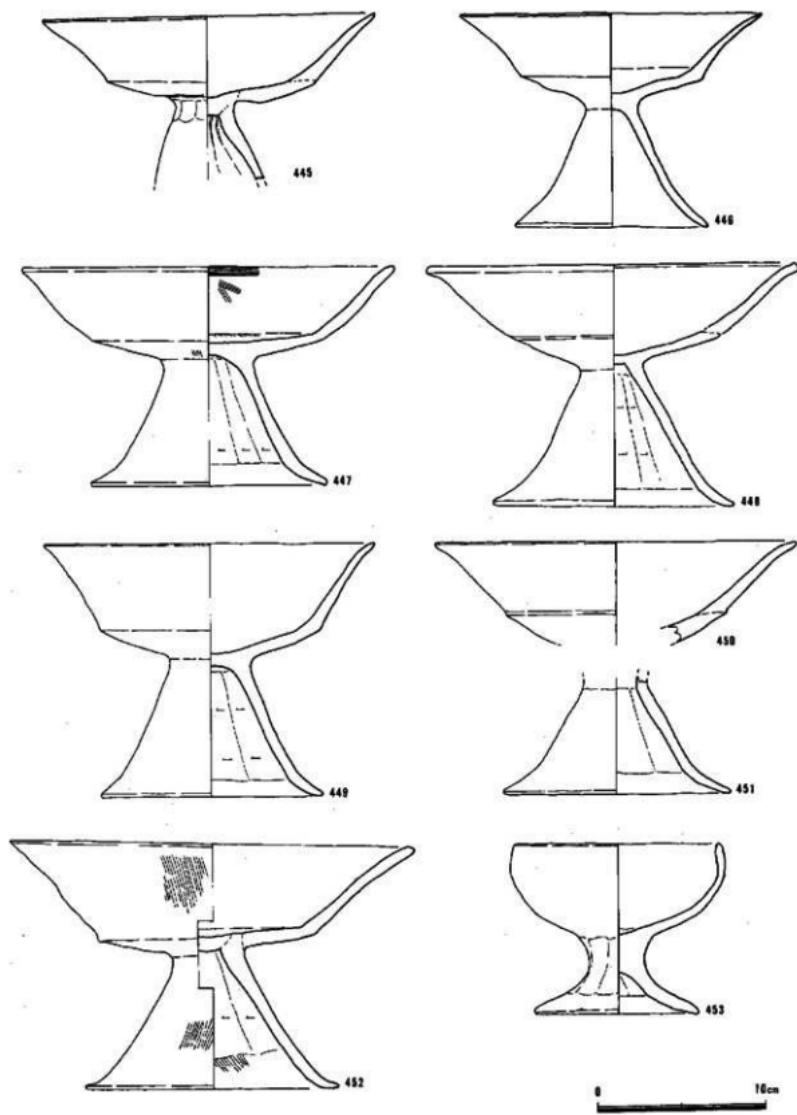
SC1016(第70図) J-6区で検出する。削平により南側が残存するのみである。埋土は黒褐色土である。主柱等は不明である。遺物は土師器壺・椀等の小破片が少量出土する。

SC1017(第70図) F-G-2区で南側周溝の一部を検出する。西側をSC1005に削平され、中央に現代の擾乱溝が入り込む。埋土は暗褐色土である。P1～P4の4本主柱と考えられ、柱間は2.25m及び1.85mを測る。溝と主柱の位置関係より東西長約4.2m、南北長約5.2m程度の長方形プランを呈すと考えられる焼土等の検出はない。遺物は土師器壺の小破片が少量出土している。

SC1018(第71図) G-3区で検出する。南半部分をSC1012・1034によって削平されるがいずれも床

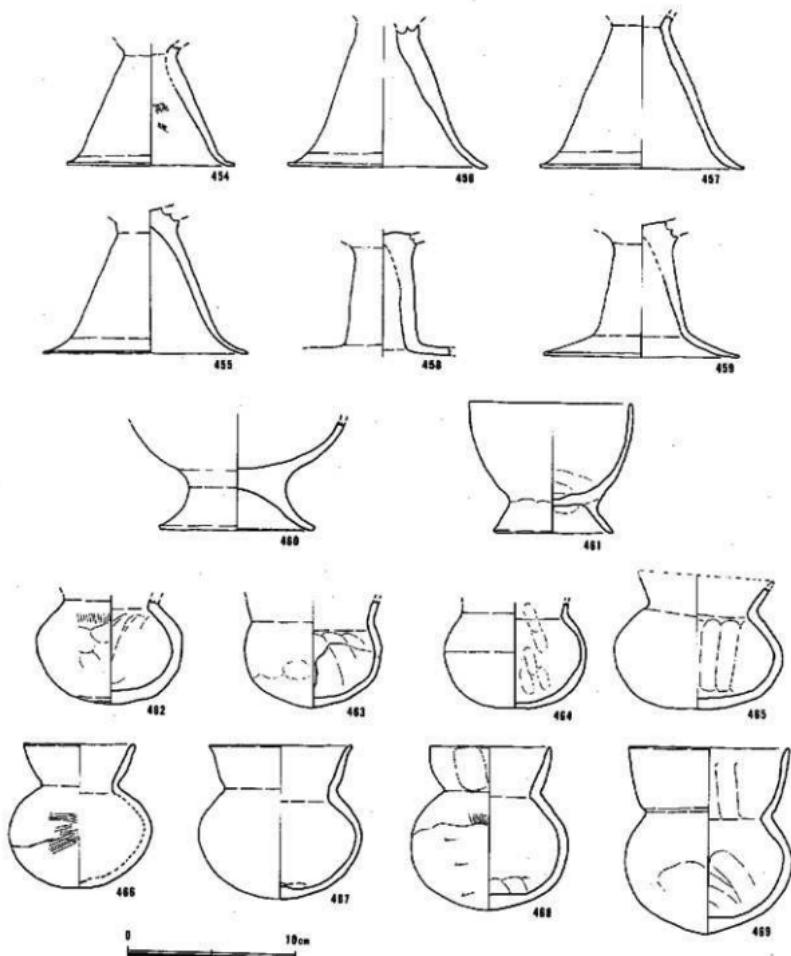


第72図 SC1018出土遺物実測図 1 (1/3)



第73図 SC1018出土遺物実測図 2 (1/3)

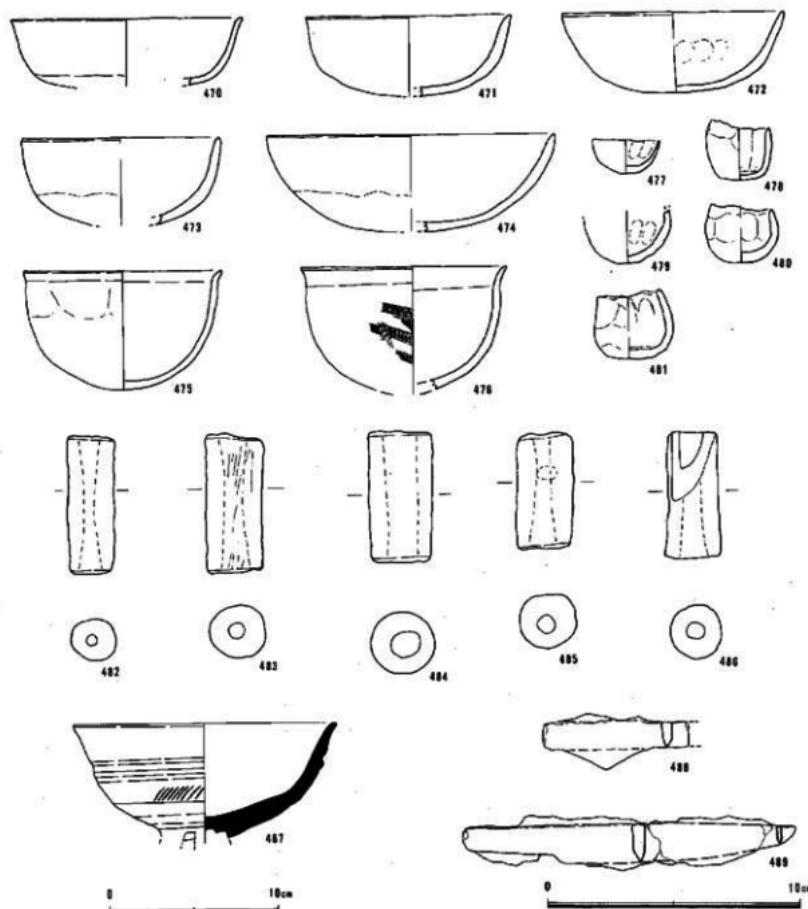
面に至っておらず全体として遺存状況は良好である。平面プランは一辺5.8mの正方形を呈し、壁高は20cm程度を測る。埋土は黒褐色土である。P1～P4の4本主柱と考えられ、柱間はP1-P2・P3-P4が2.2m、P1-P4が2.4m、P2-P3が2.6mをそれぞれ測る。住居床面中央部には炉跡と考えられる径60cmの円形掘り込み(P5)があり、埋土は焼土粒が多く含む黒褐色土であった。東壁中央部に接して1m×0.65mの隅丸長方形を呈する土坑を掘り込む。土坑内から高环・小型丸底壺・手づくね土器が出土している。また住居床面周囲には幅20cm、深さ5～10cmの周溝を有する。遺物は床面よりや



第74図 SC1018出土遺物実測図 3 (1/3)

や浮いているが、住居全体から多く出土している。特に西側コーナー近くでは甕・壺・高坏・椀がまとまっており、P5 西側では手づくね土器が数点まとまっている。その他鐵器 2 点出土している。滑石はほとんど出土しない。5世紀初頭～前半に位置づけられるが須恵器については出土が僅少で 4世紀代に上がる可能性もある。

出土遺物(第72図～第75図) 439～486は土師器である。439～444は甕である。全体に風化・磨滅が著しい。439は口縁部は棱をもって屈曲し、外半して外方に伸びる。肩部はやや張り気味である。440は口縁部が直線的に高く伸びている。胴部は肩が張り、扁球形を呈する。内面は胴部と口縁部との接合面に指頭痕を残す。441は口縁部は僅かに内湾気味に伸びている。口縁部は比較的高く立ち上がり



第75図 SC1018出土遺物実測図 4 (470～487は1/3、488・489は1/2)

気味である。口縁端部は面取りを行い、外側に肥厚させる。442は口縁部を外半させ、端部に面取りを行う。胸部との屈曲は明瞭である。胸部はなで肩で長胴気味である。外面に継刷毛、内面は口縁部との境まで横方向のヘラ削りを行う。443は口縁部は僅かに外側に膨らむ。端部は面取りを行い四角く納めている。口縁部と胸部の境は胸部の横方向ヘラ削りにより明瞭な稜線をなす。外面には継刷毛を施す。444は口縁部は直線的に伸びし、端部は外側に肥厚させる。胸部は球形をなし、内面には口縁部との境近くまで横方向のヘラ削りを行う。

445～459は高杯である。445～452は杯部は立ち上がりの緩い円盤状の底面に口縁部を貼り付けている。屈曲部から上位は僅かに外半しながら斜め外方に伸びる。色調は大方淡黄褐色を呈す。口縁端部は丸く納めるものが殆どである。448は横ナデにより端部に面取りを行っている。脚部は僅かに外側に膨らみを持ち、脚端部は短く立ち上がり気味に伸びている。筒部内面は横方向のヘラ削りを行い、一部にしづり痕が残る(445)。接合痕の明らかな452の観察によると、成形は筒状の脚部に杯部底面を接合するが、この際径3cm程度の筒部の中空部分に円盤状の粘土を充填し、また別に中央の接合部を中空にした杯部底面を脚部上端部に接合している。そして逆円錐台に作った口縁部を杯部底面にさせている。このように大きく五つのバーツの接合で成形しているようである。磨滅が進んでいるため調整は不明瞭な点が多いが、447・452には杯部内外面及び脚端部内面に刷毛目が残っている。454～457は同様の脚部破片である。453は楕円形の杯部を有する高杯である。暗赤褐色を呈し、石英微砂粒を多く含む。杯部はやや内湾して丸く端部を納める。胸部は短く、裾部は低く広がっている。458は円筒状の筒部に立ち上がりが無く広がる脚裾部を有する。459は筒部は直線的に僅かに胸部に向かって広がり、脚裾は立ち上がりを持って広がっている。作りが全体的にシャープである。

460、461は台付き椀である。460は椀の上半部を失す。脚部は湾曲しながら外方に開く。端部は丸く納める。461は1/2残存品である。脚部はハ字形に直線的に外方に開き、端部は丸く納めている。椀部は口径に比べ身が深くなっている。調整は磨滅のため不明瞭であるが、全体にナデによる成形を行っている。また脚部と椀部の接合部分には内外面共に指頭痕が残る。

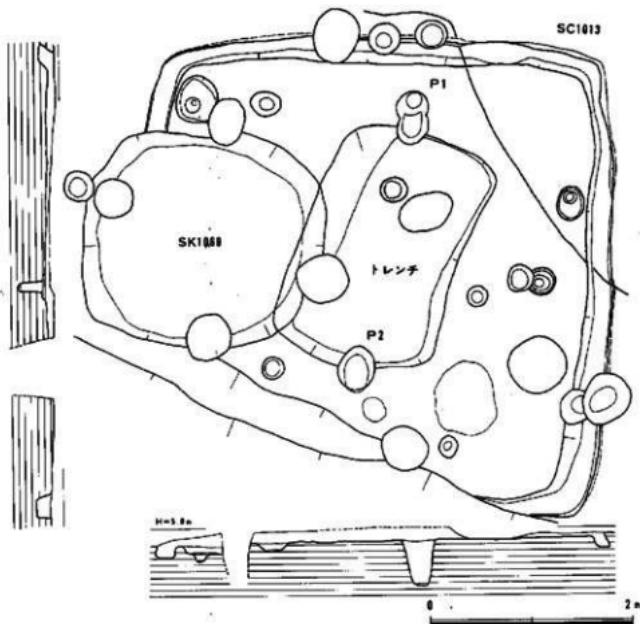
462～469は小型壺である。462は口縁部を失す。胸部は扁球形を呈し、肩部に継刷毛が残る。肩部以下は継刷毛のち指ナデを行う。内面は継方向のナデである。463は1/2残存品である。内面に継方向のナデを行う。464は風化が著しいが内面に指頭痕が残る。465は口縁端部を失す。胸部は扁球形で、内面に継ナデが残る。466は完形品である。胸部は球形で、外面に横刷毛が残る。底部には黒斑を有する。467は2/3残存品である。頸部に横ナデを行い、直上は緩い段を有する。また口縁端部は僅かに外方に引き出している。468は完形品である。口縁部は内湾気味に伸びる。胸部はやや下膨れの球形を呈し、外面は上半部継刷毛の後ナデ、下半は横方向のヘラ削りの後ナデを行っている。また内面には指頭痕が残る。469は466同様に口縁部最下位に緩い段を有する。内面はナデ、外面はヘラ削りの後ナデを行う。

470～476は椀である。470は平底を呈する。端部は僅かに外方に引き出す。471は器壁が厚手である。472はほぼ完存品である。口縁部は緩く外方に開き、端部は丸く納める。内面に指頭痕が残る。473は器壁は厚手で口縁端部は僅かに外反する。474は口径17cmを測る比較的おおぶりの椀である。475、476は口縁端部を如意状に外反させる。身は相対的に深くなっている。476は外面に横刷毛を行う。

477～481は手づくね土器である。図示しえなかったものを含め10点近くまとめて出土している。

482～486は円筒形の土鍤である。486のみ一部欠損する。483には刷毛目状の成形痕が残っている。重量は482は65g、483は93g、484は122g、485は87g、486は83gを測る。

487は生焼けで磨滅の著しい須恵器無蓋高杯である。口縁部は僅かに外反する。胸部中位に1条の



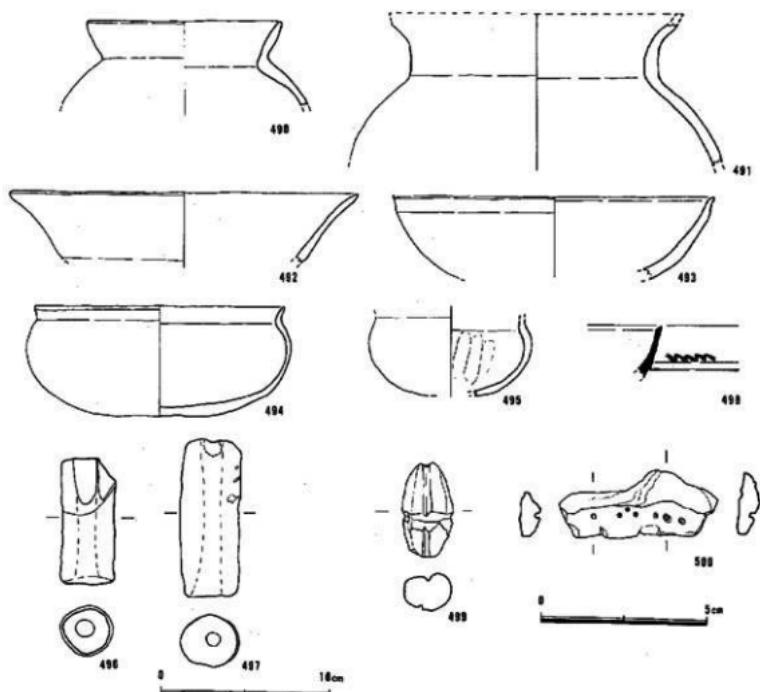
第76図 SC1019実測図(1/50)

断面三角突帯を削りだし、突帯の上下は沈線状となり2条に巡る。突帯下にはクシ状工具による刺突文が残る。また刺突文以下の外底面は回転ヘラ削りを行っている。脚部には3方向に透かしがあるものと考えられる。

488、489は鉄製刀子である。488は刃部破片で欠損品である。489はほぼ完形品である。全長13.1cm、刃部最大幅1.5cmを測る。背は一直線で、刃部は先端部から基部に向かって徐々に幅が広がる。基部は鋒により形状不明瞭であるが、長さ3.6cmを測る。

SC1019(第76図) F-G-4区で検出する。北西コーナー部分をSC1013によって削平され、東側は現代の機械乱溝によって失っている。またSB1073にも切られている。平面プランは略正方形を呈し、東西長4.7m、南北長4.5mを測る。埋土は茶褐色土である。主柱穴は不明瞭であるが、掘り方のしっかりしたものを見るとP1とP2の2本柱の可能性が考えられる。この場合主柱の軸が住居の軸と離れていたり、住居の北側にやや片寄るなど不自然な点もある。周溝は全周すると考えられる。周溝は外側の壁が若干オーバーハングし断面平行四辺形状となる。また北東側に壁体状の焼土が厚さ3cmほど残っている。掘り込み等ではなく壁体の下は地山(床面)が被熱により断面浅皿状に5cm程赤変していた。出土遺物には土師器壺・壺・把手・土鍤・手づくね土器、須恵器壺・壺・蓋・壺、滑石製白玉3点、石鍤1点、欠損している紡錘車1点がある。

出土遺物(第77図) 490~497は土師器である。490、491は壺である。490は口縁部は真っ直ぐ外方に



第77図 SC1019出土遺物実測図(490~498は1/3、499~500は2/3)

伸びる。胸部は肩がやや張り気味で、外面に縦刷毛を行う。内面は横方向のヘラ削りによる。491は口縁部下半が直立し、上半1/3程から外方に開いている。内面は口縁部と胸部の境に明瞭な稜線を持ち、横方向のヘラ削りを施す。

492、493は高环坏部である。いずれも上半部破片である。492は外反する口縁部である。内外面は2次的に強い熱を受けており、ピンク色に発色している。493は内済して立ち上がり、端部を僅かに外方に引き出している。坏の接合部分から消失しており坏底部は平底に復元できる。外面に横刷毛が残る。

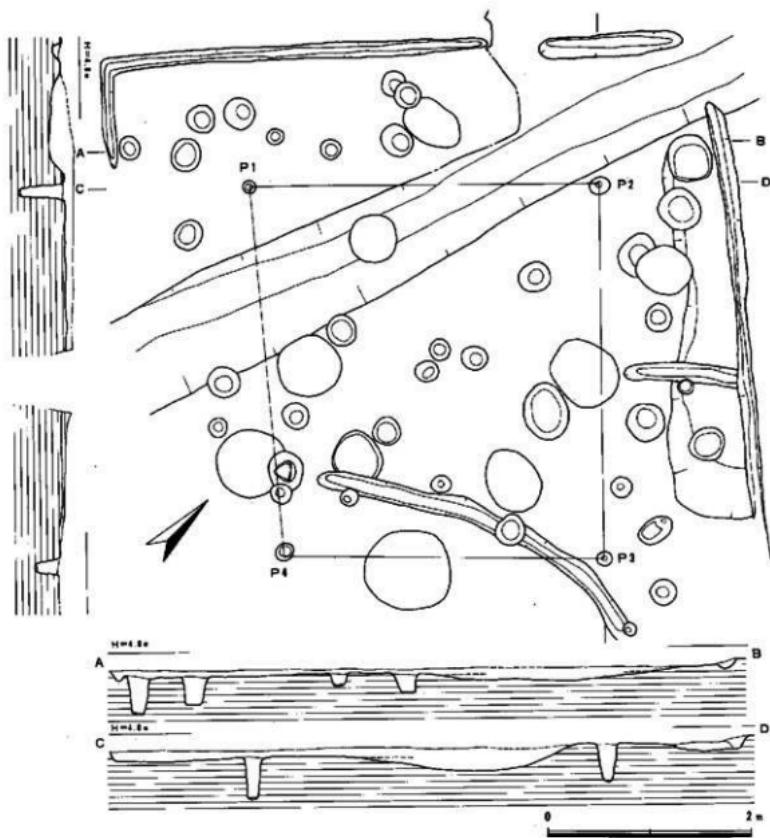
494は椀である。口縁端部を短く外方に引き出して納める。底部は平底気味で肩部は扁球形を呈する。色調明赤褐色で、器面は磨滅が進んでいる。

495は小型壺である。口縁部及び底部を消失する。胸部内面は縦方向の指ナデによる。

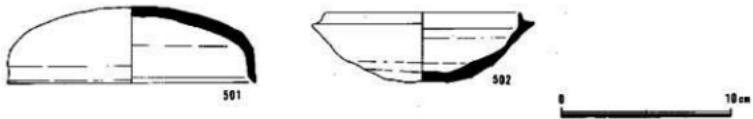
496、497は円筒形の土錠である。496は上端部の一部を欠き、497はほぼ完形である。重量は497が125gを測る。

498は須恵器壺口縁部破片である。口縁部と頸部の境にシャープな断面三角形の突帯を巡らせる。口縁部はやや内湾し、端部を外方に引き出す。また口縁部外面には波状文を施す。

499、500は滑石製である。499は石錠である。長軸・短軸に周回する溝を掘り込む。重量6gを測る。

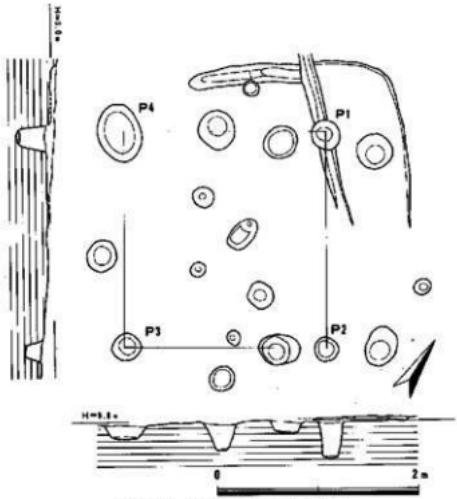


第78図 SC1031実測図(1/50)



第79図 SC1031出土遺物実測図(1/3)

500は重量7gを測る、不整形な板状品である。本体に成形は行われていないが、側邊部2箇所に鋭利な切り込みがあり、片面には中途までの穿孔が7箇所に行われている。製品を作る工程とは考えに



第80図 SC1032実測図(1/50)

調整不明である。502は壺身である。受け部立ち上がりは短い。底部外面は2/3程回転ヘラ削りを行う。

SC1032(第80図) H-3区で検出する。SC1031に西側大半を切られ、南側は削平により欠失しているため北側コーナー部のみ残存している。埋土は茶褐色土である。P1～P4が主柱と考えられ、住居規模は一辺約3.8mの正方形と復元できる。土器細片が僅かに出土しているのみで時期不明である。

SC1034(第81図) G-H-3区で検出する。検出時にはSC1036、SK1071に切られているラインも認められたが、壁が僅かに残っているのみであったため確認作業中に南壁は欠失してしまった。埋土は茶褐色土である。東西長4m、南北長4.2mの略正方形を呈する。P1～P4の4本主柱である。北壁中央部に作り付けの窓が残っているが、袖部等は認められない。窓基底面直上に支脚として用いられた可能性のある脚部が据えられている。窓上中の焼土ブロックを多く含む層(2層)から窓の破片が出土している。また窓前面にも土器小破片がまとまっている。遺物は土器壺・壺・高壺、須恵器壺・蓋壺、窓内から滑石製臼1点が出上している。

出土遺物(第82図) 503～508は土器である。503～507は窓破片である。いずれも伝統的土器壺と異なり、須恵器壺を模した玉縁～断面三角形の口縁端部を有する。実測し得た個体はいずれも同タイプの窓で、出土窓の主体を占めるものである。頭部は強い横ナデにより明瞭な稜を有さずに窓んでいる。また磨滅により調整は不明瞭であるが、胴部はタタキにより成形されているものと考えられる。507には内面に平行當て具痕跡が残っている。同様の窓はSC1013等6世紀後半に属する遺構からほぼまんべんなく出土している。出土頻度が高く注目される。

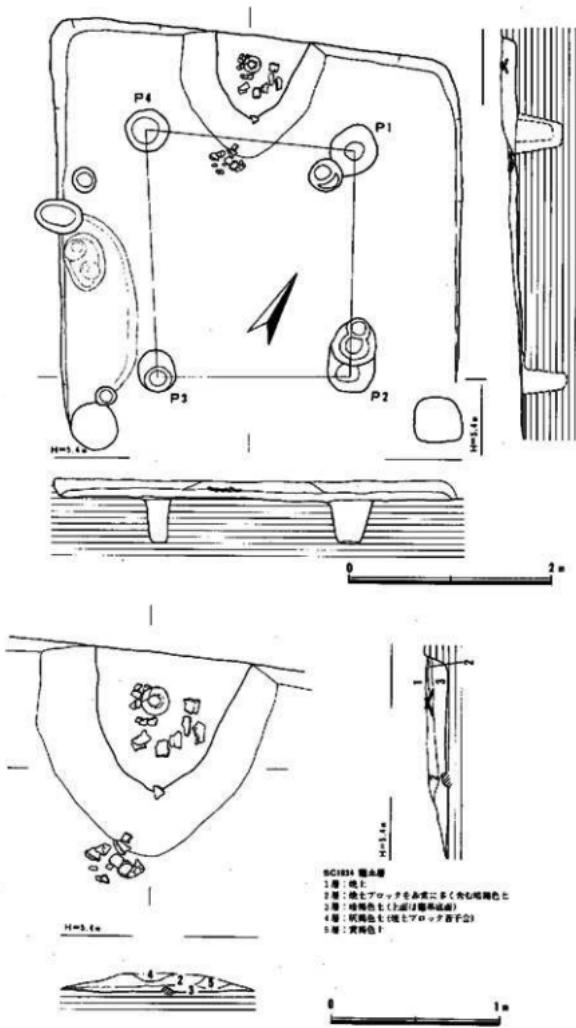
508は窓内に据えられていた高壺脚部である。筒部から脚部は屈曲が無く外反して裾広がりとなる。器壁は薄手で、器面は風化が著しい。

509は須恵器壺身で、ほぼ完存する。立ち上がりは内傾し、端部は外反し直立する。外底面にはヘラ切りを行っている。

くく、廃品の利用であろうか。

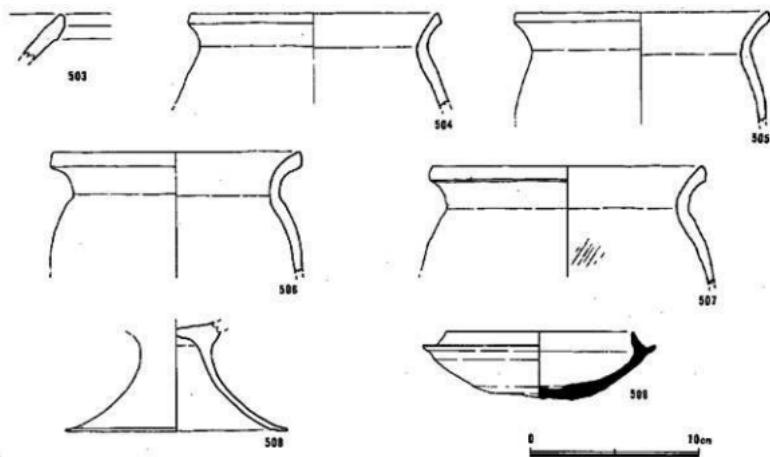
SC1031(第78図) H-3区で検出する。削平により北側及び西側の周溝を辛うじて検出している。SB1058・1059に切られている。南北長6.2m、東西復元長6.7mを測る。埋土はやや茶味を帯びた褐色土である。P1～P4が主柱と考えられる。北壁沿いに浅い掘り込みを有するが、これを埋めて床面としている。また北壁中央部から周溝より続く溝が1m程度伸びているが、住居内の区画目的とするものであろう。土器壺・壺、須恵器壺・蓋が出土している。出土遺物より6世紀後半に位置づけられる。

出土遺物(第79図) 501、502は須恵器である。501は壺蓋である。口径14.7cmを測る。口縁部は短く直立気味で、端部は僅かに外側に開く。器面は磨滅が進み

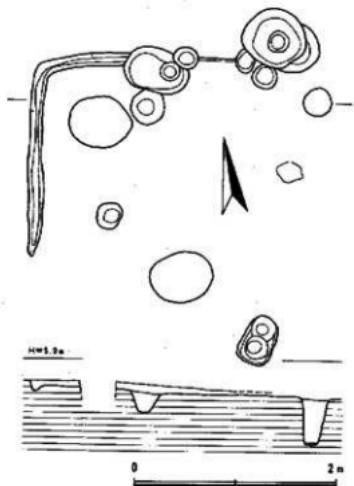


第81図 SC1034実測図(1/50, 1/50)

SC1035(第83図) G-4区で検出する。残存状態は非常に悪く、北壁及び西壁の一部を残すのみである。埋土は暗褐色土である。SB1060に切られている。壁沿いには幅15cm、深さ3cm程度の周溝が巡っており、これが全周するものと思われる。床面に一部焼土が残るが窯等の施設は検出していない。



第82図 SC1034出土遺物実測図(1/3)



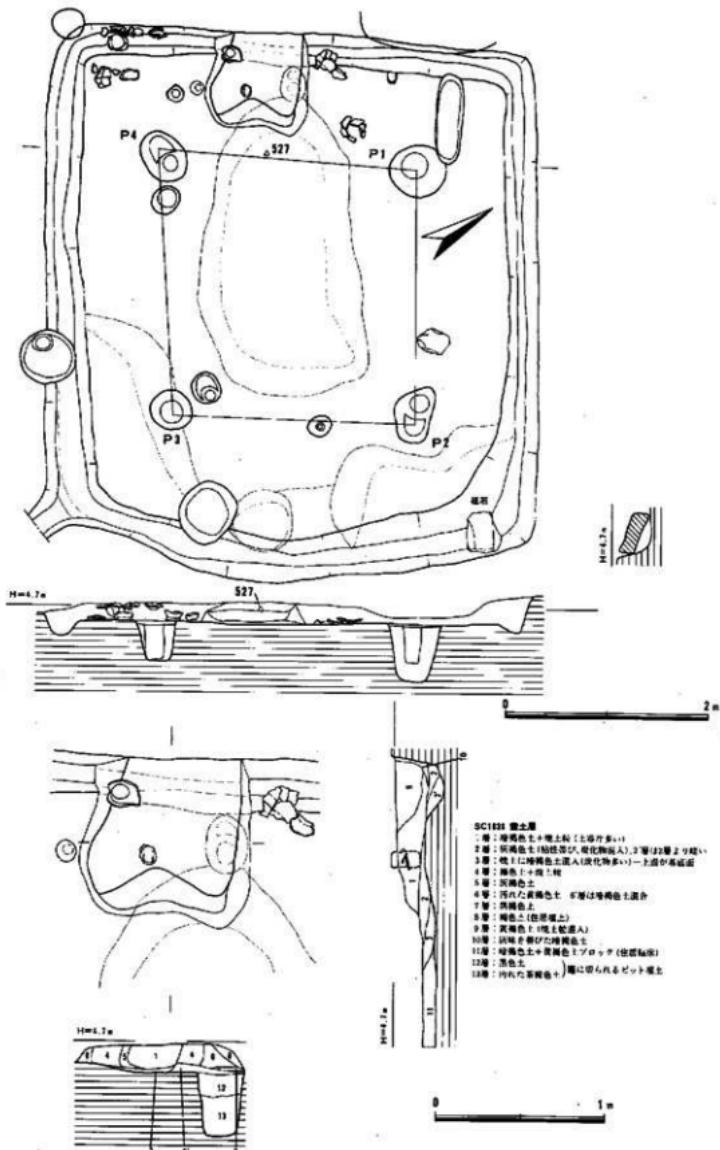
第83図 SC1035実測図(1/50)

を埋め戻して床面を形成しているようである。

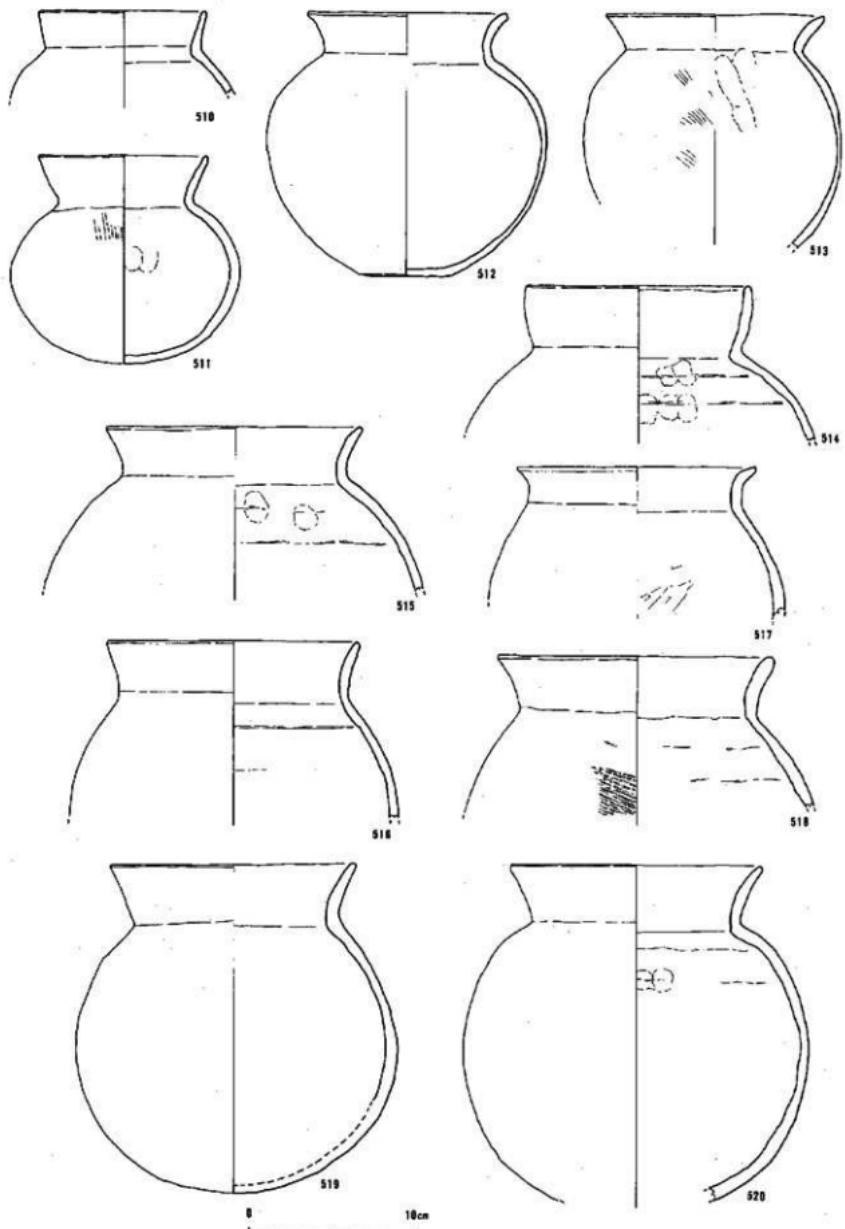
西壁中央部からやや南寄りに竈が作り付けられている。竈は床面形成後に構築位置を緩く掘り進め、基底面(2、3層)を作ったのちに、袖部を構築している(4、6層)。支脚2層上面に据えられ、円柱状

土師器小片が出土している。

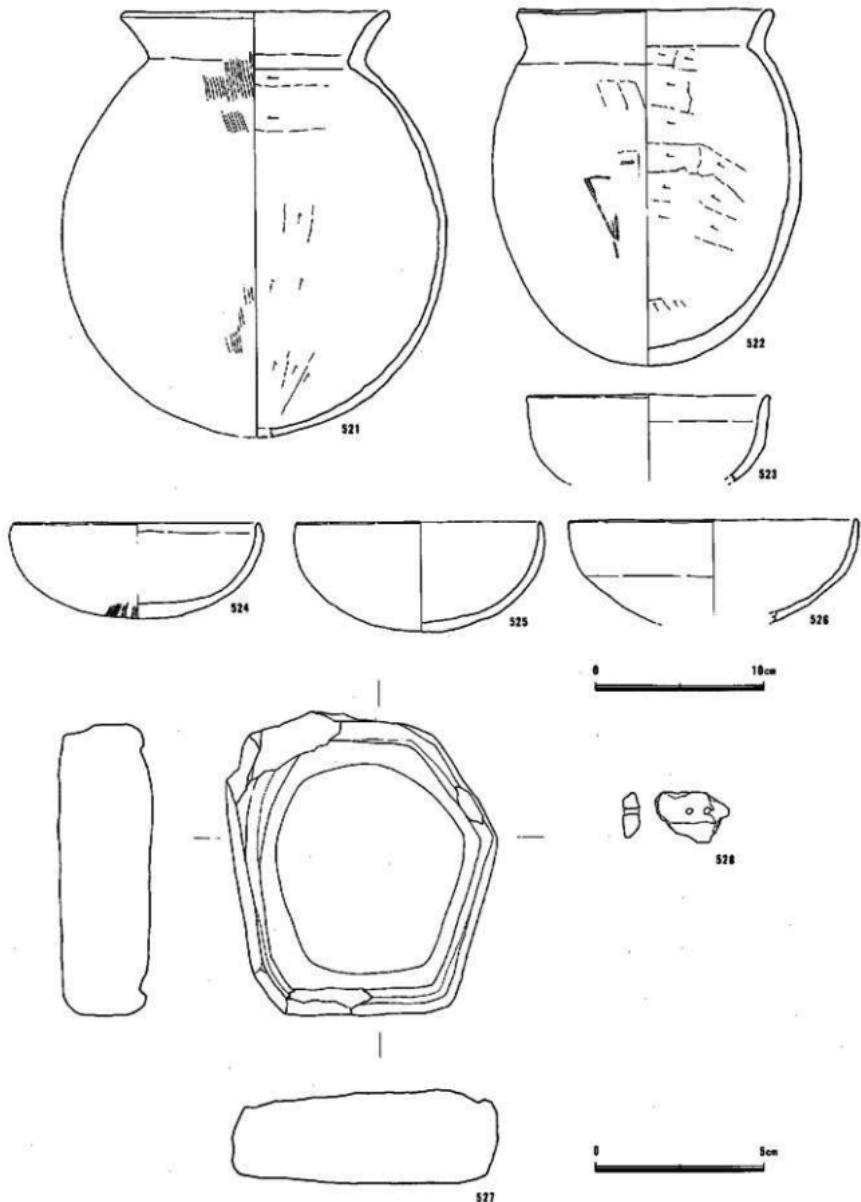
SC1036(第84図) H-3・4区で検出する。西壁の一部をSK1071に切られる。埋土は暗褐色土である。住居平面プランは東壁が弧状を呈しており、東西最大長5.5m、南北長4.9mを測る。壁沿いには周溝を巡らし、南側コーナーからは周溝から続く溝が調査区外に伸びている。同様の溝を有する住居はSC1013があり、これについても溝の接続する側の南壁は大きく弧を描いており、平面プランと溝状造構間の機能的な関係が存在すると考えられる。またSC1036につながる溝は周溝より溝底が高く、床面と同レベルになっている。P1～P4の4本主柱である。遺物は竈周辺を中心多く出土している。東側コーナー壁沿いの周溝上は大型の砥石を据えつけており、この他にも床面から砥石2個体が出土している。滑石製品製作工房の可能性も考えたが、チップ等の出土も多くは見られず、鉄製品用の砥石であろう。住居床面中央部及び東側には掘削時の掘り込みがあり、これ



第 84 図 SC1036実測図(1/50, 1/30)



第85図 SC1036出土遺物実測図 1 (1/3)



の石材を用いている。

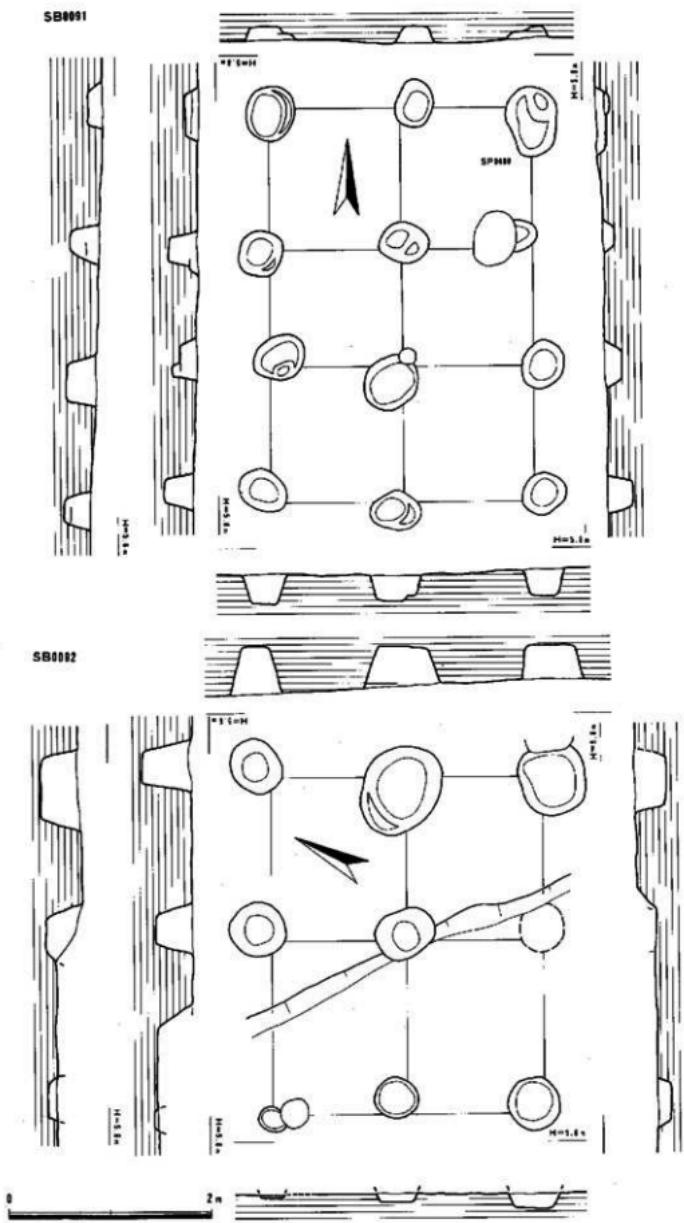
遺物は前述のように竈周辺を中心として土師器甕・壺・高杯・碗、少量であるが須恵器甕・蓋杯小破片、砥石及び白玉30点以上・白玉未製品が出土している。

出土遺物(第85-86図) 510~526は土師器である。510~522は甕である。510は口縁部は直立気味に斜め外方に伸びる。2次的な被熱を受けているため、外面はピンクに発色し器面が荒れている。胴部内面は頸部下に接合痕が残り、指押さえを行う。511は510と同様の小型甕である。口縁部は僅かに内湾する。胴部は扁球形で肩部に縦刷毛が残る。外面は2次焼成により発色している。512は甕内出土である。胴部の1/3を欠失する。口縁部は直立した後、上半部が外反する。胴部上部1/3程に最大形を有し、底部は平底気味である。内面には横方向のヘラ削りを行い、器壁は薄手に作り上げる。胴部外面は2次焼成を受け、中位には煤が付着している。513は刷毛が進んでいるが、胴部外面にタタキが痕跡的に残っている。内面は粗いヘラ削りを行う。風化が著しい。514は甕上面から出土した。内湾する口縁部が上方に伸び、端部は丸く納める。内面頸部直下に粘土接合痕と、指押さえが残る。器面は磨滅が進み、胎土に含まれる石英砂粒が器面に多く浮き上がっている。515は胴部は肩が張らず、内面には粘土接合痕が残る。2次焼成を受け外面が発色している。器面の風化が著しい。516は甕内出土の1/2破片である。口縁部は僅かに外反する。肩が張らず長胴気味に伸びる。2次焼成を受けている。517は口縁端部を外方に引き出している。内面は頸部との境まで横方向のヘラ削りを行う。外面は2次焼成のため器面が荒れており調整は不明瞭である。胎土に石英砂粒を多く含む。518は器面風化が進み調整は不明瞭ながら、外面にタタキ痕が残る。内面には頸部下位に2箇所以上の粘土接合痕が残る。口縁部は直立後端部を外方に引き出している。519は竈北側で潰れた状態で出土したが、ほぼ完形品に復元できた。口縁部はほぼ直線的に外方に伸びている。胴部は中位に最大径を有する略球形を呈する。外面は全体に2次焼成を受け器面が荒れており調整は不明瞭である。また内面は胴部上半部に縦方向ヘラ削りが残る。520は口縁部は僅かに外反する。胴部は肩がやや張り気味で、歪な球形を呈する。2次的な焼成のため肩部～底部に暗いピンクの発色が見られる。また中位以下には煤が付着する。内面はナデによるものか。521は口縁部は外反し、端部を丸く納めている。胴部は中位最大径を有し、長球形を呈する。器面の風化が著しいが、外面には全体に刷毛目が施されている。内面は下半が縦方向、上半が頸部との境まで横方向のヘラ削りを行っている。また器面には2次的な焼成を受けた痕跡が残る。522は口縁部は短く外方に伸びず。胴部は長胴で外面は削り状の板ナデを行う。また内面は頸部との境までらせん状に斜め左方向に削り上げている。器壁が厚手で調整も図示した他の甕とは異なっている。2次焼成を受けているため特に胴部下半は暗赤褐色に発色している。

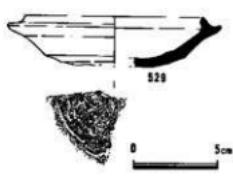
523~526は碗である。523は口縁端部を外側に引き出している。また器面に2次焼成の発色が見られる。524~526は口縁部を内湾させて納める。524には外底面に刷毛目を施す。

527は白色砂岩製の石製品である。一部を破損するが変形の7角形を成し、側面部を砥石として使用している。前面には外形に沿う形で陰刻がなされている。無鉤銅鋤の鋤型とも考えられるが、使用的痕跡がないことや刻み目と外形の大きさが殆ど同一で鋤型を砥石として使用したとしても不自然な点もあることから可能性の報告に止めた。仮に鋤型とすれば兵庫県田能遺跡出土製品よりやや幅広な形態となる。また背面は平滑であるが底面とはなっていない。

528は2箇所に穿孔を有する板状の滑石である。



第87図 SB0091・SB0092実測図(1/50)



第88図 SB0091出土遺物
実測図(1/3)

(2) 堀立柱建物

調査区内では2間×2間の縦柱を基本として、これに付随するとと思われる1間×2間の建物からなる堀立柱建物群を検出している。堀立柱建物同志は切り合うことなく、互いに有機的な関係を保持しながら配置されているようである。また、堀立柱建物は堅穴住居と時期的に重なることはなく、出土遺物からいずれの建物も7世紀初頭に位置付けられるものである。

SB0091(第87図) G-2区で検出した2間×3間の縦柱建物である。SC0002・SC0013を切る。主軸方位はN-2°-Wと略磁北方向で、他の堀立柱建物と異なる。桁行は全長3.9m、柱間は両端が1.35m、中央が1.2mとやや短い。梁間は全長2.6m、柱間は1.3mを測る。柱穴は不整な円形もしくは梢円形を呈し、径40~60cmを測る。覆土は暗灰茶褐色土を主体とする。

出土遺物(第88図) 大半の柱穴から土師器壺・塊・須恵器蓋壺・壺等が出土しているが細片が多く、図化し得たのは529の須恵器壺身のみである。復元口径10.6cm、推定器高2.9cmを測る。立ち上がりは短く、強く内傾する。外底部は平坦に近く、約1/2に回転ヘラ削りを施す。内底部はナデ、他は回転ナデを施す。なお、外底部にはヘラ記号を有する。SP0488より出土した。

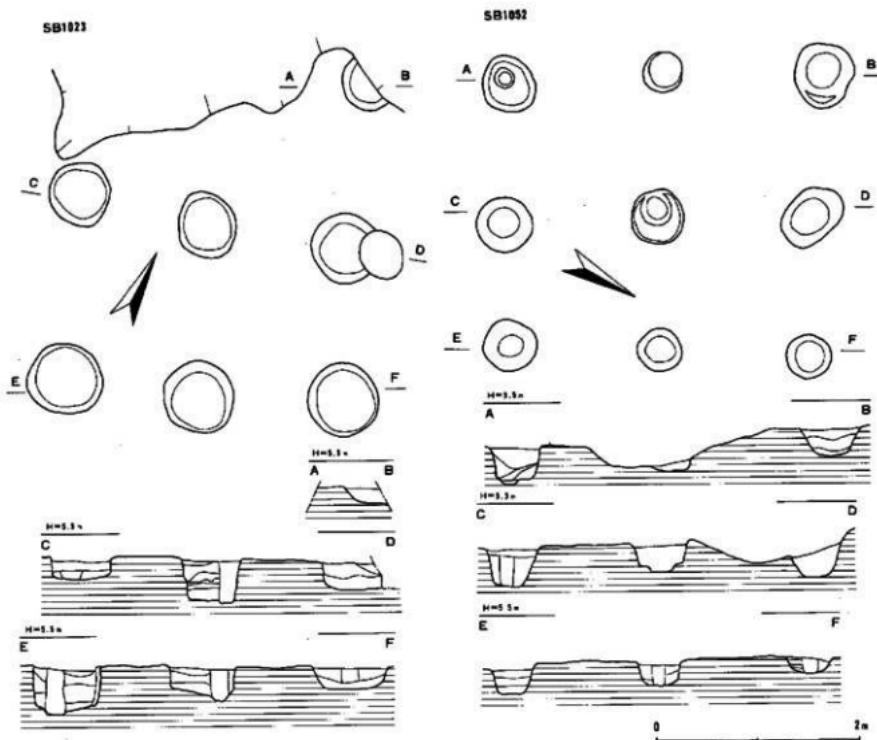
SB0092(第87図) H-2区で検出した2間×2間の縦柱建物である。東西方向の全長が南北方向よりもやや長く、東西の柱筋を桁行と想定すると主軸方位はN-64°-Eとなる。桁行は全長3.3m、柱間1.65m、梁間は全長2.7m、柱間1.35mを測る。西側は段落ち下に位置しており、柱穴の遺存状況は悪い。柱穴は円形を主体とし、覆土はSB0091に類似する。各柱穴から土師器・須恵器が出土しているが、細片のため図化不能であった。

SB1023(第89図) E-F-4区で検出す。2間×2間の縦柱建物である。南北軸は磁北より28°東に振れる。北側列が削平により柱穴2基が失われているが、柱間で一辺3mの正方形を呈する。柱穴掘り方は径約70cmの円形で、柱痕跡が確認出来るものは5基である。柱は掘り方中央部に立てられるものと、掘り方中央から外れるもの、更に掘り方内壁に接続して立てられるものの3種類がある。柱痕跡直径は約15cmである。遺物は各ピットから土師器小破片とともに、須恵器蓋壺が出土している。

出土遺物(第93図 530~532) 530、531は須恵器壺身である。530は受け部立ち上がりを失する。外底面は1/2迄回転ヘラ削りを行う。532は立ち上がりが高く、内湾気味に上方に伸びる。身は深くやや古式の様相を呈する。外底面回転ヘラ削りは受け部のやや下部にまで及ぶ。532は上師器壺破片である。口縁部は明瞭な稜を持たず反転する。器面は磨滅が進み調整は不明瞭である。胎土には石英砂粒を多く含む。

SB1052(第89図) G-H-2・3区で検出す。SC1011・1012を切る。2間×2間の縦柱建物である。南北軸は磁北より30°西に振れる。建物規模は南北長約3m、東西長約2.7mを測る。柱穴掘り方は径約50cmの円形で上述したSB1023と比べて一回り小さくなっている。同様の掘り方径を有するものにSB1060・1073がある。掘り方規模の違いによる建物規模への影響は見られず、建設時期の違いを現すのであろうか。柱痕跡直径は10~15cmである。遺物は各ピットから土師器壺・塊・須恵器蓋壺・壺が出土している。

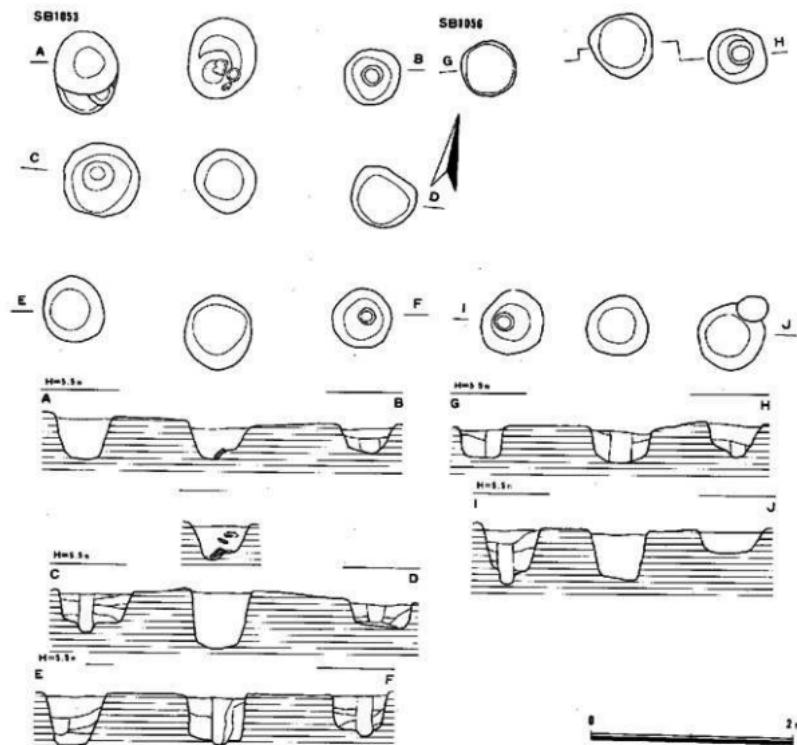
出土遺物(第93図 533) 各ピットから遺物が出土しているが図示したものは1点である。533は須恵器壺身小破片である。受け部は短く張り出し、立ち上がりは短く内傾している。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。



第89図 SB1023・SB1052実測図(1/50)

SB1053(第90図) F-G-3・4区で検出する。SC1008を切る、2間×2間の縦柱建物である。南北軸は磁北より13°西に振れる。建物規模は南北長約2.5m、東西長約3.0mを測る。柱穴掘り方は径60～70cmの円形で、柱痕跡直径は約15cmである。SP1191から須恵器坏身が完形で出土している。このピットからは根石が半ば起き上がった状態で出土しており、柱痕跡も確認されていないことから、廃棄時に柱材を抜き取った際に入れ込んだ物と考えられる。この他ピットから土師器壺・椀・把手、須恵器蓋・壺が出土している。

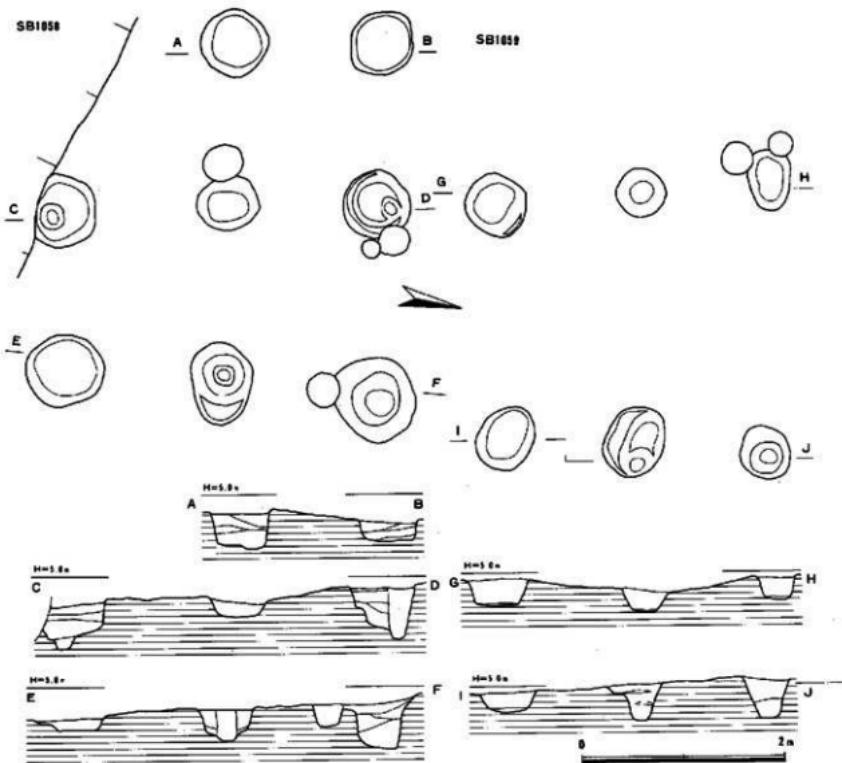
出土遺物(第93図 534～543) 534は須恵器坏蓋である。天井部は屈曲部まで回転ヘラ削りを行う。535はミニチュア土器である。536は上師器壺口縁部である。口縁端面は面取りし、断面コ字状をなす。537は土師器壺である。口縁端部は磨滅により復元的に作図しているが、断面玉縁状を呈すると考えられる。胴部外面には平行のタタキを行い、内面には細身の平行線をなす當て具痕が残る。頸部には強い横ナデがあり、肩部が張り気味となる。また2次焼成を強く受け、器面が変色・剥落を起こしている。538～540は須恵器蓋坏である。538は口縁部内面に浅い沈線状の段を有する。天井部は1/2迄



第90図 SB1053-SB1056実測図(1/50)

回転ヘラ削りを行う。539はSP1191出土の完形品である。天井部外面には2/3程に回転ヘラ削りが行われる。受け部立ち上がりは短く内傾している。540は回転ヘラ削りは底面の1/2程で、立ち上がりは539より更に短い。541は土師器碗である。口縁部屈曲部は内面に明確な稜を有し、内湾気味に外方に伸びる。外面下半にはヘラ削りの跡が痕跡的に残る。胎土には石英砂粒を多く含み、色調は明赤褐色を呈する。542は滑石製有孔円盤である。平面形は角が残っているが側面及び表裏面にも研磨痕が残っており、未製品ではなく製品と考える。穿孔は片側からのもので中心から外れている。重量8.7gを測る。543は砂岩製の石錠である。薄手の板状をなす石材の両短辺側を打ち欠き製品とする。重量110.5gである。

SB1056(第90図) F・4区で検出する。SC1008-1013を切る、1間×2間の壠立柱建物である。南北軸は磁北より約13°西に振れる。建物規模は南北長約2.5m、東西長約2.5mの平面正方形を呈する。柱穴掘り方は径60~70cmの円形で、柱痕直径は15~20cmである。SB1053とは柱筋がやや異なるものの主軸をほぼ同じくし、また建物間の柱間は1.3m~1.5mを囲り、建物内の柱間に一致する。以



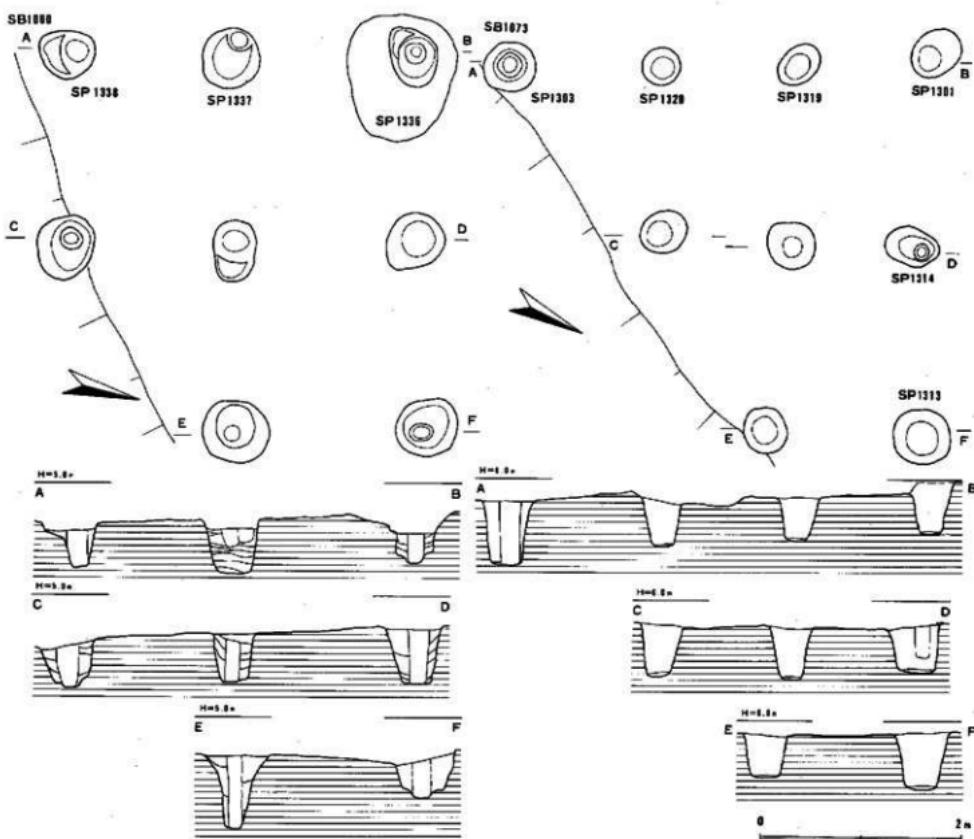
第91図 SB1058・SB1059実測図(1/50)

上から上部構造は不明ながらSB1053とSB1056は一連の建物と考えられる。各ピットから土器師・須恵器の小破片が出土している。

出土遺物(第93図 544) 須恵器坏身小破片である。受け部立ち上がりはやや高めに内傾して伸びる。また立ち上がり短部は嘴状に内面に僅かに折れ気味となる。色調は灰白色を呈し、胎土には径1mm以下の石英砂粒を含んでいる。

SB1058(第91図) H-I-3区で検出する。2間×2間の総柱建物である。東側柱軸がやや振れているが、南北軸は磁北より約14°西に振れる。擾乱で西列の遺存状況が悪く、柱痕跡も不明なものが多いため、柱の心々で建物規模はおおよそ南北長約3.3m、東西長約3.2~3.5mの平面略正方形を呈する。柱穴掘り方は径60~80cmの円形で、柱痕跡直径は15~20cmである。土器師・須恵器の小破片、滑石製石錘が出土している。

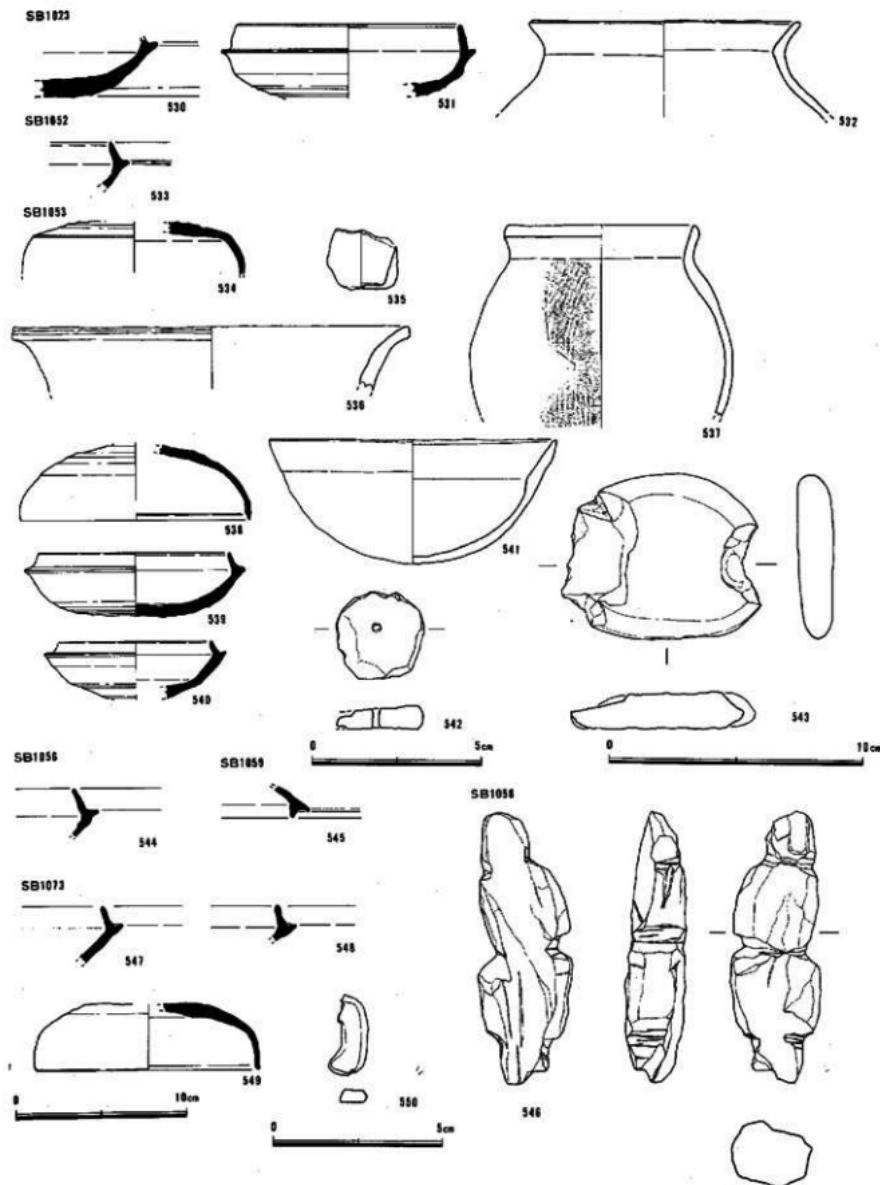
出土遺物(第93図 546) 図示したのは滑石製石錘のみである。長方形の石材の上下両端部に緊縛用の突起を削りだしている。また中央部にも横方向の刻みを施している。成形は粗い印象を与える。



第92図 SB1060-SB1073実測図(1/50)

刻み部分以外の身部にも傷状の削り跡が残る。研擦れ等の使用痕跡は不明瞭で、遺棄が使用の前後いずれかは不明である。重量は112gを測る。

SB1059(第91図) H-3区で検出する。SB1058の北側に位置し、SC1031を切る。1間×2間の掘立柱建物である。建物規模は南北長約2.6m、東西長約2.5mの平面略正方形を呈する。柱穴掘り方は径50~70cmの円形で掘り方はやや小ぶりである。主軸はSB1058とほぼ同じで、SB1058の中央列柱筋とSB1059の西列がほぼ同じラインにのっている。建物の位置関係からSB1053・1056と同様な関係にあると考えられるが、建物間の柱間がややつまり過ぎていること、東軸のずれが大きいこと、中央列に軸がのっており西列に対応する柱筋が無いこと等異なる点もある。ピットから土師器・須恵器の小破片が出土している。



第93図 SB1023-SB1052・SB1053-SB1056・SB1058-SB1059・SB1073出土遺物実測図
(543-546は1/2、542-550は2/3、その他は1/3)

出土遺物(第93図 545) 545は須恵器壺蓋である。返りは短く下方に伸びる。色調灰白色を呈し、胎土は精良である。

SB1060(第92図) G・H-4区で検出する。SC1035を切る。擾乱によって一部を削平されているが遺存状態は全体に良好である。南側が道路部分に当たり調査不能であったが、調査区内の掘立柱建物あり方から、2間×2間の縦柱建物であると考えられる。西列柱間はSP1338～SP1337間1.6m、SP1337～SP1336間1.8mを測る。東西方向は1間1.9mである。南北軸は磁北より約14°西に振れる。柱穴掘り方は径50cm強程度の円形で柱痕跡径は15～20cmである。図示可能な遺物は無いが、土師器・須恵器壺小破片が出土している。

SB1073(第92図) F-G-4-5区で検出する。SC1019・SD1051を切る。SB1060同様南側が道路部分に当たり調査不能であったが、調査区内の掘立柱建物のあり方から、2間×2間の縦柱建物とそれに隣接する建物の一部(SP1303)で構成されていると考えられるが便宜上1棟として報告する。南北軸は磁北より約25°西に振れる。西列柱間はSP1301～SP1319～SP1320間1.3m、SP1301～SP1314～SP1313間1.8m、SP1320～SP1303間1.5mを測る。柱穴掘り方は径40cm強程度の円形である。土師器・須恵器破片が出土している。

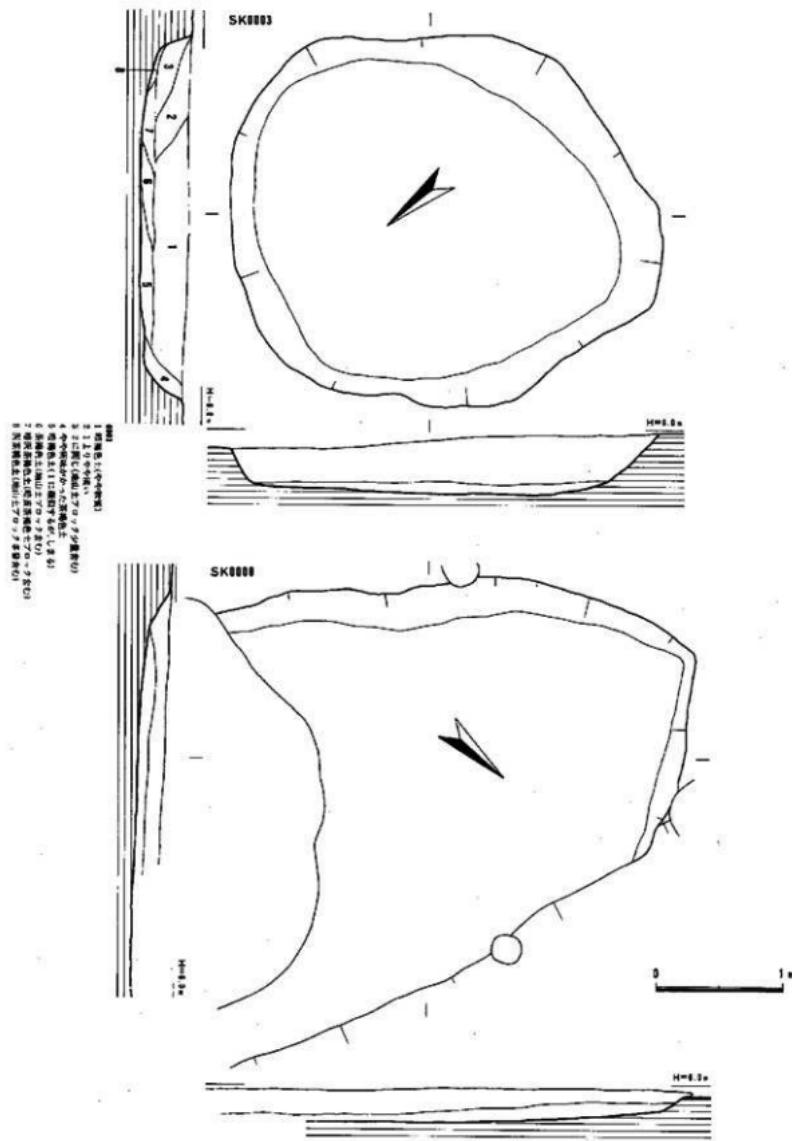
出土遺物(第93図 547～550) 547、548は須恵器壺身である。547は受け部立ち上がりが短く内傾する。残存部位迄では体外面にへラ削りは観察できない。色調は灰白色で、胎土には石英砂粒が多く含む。548は547に比べて立ち上がりは高く、内傾も緩やかである。色調は青灰色で、胎土は精良である。549は須恵器壺蓋である。口縁部と天井部の境は緩やかで明瞭な稜を持たない。天井部の回転へラ削りは2/3程まで行われている。天井部内面に原体不明の圧痕が残る。色調は青灰色で、胎土は緻密である。550は滑石製勾玉破損品である。研磨は丁寧に行われているが、上側の屈曲部から欠損している。断面は略長方形な。現存重量1.6gを測る。

(3) 土坑

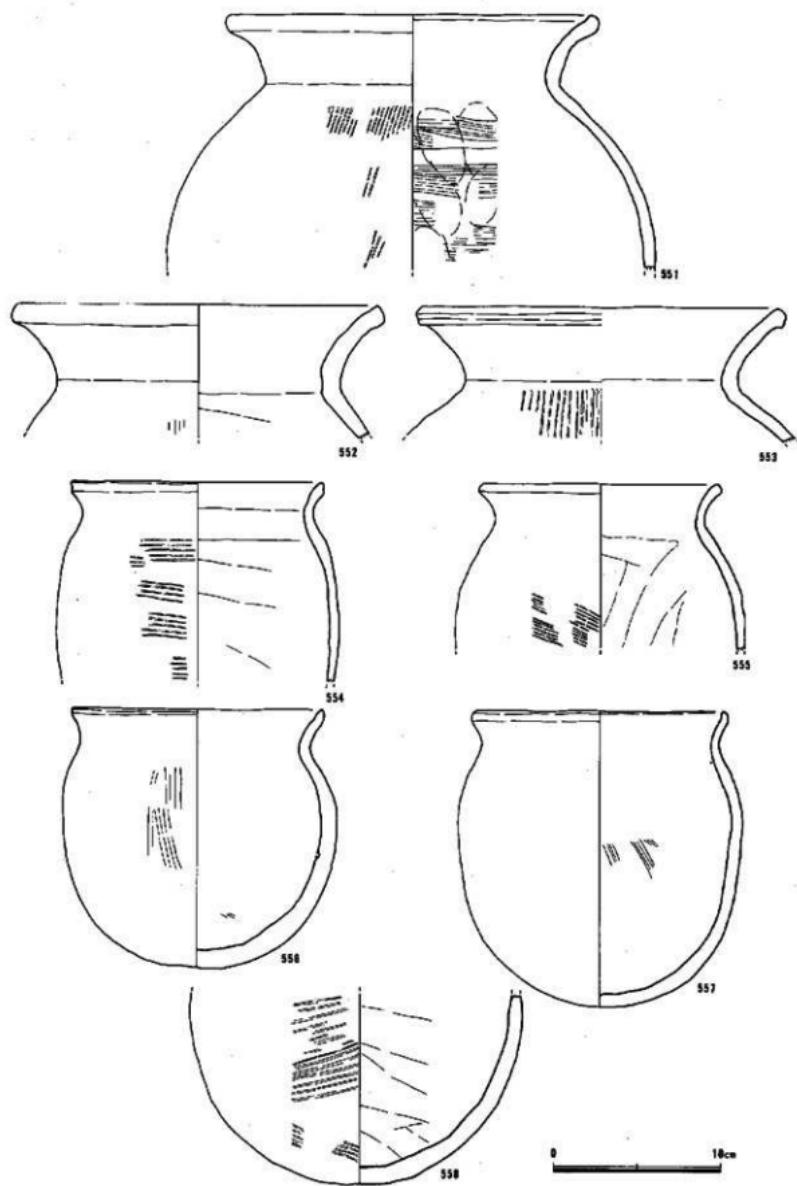
SK0003(第94図) D-2区に位置し、SK0008を切る。隅丸方形を呈するが、かなり不整である。長さ3.4m、幅2.9m、深さ40cmを測る。底面は平坦で、壁面は比較的緩やかに立ち上がる。検出当初は竪穴住居と思われたが、底面では柱穴は確認されなかった。

出土遺物(第95図～第97図) 遺物には土師器壺・瓶・タコ壺・手捏ね土器等、須恵器壺・壺・提瓶、鉄製品、滑石製品、ヒスイ製品等がある。

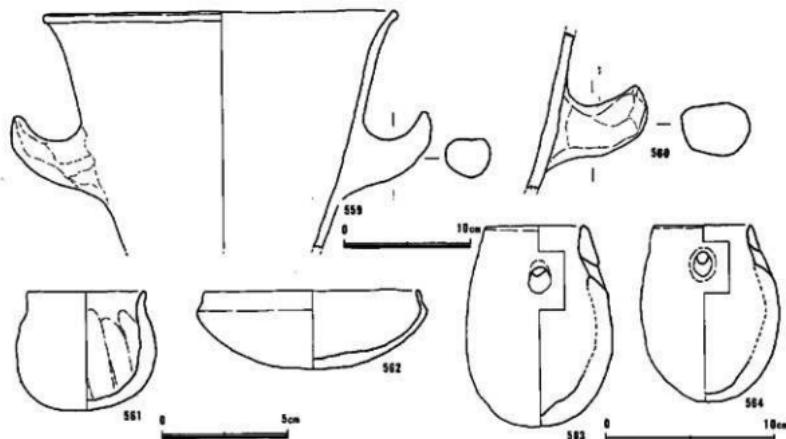
551～564は土師器で、このうち551～558は甕である。551～553は球形の体部に外反する口縁部を有する。551は外面に稜をもって外反する。口唇部は丸く收め、内面縁部はヨコナデによって鈍くつまみ上げる。器壁が一部剥落するが、胴部外面は刷毛目、口縁部・頸部外面はヨコナデし、胴部内面は指オサエの後、横方向の刷毛目を施す。552の口唇部は凸面を呈する。器面の風化が著しい。553は肩が張り、外反の度合いが強い。口縁部は端部を鈍く上方に引き上げ、口唇部は凹線状に窪ませる。器面が風化するが、頸部下面には叩きを施す。554～557は小型の甕で、ナデ肩の体部に緩く外反する短い口縁部がつく。554は肩がほとんど張らず、長胴の胴部へ移行する。口唇部は面をなし、鈍く窪む。体部外面に叩き、内面はへラ削りを行なう。555は器面が風化し、調整が不明瞭であるが、体部外面には叩き、内面にはへラ削りが一部残る。556・557は底部までが遺存するものである。556は二次的加熱による器面の剥落が著しい。外面の下半は赤変し、内面の口縁部下から体部上半にかけて煤が帶状に付着する。器壁は厚手である。復元口径14.6cm、器高15.2cmを測る。557は外面体部下半は二次的加熱を受ける。内面口縁部から頸部付近に煤が付着する。体部内面は刷毛目を施す。復元口径14.6、器高17.4cmを測る。558は底部で、外面は叩き、内面はへラ削りを行なう。559・560は壺である。



第94図 SK0003-SK0008実測図(1/40)



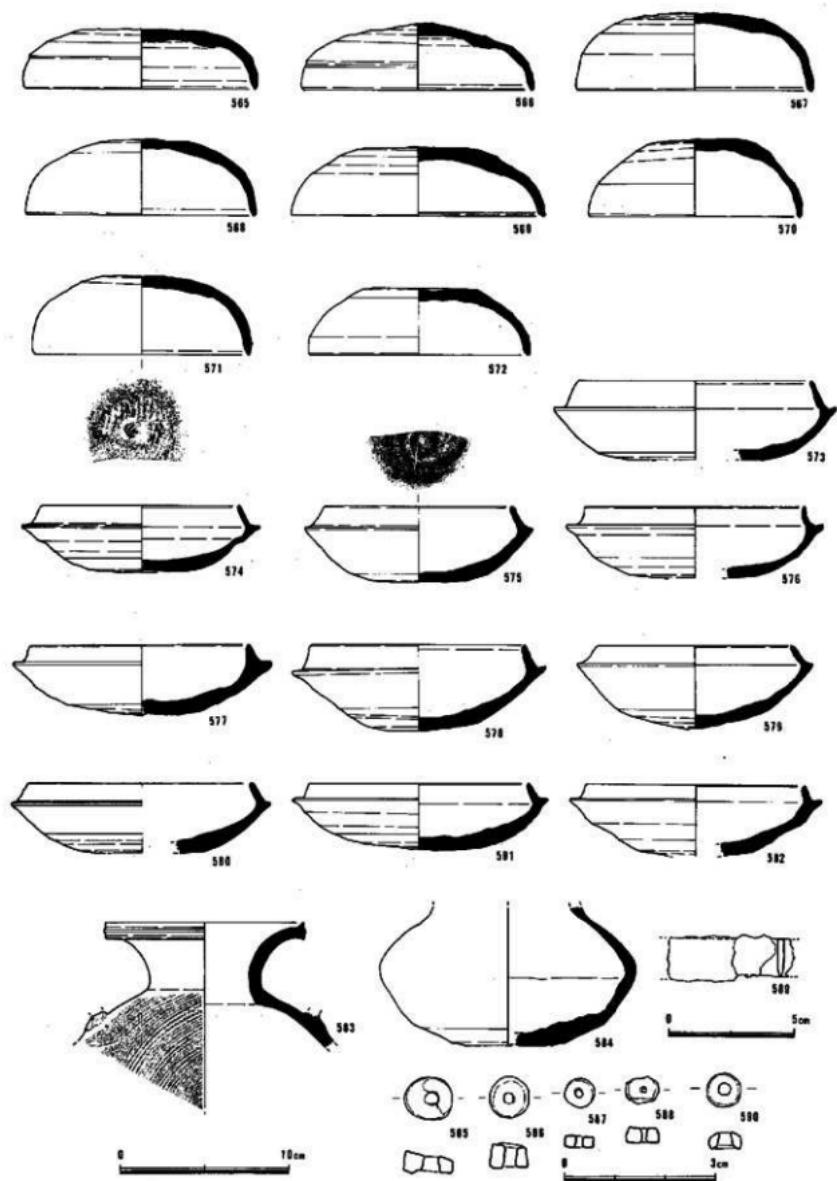
第95図 SK0003出土遺物実測図 1 (1/3)



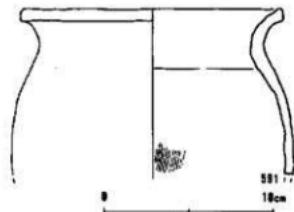
第96図 SK0003出土遺物実測図 2 (559は1/4、561は1/2、他は1/3)

559は直線的に開く体部を有し、口縁部は緩く外反させる。上方に延びる把手が体部の中位に付く。器面の風化が著しいが、体部上半に、カキ目が残る。560は瓶の把手である。561は手捏ね土器で口縁部が短く外反する。指オサエ、ナデで仕上げる。562は須恵器坏身を模したもので、口縁部は内傾する。復元口径12.6cm、器高4.6cmを測る。全体に器面の磨滅が著しく、焼成はやや軟質である。563・564は飯ダコ壺の完形品で、底面上で出土した。共に下ぶくれ状の体部から口縁部に向かって内傾し、端部を尖り気味に收める。孔は外面下方より内面上方に向かって穿つ。器面は風化のため調整は不明瞭である。順に口径5.7、5.6cm、器高11.9cm、10.5cmを測る。

565～584は須恵器で、565～572は坏蓋である。565・566は口縁部と天井部の境界に鈍い沈線が巡る。565の天井部は平坦気味で、2/3に回転ヘラ削りが及ぶ。566は口縁端部内面が内傾し、不明瞭ながら浅い沈線を配する。天井部外面の回転ヘラ削りは1/2である。567～572は口縁部と天井部の境界が丸味を帯び、沈線は認められない。口縁端部は569を除いて丸味をもって收める。また、天井部の回転ヘラ削りは1/2に及ばない。567は焼成がやや軟質で、口縁部と天井部の境界で緩く屈曲し、外面に鈍い稜線が巡る。569は焼成不良のため赤褐色を呈する。口縁端部内面には僅かに内傾し、不明瞭な沈線が認められる。570は復元口径12.5cmと他の個体より小振りで天井部は平坦に近い。571は天井部内面に當て具痕が残る。572は口縁部が鈍く屈曲し、天井部は平坦である。573～582は坏身である。立ち上がりには内傾し、端部は丸く收める。外底部の回転ヘラ削りは1/2以下である。573は立ち上がりが長めで、焼成は軟質である。575・579は受け部が短く、575は内底部にヘラ記号を有する。576は赤褐色の色調で、口縁部を緩く外反させる。577・580～582は立ち上がりが短く、強く内傾する。583は提瓶で、頸部から口縁部が強く外反する。口縁端部は上方に引き出し、口唇部には2条の鈍い沈線が巡る。肩には把手を付すが、大半を欠失する。体部外面及び頸部上半はカキ目、体部内面はナデ、他は回転ナデを施す。584は短頸壺で、口縁部を欠失する。胴中位で緩く屈曲する。外底部は回転ヘラ削りする。外面は薫変により黄白色を呈する。



第97図 SK0003出土遺物実測図 3 (589は1/2、585~590は1/1、他は1/3)



第98図 SK0008出土遺物実測図(1/3)

585～588は滑石製白玉である。他に白玉欠損品1個、白玉未製品Bの欠損品4個、滑石屑76.1g及び底面上では重量226.9gを測る粗割りした原石が出土している。

589は鉄製刀子片で、銹化が著しいが、刃元から茎部にかけてが遺存しているものと思われる。

599はヒスイ製の小玉である。径6.6mm、厚さ3.2mm、孔径2.4mmを測る。

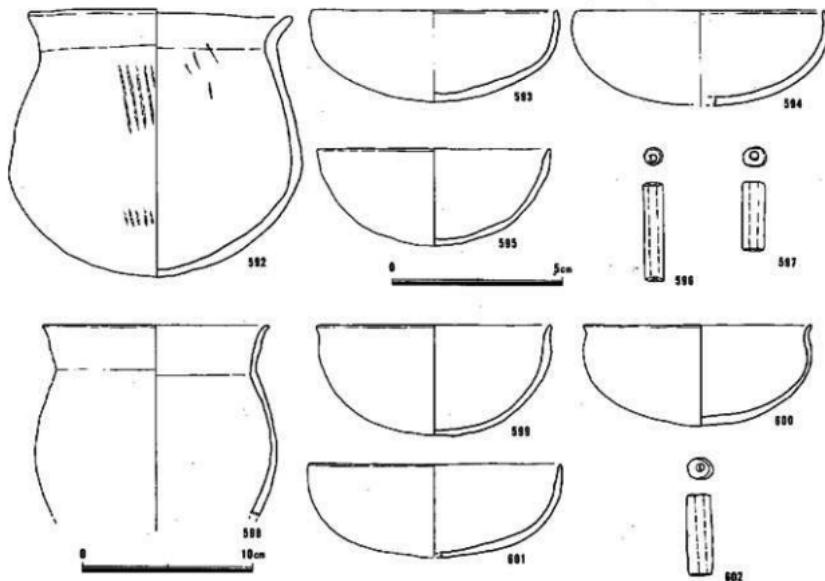
SK0008(第94図) D-1区に位置し、SK0003に切られる。また、北側は段落ちによって削平を受けるため、全容は不明であるが、残存状況より不整な方形プランを呈する

ものと考えられる。深さ25cmを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、柱穴等の掘り込みは検出されなかった。

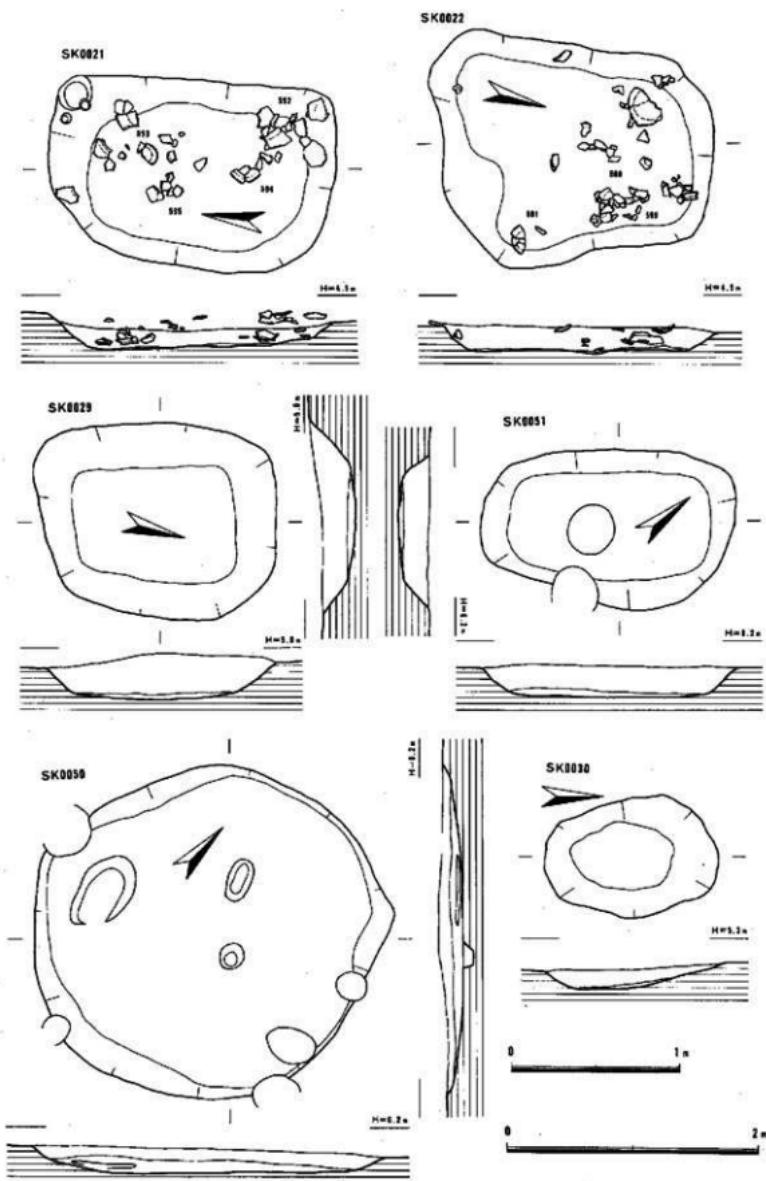
出土遺物(第98図) 591は復元口径15.0cmを測る土師器甕である。ナデ肩の体部に外反する口縁部を有し、口唇部は面をなす。外面は磨滅するが、内面の体部には刷毛目、口縁部はヨコナデを施す。また、内面の頸部下には煤が付着する。他に土師器、須恵器の細片が出土している。

SK0021(第100図) A-1区で検出した隅丸長方形の土坑である。長さ1.75m、幅1.1m、深さ20cmを測る。北東隅に径20cm、深さ20cmのピットを有する。覆土は暗灰茶褐色土で、炭化物、滑石屑が含まれる。なお、滑石屑は134.1g出土した。

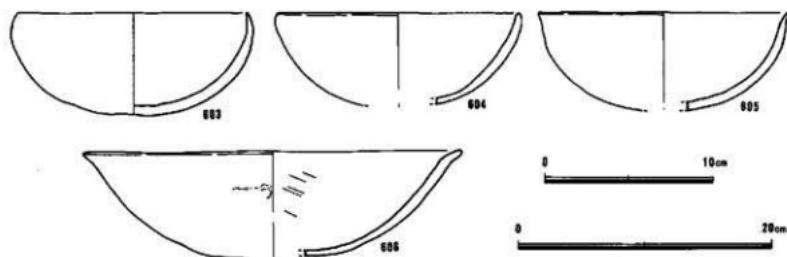
出土遺物(第99図 592～597) 底面よりやや浮いた位置から上位にかけて土師器、滑石製品が出土



第99図 SK0021-SK0022出土遺物実測図(596-597-602は2/3、他は1/3)



第100図 SK0021・SK0022・SK0029・SK0030・SK0050・SK0051実測図(SK0050は1/40、他は1/30)



第101図 SK0029出土遺物実測図(606は1/4、他は1/3)

した。592は南東隅で出土した壺で、下ぶくれ状の体部に緩く外反する口縁部がつく。二次的加熱により外面下半は赤変し、器面が荒れるが、叩きが僅かに残る。内面は粗いヘラ削りを施す。復元口径15.4cm、器高15.8cmを測る。593～595は壺で、593・594は口縁部を内湾気味に収める。595は口縁部が外方に開く。いずれも色調は赤褐色を呈し、器面が風化する。596・597は滑石製管玉で、底面より浮いて出土した。順に重量は1.7g、1.6gを測る。他の滑石製品として有孔円盤の未製品片1個、白玉未製品8個(うち、欠損品2個)が出土している。

SK0022(第100図) A-1区で検出した。SK0021に並列し、不整な隅丸方形を呈する。長さ1.6m、幅1.4m、深さは10cmを測る。覆土はSK0021と同色で、炭化物、滑石屑が同様に含まれる。滑石屑は231.6g出土した。

出土遺物(第99図 598～602) 土師器、滑石製品が出土したが、大半が底面から浮いた状態である。598は小型の壺で、口縁部が長く外反し、胸部は張りが弱い。器面が磨滅し、調整は不明である。599～601は壺で、599・600は口縁部が僅かに外反し、601は上方に薄く延びる。いずれも器面が風化する。602は滑石製管玉の完形品で、上面付近で出土した。重量は1.9gを測る。

SK0029(第100図) B-2区に位置し、隅丸方形を呈する。長さ1.4m、幅1.15m、深さ30cmを測る。覆土は暗褐色土である。

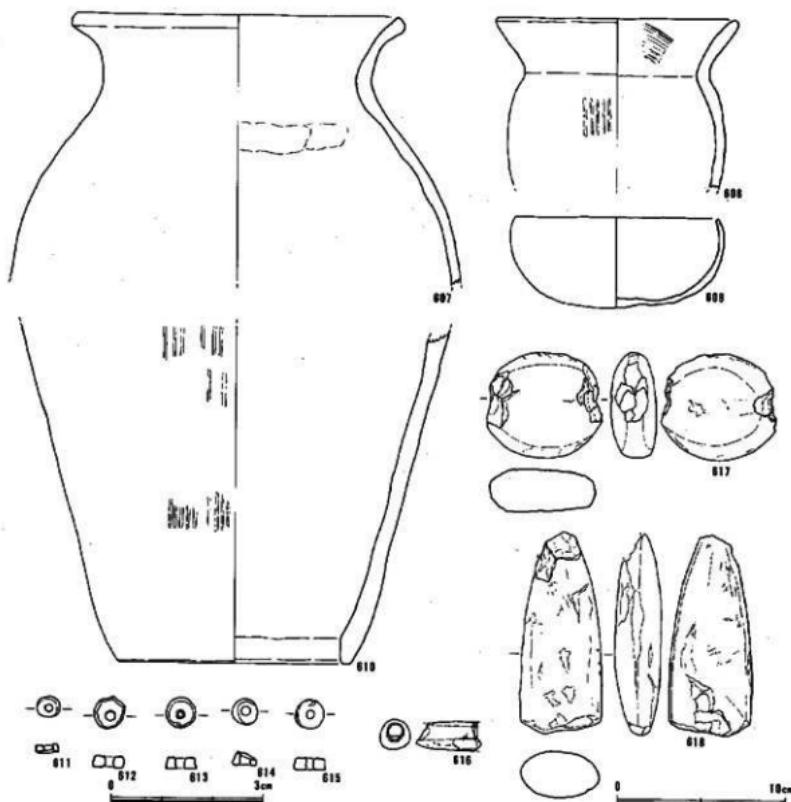
出土遺物(第101図) 土師器、少量の須恵器、滑石屑が136.6g出土したが、図化し得たのは土師器のみである。603～605は壺で、口縁端部のつくりが異なる。いずれも器面が磨滅する。603は完形に近い状態で、南壁沿いにおいて出土した。606は大型の鉢で、口径は29.8cmに復元できる。口縁端部を緩く外反させ、内面はヘラ削りする。

SK0030(第100図) C-2区で検出した小規模な不整梢円形の土坑で、長径1.05m、短径0.6m、深さ10cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。

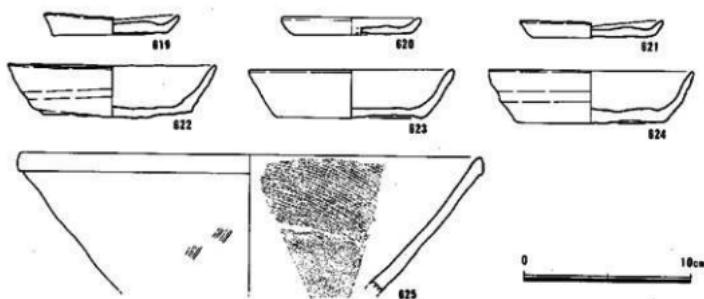
出土遺物(第102図 607) 607は底面中央部で出土した土師器壺で、口唇部は面を呈する。内外面共に磨滅が著しい。他に土師器壺・高杯、須恵器壺等の細片が出土している。

SK0050(第100図) E-2区に位置する。円形を呈し、径2.6～2.8mを測る。底面は平坦で、浅いピット状の掘り込みがある。壁面にかけては緩く立ち上がる。覆土は灰茶褐色土である。

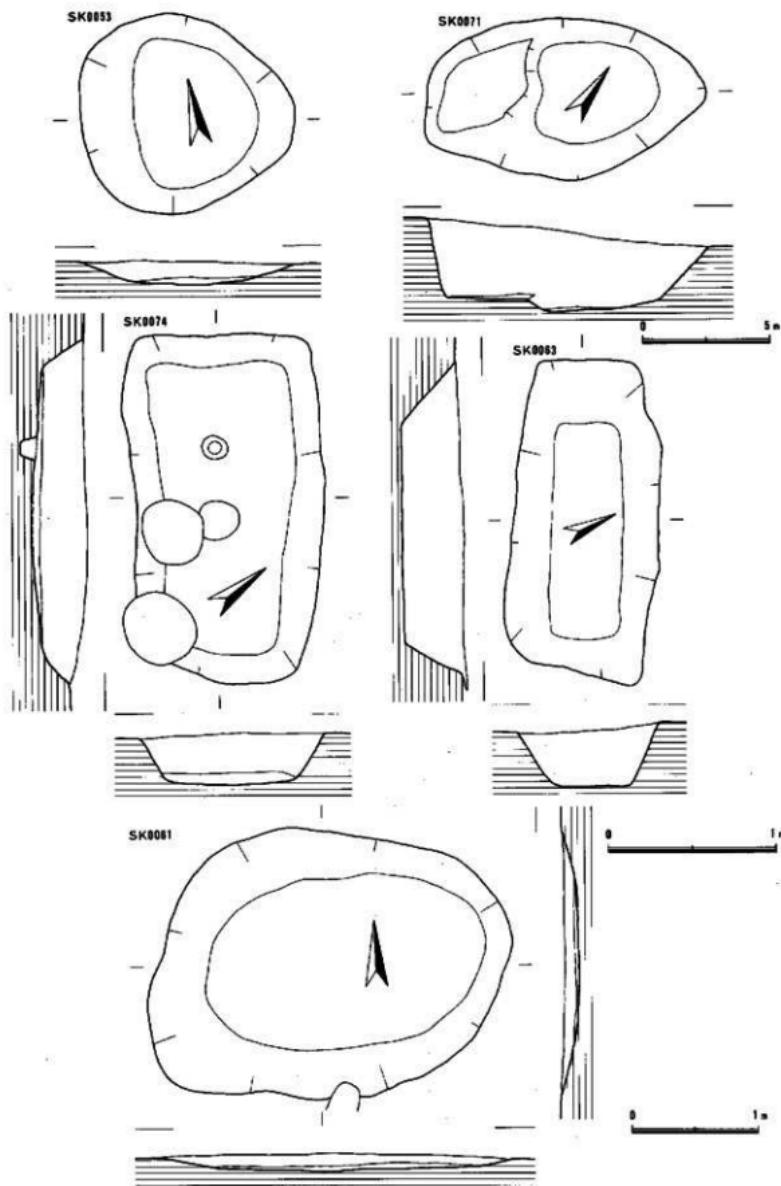
出土遺物(第102図 608) 608は土師器壺で、口縁部を長く外反させる。器面が荒れるが、体部外面に叩き、口縁部内面に刷毛目が残る。土師器は細片が多く、須恵器は小片1点のみである。他に滑石製白玉未製品Bの欠損品3点、滑石屑25.9gが出土している。



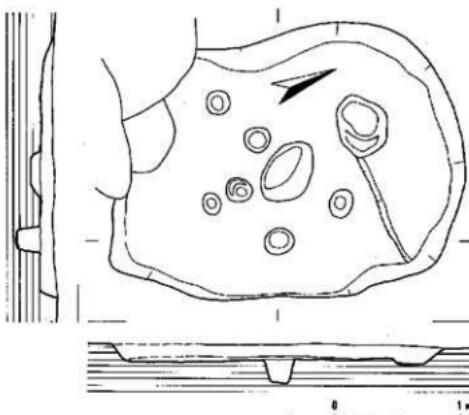
第102図 SK0030・SK0050・SK0053・SK0061・SK0063・SK0071・SK0082出土遺物実測図
(611～615は1/1、他は1/3)



第103図 SK0074出土遺物実測図(1/3)



第104図 SK0053・SK0061・SK0063・SK0071・SK0074実測図(SK0061は1/40、SK0071は1/20、他は1/30)



第105図 SK0082実測図(1/40)

玉である。他の出土遺物には土師器、須恵器の細片が少量ある。

SK0061(第104図) I-1区に位置する。不整な楕円形を呈し、長径2.8m、短径2.1m、深さ10cmを測る。壁面はきわめて緩く立ち上がる。覆土は淡灰茶褐色土である。

出土遺物(第102図 616) 出上土器は土師器、少量の須恵器の細片のみである。図化し得たのは616の管状土錐のみで、両端部を欠失している。

SK0063(第104図) I-2区で検出した長方形の土坑で、長さ1.8m、幅0.9m、深さ30cmを測る。断面は逆梯形をなし、覆土は明灰茶褐色土である。

出土遺物(第102図 316) 316は磨製石斧で、基部先端を欠損する。出土土器には土師器、須恵器の細片が少量ながらあり、混入品と考えられる。

SK0071(第104図) I-3区に位置し、SC0010を切る。不整楕円形で、長径1.1m、短径0.65mを測る。西側に平坦面を有する。

出土遺物(第102図 609・612) 609は土師器塊で、口縁部は内溝気味に立ち上がる。淡黄橙色を呈し、胎土は精良である。612は滑石製白玉で、側面に角が残り、研磨途中の未製品であると考えられる。他に土師器、少量の須恵器細片がある。

SK0074(第104図) F-2区で検出した。SC0004等の堅穴住居を切る隅丸長方形の土坑である。堅穴住居の床面で確認し、前後関係はセクションベルトで追認した。長さ2.05m、幅1.1mを測り、底面西側に深さ10cmの小ピットを有する。

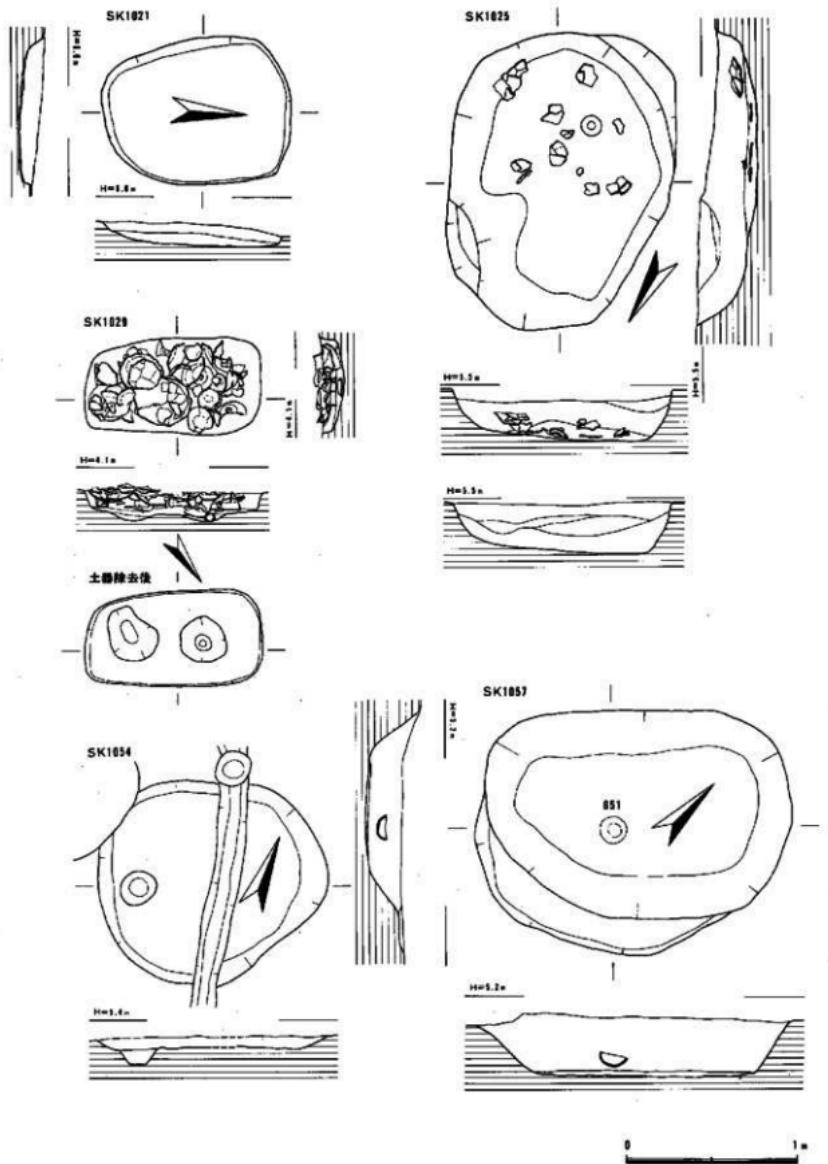
出土遺物(第103図) 土師器小皿・壺等が西側でまとまって出土した。土壤基の可能性があるが、底面より浮いた状態で出土している。なお、623・625を除いて破片接合によって完形近くに復元できる。619~621は小皿で、口径7.9~8.4cm、器高1.1~1.3cmを測る。外底部は回転糸切りで、620には板状圧痕が認められる。622~624は壺で、口径12.0~12.2cm、器高3.0~3.1cmである。外底部は回転糸切りで、622・624には板状圧痕がつく。625は須恵質の鉢で内面は刷毛目を施す。

SK0082(第105図) G-2区に位置し、SC0013を切る。不整な隅丸長方形で、長さ2.6m、幅2.0m、深さ10cmを測る。底面ではピットを確認したが、覆土の類似によって上面で検出し得なかったものを

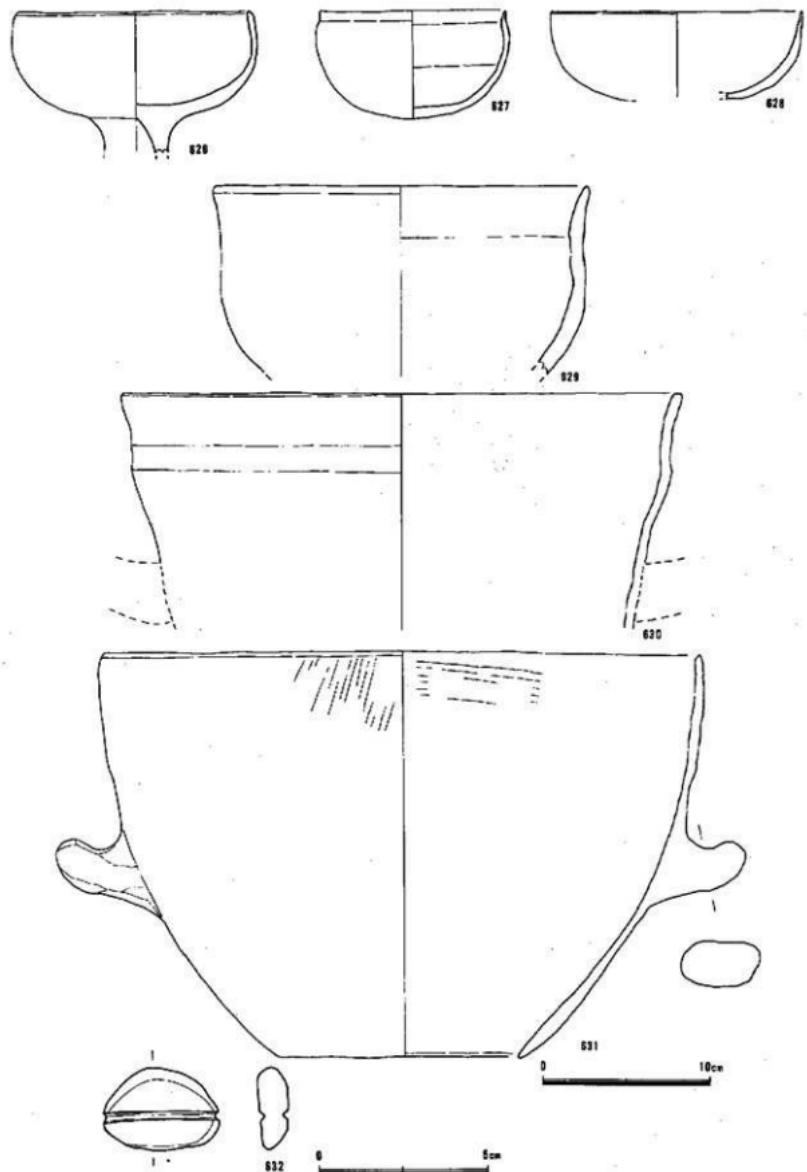
SK0051(第100図) E-2区で検出した。SC0005の中央部に位置し、隅丸長方形のプランを有する。長さ1.5m、幅1.0m、深さ20cmである。覆土は淡茶褐色土に黄褐色土のブロックが混じり、SC0005の堅溝覆土とは異なる。遺物には土師器、須恵器の細片が少量ある。

SK0053(第104図) F-1区で検出した不整形の小規模な土坑である。深さ15cmを測り、断面は浅皿状を呈する。

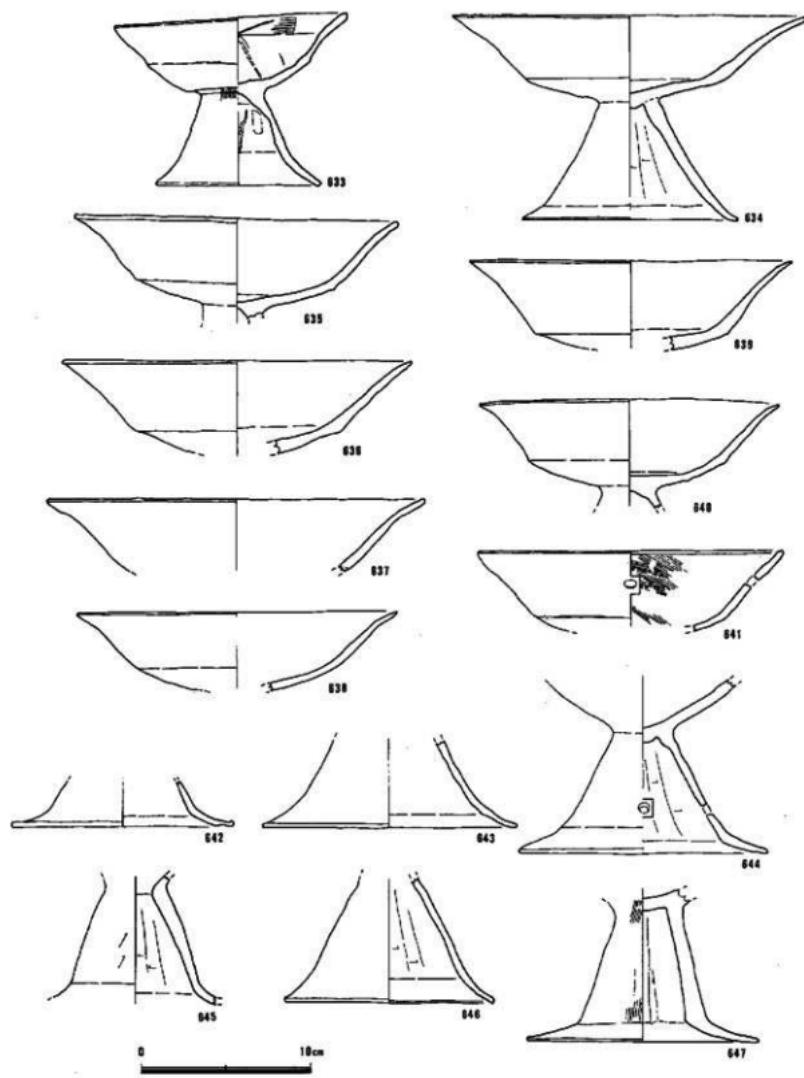
出土遺物(第102図 611・617) 617は砂岩製の石錘で、重量は147.6gを測る。611は滑石製白



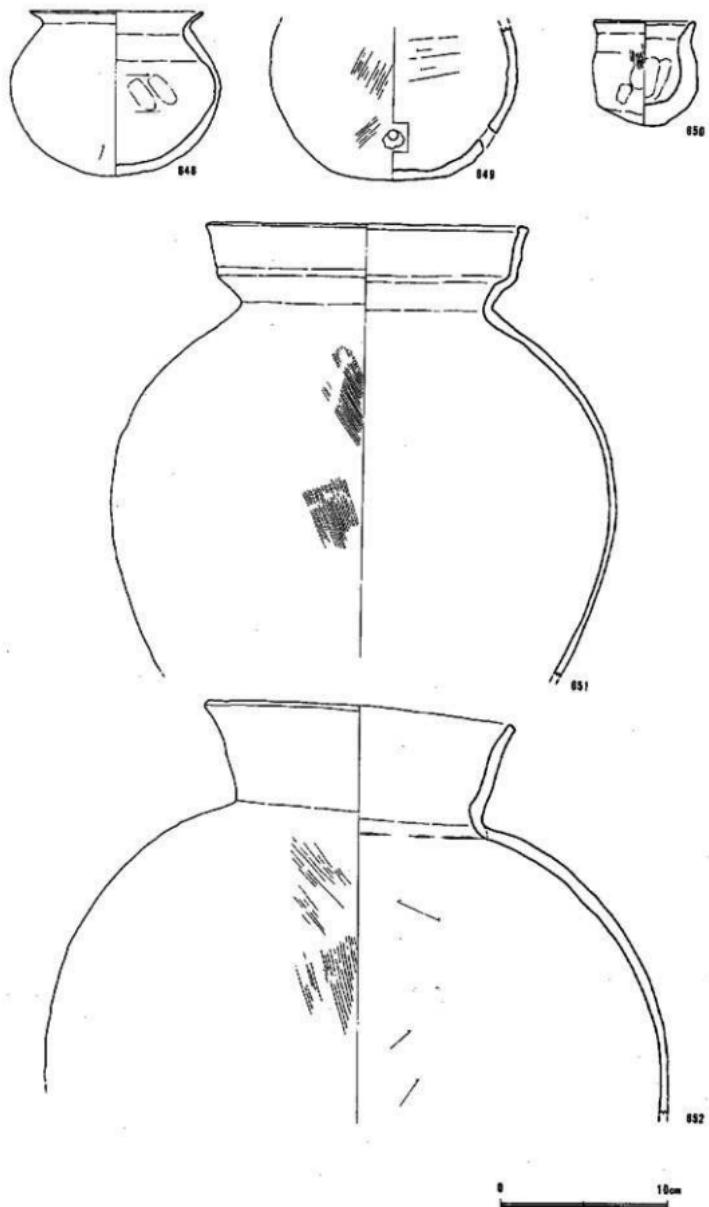
第106図 SK1021・SK1025・SK1029・SK1054・SK1057実測図(1/30)



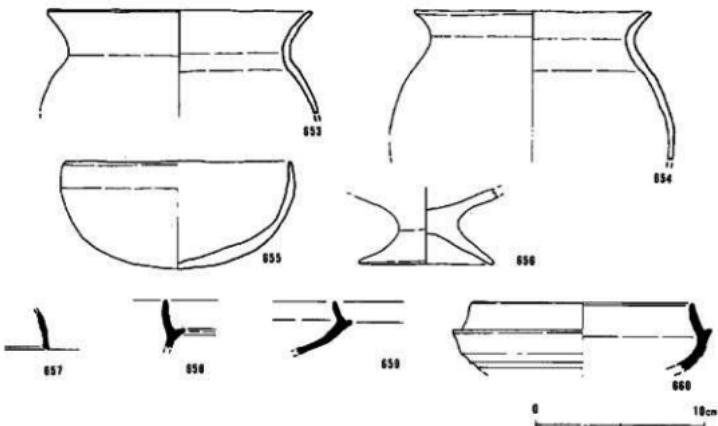
第107図 SK1025出土遺物実測図(626~631は1/3、632は2/3)



第108図 SK1029出土遺物実測図 1 (1/3)



第109図 SK1029出土遺物実測図 2 (1/3)



第110図 SK1057出土遺物実測図(1/3)

含む可能性がある。

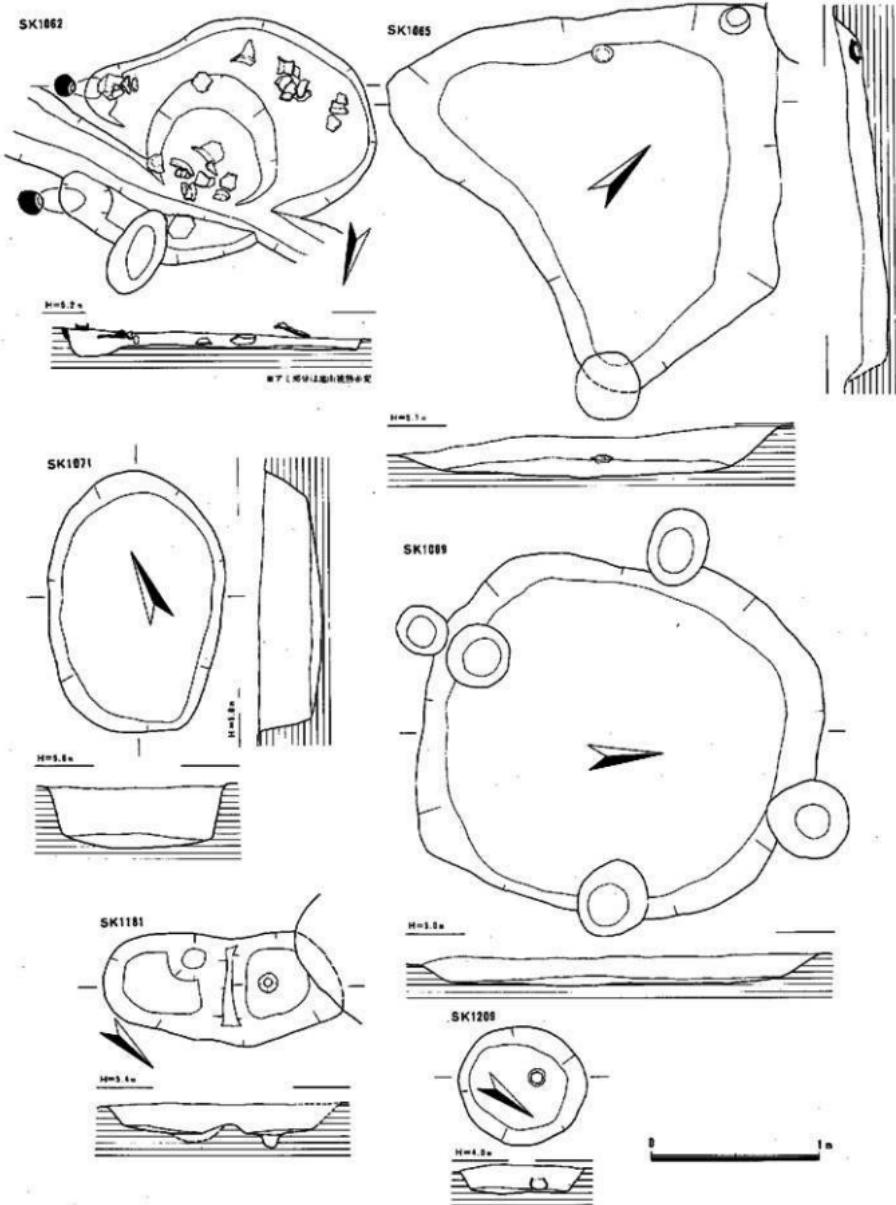
出土遺物(第102図 610・613~615) 610は土師器瓶の底部である。外面には叩きが残るが、内面は磨滅により調整は不明である。613~615は滑石製臼玉で、他に臼玉未製品B4個(うち、欠損品1個)、土師器・須恵器の壺片が出土している。

SK1021(第106図) D-2区で検出する。長軸1.1m、短軸0.85m、深さ15cmを測る隅丸長方形の土坑である。埋土は暗褐色土で、断面浅皿状を呈する。土師器・須恵器の小破片が出土する。また埋土中に滑石チップが混入する。

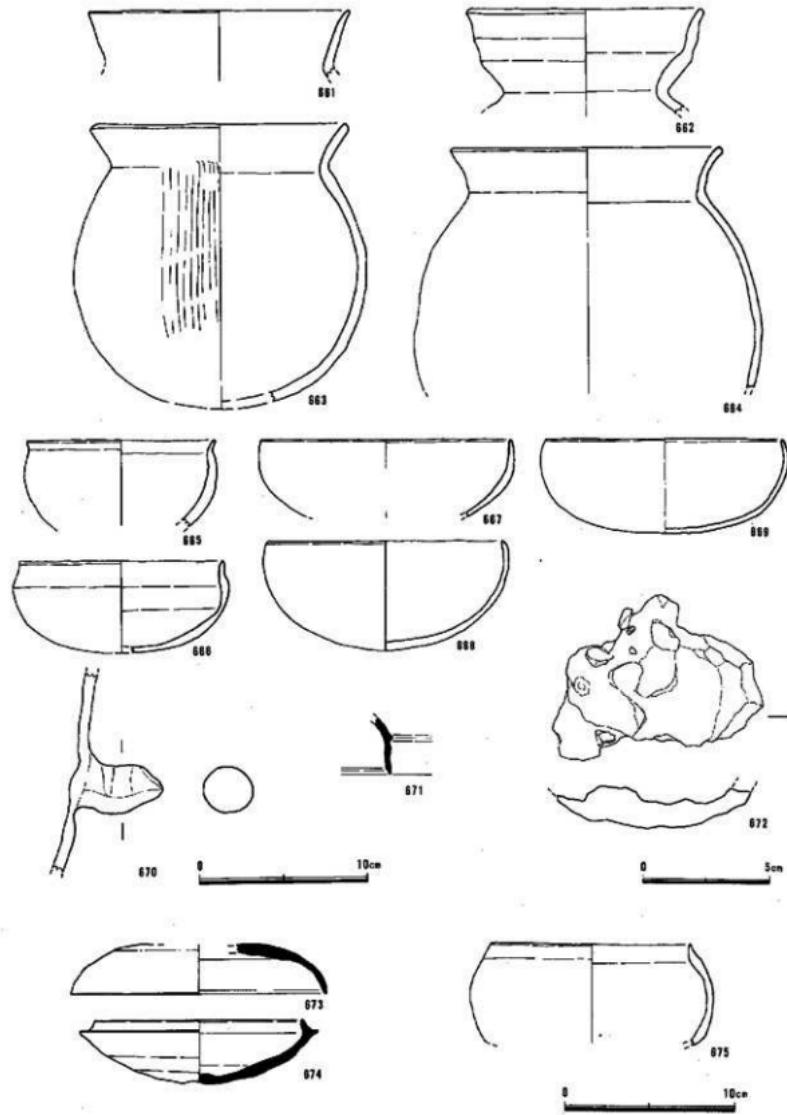
SK1025(第106図) G-2区で検出する。SC1011の西壁を切る。長軸1.8m、短軸1.3m、深さ30cmを測る長円形の土坑である。埋土は暗褐色土を主体とする。中央から南側を中心に土師器壺・椀・高杯・瓶、須恵器蓋壺の小破片が出土する。出土遺物から6世紀後半~7世紀初頭に位置づけられる。

出土遺物(第107図) 626~631は土師器である。626は楕円形の壺部を有する高杯である。脚部は短い筒状を呈する。627、628は椀である。627は口縁端部が外反屈曲する。器面が磨滅しているが内面には板ナマが残る。色調内外面共に淡黒褐色を呈する。628は外底面に手持ちのヘラ削りを行う。629~631は瓶である。629、630は口縁端部は緩やかに外反させて納める。629は把手部分以上が残存する。外面2次焼成を受け器面が剥落する。630は把手挿入部分まで残る。内面には刷毛目を行う。630は外面縦刷毛を行い、内面は口縁端部には横刷毛を施しそれ以下には縦方向のヘラ削りを行う。632は滑石製の石錐である。長軸方向に溝を周回させる。重量は12.4gを測る。

SK1029(第106図) J-6区で検出する。長軸1.05m、短軸0.55m、深さ10cm程度を測る長方形の土坑である。埋土は暗褐色土である。土坑は大きく削平を受けているが、土師器壺・壺・高杯が坑内全体に詰め込まれたような状態で出土した。遺物は破損による小破片が少なく、倒置・横置が多く認められることから、投棄されたものではなく坑内に隙間無く詰め込まれたものと考えられる。或いは箱状の入れ物に詰められた可能性も想定できるがこれについても掘削時の感想に過ぎない。遺物には高杯が目立って多く、ミニチュアも含まれることから祭祀行為との関係も考えられる。土器除去後の土坑



第111図 SK1062・SK1065・SK1069・SK1071・SK1181・SK1208実測図(1/30)



第112図 SK1062・SK1065・SK1209出土遺物実測図(661～671・673～675は1/3、672は1/2)

底面には窪み状の凹凸が2個所に存在する。5世紀前半の所産であろう。

出土遺物(第108・109図) 出土遺物はいずれも土師器である。633～647は高環である。完形に復元できたものは少ない。脚部は僅かに外側に膨らみを有しながら広がり、脚端部は短く立ち上がり気味に外方に開くものが主体を占める。633は環部内面に粗い板ナデが残り、外面のナデも粗い。脚部外面には縦刷毛、筒部内面は横方向のヘラ削りを行っている。脚根部は内湾気味に踏ん張る。634は主体を占める高環の典型である。環部は円盤状の底面に外湾する口縁部を貼り付ける。内面には一部に刷毛目が残る。脚部は内面に横方向のヘラ削りを行い、脚根部は短くラッパ状に張り出す。636は環部接合部外面が明瞭な張り出しをなす。641は屈曲部外面は沈線状をなす。口縁端部は内湾し内面に肥厚する。また口縁部に1ヶ所焼成後の穿孔が行われる。環部内面には横方向の刷毛目を施す。644には筒部下位に穿孔を有する。647は筒部は外に膨らむが開き方が他の脚に比べて立ち上がり気味である。また脚根部は低平に広く開く。648、649は小型の壺である。648は胴部下半は内外面共にヘラ削りを行う。649は内面粗い削り、外面縦刷毛目を行う。また底部付近に内面からの焼成後穿孔が行われる。650はミニチュアの壺である。651は二重口縁壺である。口縁部の屈曲はシャープさを欠き、口縁端部は内外の両側に肥厚する。胴部外面は縦刷毛、内面はヘラ削りを行う。652は直口壺である。外面縦刷毛、内面横方向のヘラ削り。

SK1054(第106図) G-3区で検出する。SD1027に切られる。径1.2～1.3m、深さ10cmを測る円形の土坑である。埋土は暗褐色土である。土師器小破片が若干出土している。

SK1057(第106図) G-4区で検出する。SD1027に切られる。長軸1.8m、短軸1.5m、深さ30cmを測る隅丸長方形の上坑である。埋土は暗褐色土である。底面は平坦で床面からやや浮いて土師器碗が完形で出土している。この他土師器壺・椀・高環・把手・須恵器蓋壺・壺が出土している。6世紀後半に位置づけられる。

出土遺物(第110図) 653～656は土師器である。653、654は壺である。口縁部は緩く屈曲外反する。655は完形の椀である。器面が剥落し調整は不明瞭である。656は脚部破片である。脚根部は短く踏ん張る。657～660は須恵器蓋壺である。657は口縁部内面に窪みを有する。658、660は受け部立ち上がりが高く、659は短く内傾している。

SK1062(第111図) G-3区で検出する。SC1018、SD1061に切られる。長軸1.8m、短軸1.3mを測る隅丸長方形土坑の東壁に煙道状掘り込みを2個所に有する。土坑部分は深さ5cm程度で中央に更に5cm程の浅い窪みを有する。土器は底面全体から小破片が出上しているが、2次的な焼成は受けておらず、完形に復元できるものもない。煙道部分は立ち上がり前面で緩く落ち窪み、天井部及び立ち上がる壁の部分が被熱により厚さ2cm程赤変している。造構の性格としては土器の焼成窯等の可能性を考えられるが類例の増加を待って判断したい。遺物には土師器壺・椀・瓶及び須恵器蓋壺小破片1点がある。6世紀代に属するものであろう。

出土遺物(第112図) 661～672 661～670は土師器である。661～664は壺である。662は口縁部中位に段を有し、二重口縁をなす。663は外面に粗い縦刷毛を行う。外面に2次焼成の痕跡が残る。664は口縁部は屈曲外反する。外面は板ナデによる。665～669は椀である。665、666は口縁部を如意状に外方に引き出す。667～669は口縁部は丸く内湾気味に納める。670は細身の把手である。671は須恵器蓋である。外面の口縁部と天井部の間に突帯を巡らす。また口縁部内面には段を有する。672は薄手の椀形鍛錬鍛冶済である。底面には炉壁の青灰色粘土が付着する。また内面はガラス化し黒色を呈する。木炭痕は不明瞭である。

SK1065(第111図) G-4区で検出する。最大長2.3m、深さ20cm程度を測る不整形の土坑である。埋土は灰褐色土である。底面は平坦で北西壁面忝いに須恵器壺身1個体が完形で出土している。SK1065はSC1013・SD1051に隣接しており、壁はほぼ接するように並んでいる。位置的な関係から同時期に存在していた可能性が高いと考えられる。この他土師器壺・碗・高壺・須恵器蓋壺・壺が出土している。6世紀後半に位置づけられる。

出土遺物(第112図 673・674) 須恵器蓋壺である。673は天井部1/2迄回転ヘラ削りを行う。674は完形品で、外底面の1/2迄回転ヘラ削りを行う。

SK1069(第111図) G-4区で検出する。SC1049床面で検出しており、切り合い関係が埋土の違いが分からなかった為前後関係は判然としない。出土遺物からはSK1069がやや古そうである。またSB1073に切られている。径2.3m、深さ15cmを測る略円形の土坑である。埋土は褐色土である。土師器壺・碗・高壺破片が出土している。

SK1071(第111図) H-3区で検出する。SC1034・1036を切る。長軸1.5m、短軸1.0m、深さ30cm程度を測る長円形の土坑である。埋土は黒褐色土を主体とする。底面はやや窪み、断面皿状を呈している。中央から南側を中心に土師器壺・碗・高壺・手づくね土器・須恵器小破片が出土する。出土遺物・切り合い関係から6世紀後半~7世紀初頭に位置づけられよう。

SK1181(第111図) G-3区で検出する。長軸1.4m、短軸0.6mを測る長円形の土坑である。両サイドに浅い落ち込みを有し、ピットの切り合いの可能性もある。埋土は暗褐色土である。土師・須恵器小破片と共に自然石が投棄されていた。

SK1209(第111図) J-6区で検出する。SC1016との切り合い関係は不明である。70cm程度の円形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面に小型壺が正置されていた。

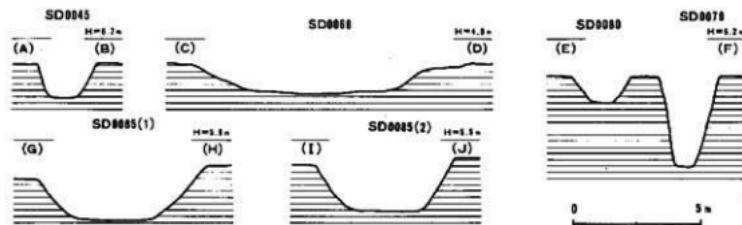
出土遺物(第112図 683) 土師器無頸壺である。出土時はほぼ完形であったが、磨滅のため上部のみの復元である。口縁部は僅かに屈曲させ上方に引き上げている。調整は不明瞭である。

(4) 溝

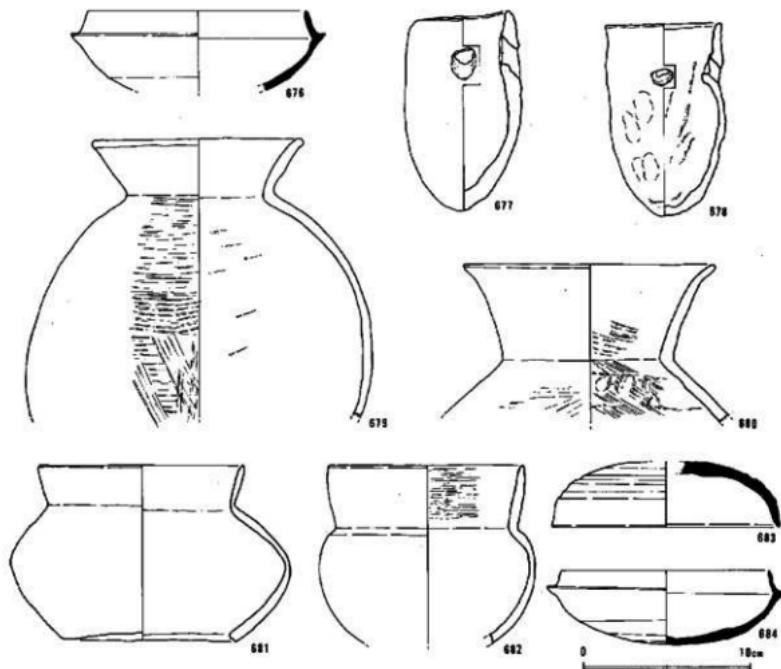
以下に報告する溝のうち狭長なSD0045-0079-0080は堅穴住居に付随し、排水等の機能を有する施設と考えられる。ただし、削平、重複によりSD0079を除いては帰属する堅穴住居は不明である。

SD0045(第113図) E-1区からD-2区にかけて検出された。南西端部は尾根線付近に位置しており、削平によって消失する。北東部ではSK0003に切られる。現存の総延長は約7mを測り、略直線的に北東に緩く傾斜し延びる。断面逆梯形を呈し、幅25cm前後、深さは北東端で10cmを測る。

出土遺物(第114図 676-677) 676は須恵器の壺身である。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸味を帯びる。器面がやや磨滅するが、外底部には回転ヘラ削り、他は回転ナデが施される。677は飯ダコ壺の完形品である。底面から5cm程度浮いた状態で出土した。尖底気味の底部から直線的な体部が



第113図 SD0045・SD0068・SD0079・SD0080・SD0085実測図(1/20)



第114図 SD0045・SD0079・SD0085出土遺物実測図(1/3)

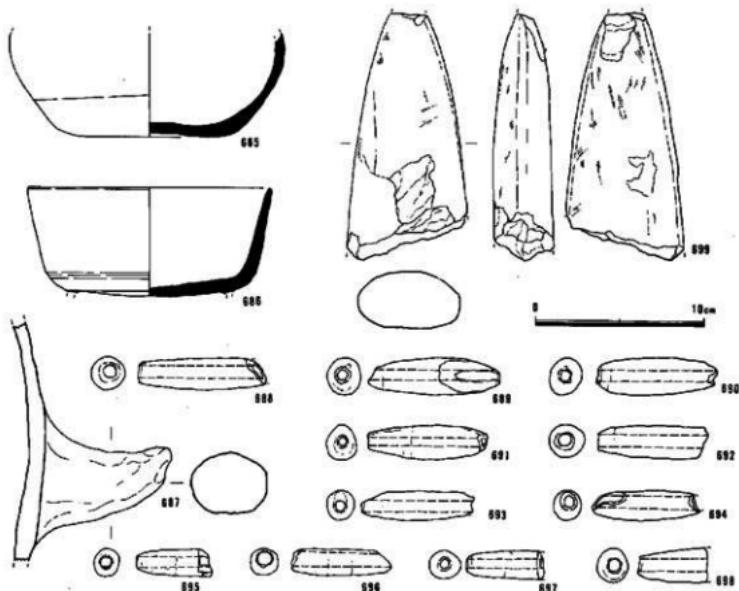
延びる。外面から内面に向かって焼成前に穿孔する。器面は磨滅し、調整は不明である。他に土師器壺・瓶把手、須恵器壺等の細片が出土している。

SD0068(第113図) J-2区に位置し、両端部は調査区外に延びる。覆土は淡灰茶褐色砂質土を主体とし、上層に薄く暗灰褐色砂質土が堆積しており、丘陵縁辺部の流路であると考えられる。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面にはやや凹凸が認められる。幅約1m、深さ15cmを測る。

出土遺物(第115図) 685は須恵器壺で、底部は丸味を帯び、上げ底状を呈する。内面及び外面の上半は回転ナデ、下半はヘラ削り、外底部はヘラ切りをナデ消す。精良な胎土を用いる。686は須恵器壺身である。底部と体部の境界は丸味を有し、底部端に高台を貼り付けるが、欠失する。内外面の体部は回転ナデ、内底部はナデを施し、外底部には回転ヘラ切り痕を残す。687は瓶の把手で、器面が磨滅する。688～698は管状土錠で、端部を欠失するものが多い。699は滑石製の磨滅石斧である。刃部及び基部先端を折損する。

SD0079(第113図) G-1区で検出した。SC0016の南側コーナーより緩く傾斜をもち、南へ直線的に延びる。南端はSC0013に切られる。SC0016の項で述べたが、貼床除去後の壁溝と連結する。断面は逆梯形で、幅25～30cm、深さ20～35cmを測る。

出土遺物(第114図 678～681) 須恵器は細片1点のみで、他は土師器が出土している。図化し得



第115図 SD0068出土遺物実測図 (1/3)

たのは、土師器のみである。678は飯ダコ壺で、尖底気味の丸底から上方に体部が延び、口縁部は僅かに外反させる。外面は指オサエによる器面の凹凸が顕著である。内面はヘラ状工具によってナデ上げる。外面から内面上方に穿孔を施し、内面には粘土が隆起する。器壁は薄く仕上げる。679・680は壺で、679は球形の体部に直線的に外方へ開く口縁部をもつ。端部は肥厚させ、丸く收める。体部外面の上半は叩き、下半は刷毛目を加える。体部内面はヘラ削りし、口縁部はヨコナデする。680は頸部で屈曲し、長く外傾する口縁部を有する。端部は短く折れる。外面は風化するが、肩に粗い刷毛目が残る。内面は頸部下を細かい刷毛目調整し、指オサエする。頸部の刷毛目はやや粗い。681は壺で、算盤玉状の体部に外傾する口縁部を有する。底部は焼成後、打ち欠く。赤褐色を呈し、器面は荒れる。なお、外面には黒斑が認められる。

SD0080(第113図) G-1区からH-2区にかけて検出された。SD0079に並行して南側に傾斜し、南端部で途切れる。北側はSC0016、中央部では0013-0014に切られる。幅20~40cm、深さ10cmで、断面は逆梯形である。遺物は土師器の細片が少量出土したにとどまる。

SD0085(第113図) H-2区に位置する。緩い弧をえがき、両端部は段落ちによって削平を受ける。中央部はSK0082に切られる。断面は逆梯形を呈し、幅50~70cm、深さ20cmを測る。

出土遺物(第114図 682~684) 682は土師器壺で、頸部で緩く屈曲し、直線的に上方に長く延びる口縁部を有する。色調は赤褐色で、精良な胎土を用いる。器面が荒れるが、口縁部内面には横方向のヘラ磨きが残る。683・684は須恵器で、683は壺蓋である。天井部と口縁部の境には太い沈線を配する。口縁端部内面は内傾し、鈍い沈線が巡る。天井部外面は回転ヘラ削り、他に回転ナデを施す。684は

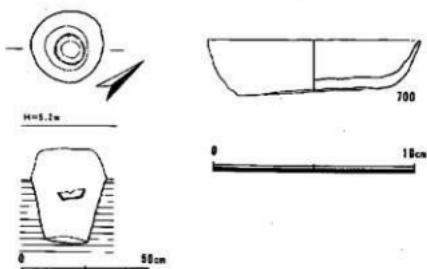
壺身である。内傾気味の短い立ち上がりを有する。外底部の1/2を回転ヘラ削りし、内底部はナデ、他は回転ナデを行なう。他に土師器を主体に、少量の須恵器の細片が出土している。

(5) その他の遺構と遺物

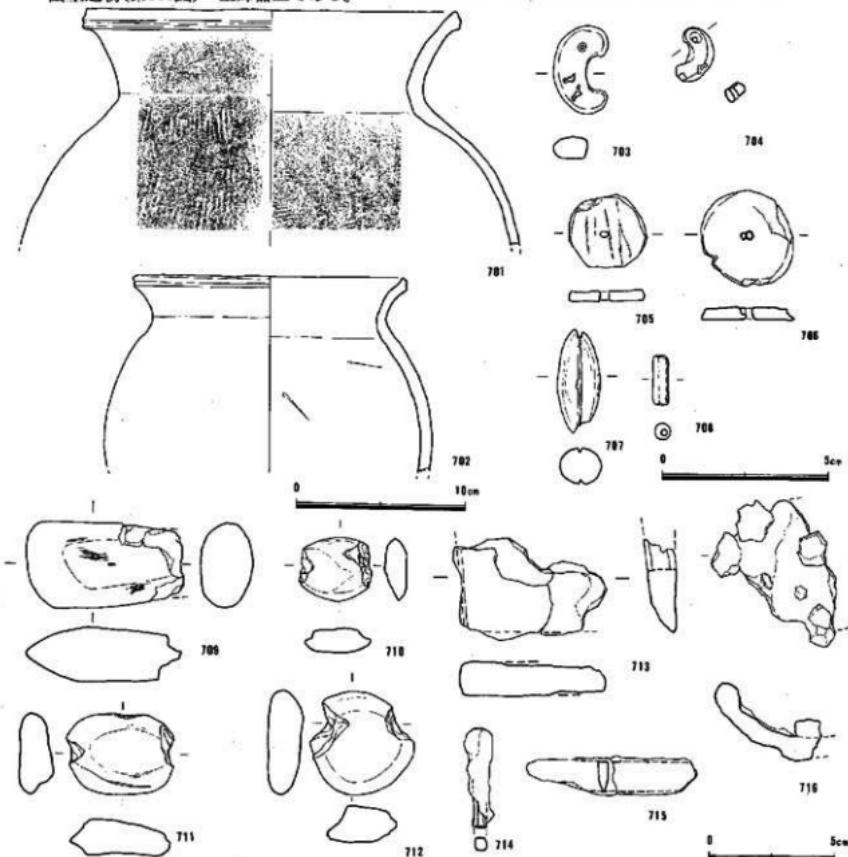
ここではピット、包含層、検山面出土の遺物を取りまとめて報告する。

SP1387(第116図) G-3区で検出する。径30cm、深さ35cmの円形ピットである。底面から浮いて土師器皿が出土する。

出土遺物(第116図) 土師器皿である。



第116図 SP1387及び出土遺物実測図(1/20, 1/3)



第117図 その他の遺物実測図(1/3, 1/2, 2/3)

外底面には糸切り、板状圧痕が残る。

701・702はF-1区に位置し、SC0006を切るピットより出土した土師器甕である。701はやや肩の張る体部に外反する口縁部を有する。外面の屈曲の稜は緩い。口唇部外面は面取りし、端部下には純い沈線が巡る。内面端部は尖り気味に收める。外面には叩きを施し、頸部は粗くヨコナデする。内面の体部は細かい當て具痕を指オサエの後残す。702はナデ肩の体部に短く外反する口縁部が付く。端部は丁寧に面取りし、凹線状に窪ませる。器面が風化するが、体部内面はヘラ削りが残る。

703～708は滑石製品である。703・704は勾玉で丁寧な研磨を施す。703は重量は4.8 gを測る。705・706は有孔円盤で、705は周縁部を研磨するが、直線的な面を残しており、未製品の可能性がある。3.6 gを測る。707は端部の一部を欠失する紡錘形の石錐で、長軸方向に溝を配する。重量は5.4 gを測る。708は完形の管玉である。

709は某部が欠失した蛇紋岩製の磨製石斧である。710～712は両端部を打ち欠く石錐である。710は砂岩製で83 g、711は蛇紋岩製で33 g、712は砂岩製で91 gをそれぞれ測る。

713は鋳造鉄斧である。横断面はほぼ長方形を呈し、袋部の一方は凹形をなすものであろう。全体に鋳化が著しく細部は不明瞭である。メタル反応はH(O)である。714は断面5mm角の棒状の鉄製品である。軸部分に当たるものであろう。715は刀子破片である。鋸に覆われ関部は不明瞭である。716は銀鍊鐵治済である。内面はガラス化し黒色を呈する。また底面に径1cm程度の洋が瘤状に付着しているが、鍛造削片は認められない。薄手の楕円形済で668に類するものである。

IV. 結 語

遺構の変遷について

各遺構・遺物については前章までに述べてきたが、最後に簡単に概要を整理し、纏めにかえたい。なお旧石器時代の遺物についてはI-4)において吉留氏に整理していただいている。

まず調査区の弥生時代～古墳時代について遺構の時期的な変遷をおおまかに辿りたい。

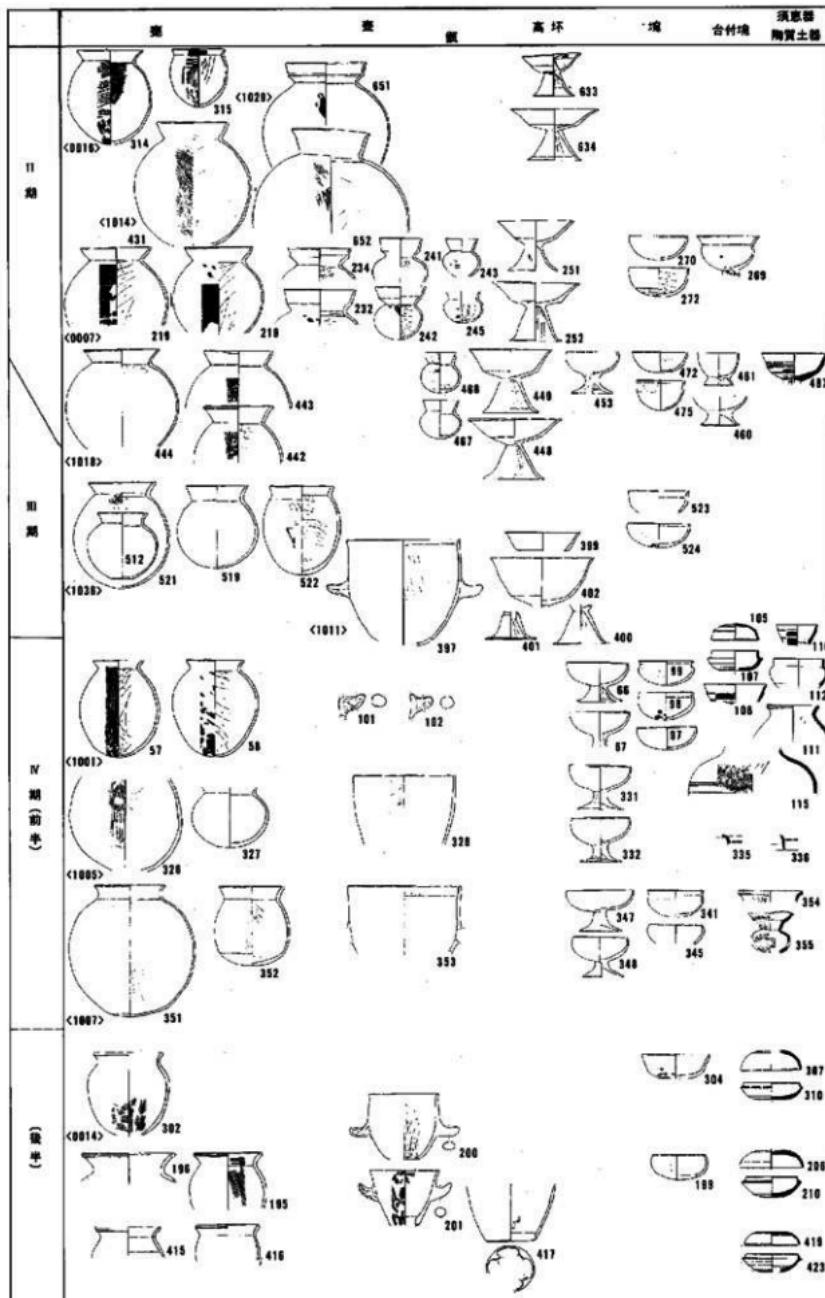
I期：弥生時代中期後半にあたる。SC0012のみの検出である。遺構数は少ないものの住居規模やSC1008からの青銅製鏡の出土を考えると調査区外にはまとまった集落の存在が考えられる。

II期：4世紀代にあたる。出土遺物中所謂古式土師器は殆ど見られず、集落が一時断絶していたものと考えられる。SK1029、SC0007、1014が後半から末頃に位置づけられる。甕は球形～長球形を呈し、口縁部は立ち上がりが強く、口縁部は内湾するものと直線的～僅かに外反するものが混在する。内面のヘラ削りは頸部まで行われるものが多い。SC0016では外面タタキを有する甕が出土しており、4世紀の前半以降に位置づける。SC1018は4世紀後半～末に上る可能性がある。高坏は裾広がりのラッパ状の高坏で、まとまって出土するのが特徴である。また6世紀代に見られる楕形の高坏がSC1018で共伴している。またこの時期までは甕は導入されていない。

III期：5世紀代にあたり、甕が導入される時期である。SC1011、SC1036が前半代に位置づけられ調査区内での甕初出である。甕はやや下膨れの球形を呈し、口縁部は外反する。また小型丸底壺がこの時期迄に消滅する。

IV期：6世紀～7世紀初頭に位置づけられ、集落の盛行期である。堅穴住居は基本的に屋内に甕を有し、4本主柱である。前半代にSC0001、0002の滑石工房が営まれる。甕は長胴・下彫れとなり、須恵器が伴出する。また高坏は低脚で楕形の坏部を有するものに代わり、同形の土師器碗とともに多量に出土する。この高坏は甕支脚としての使用が見られ、甕の採用に伴い増加していく。SC1005もほぼ同時期と考えられ、SC1007が後続する。後半代になるとSC0006、0013、0014、1010、1013、1031、1034、SK0003多くの遺構が残されている。遺物としては須恵器とともにこれを模したタタキを有する甕が主体を占めるのが特徴的である。また器種構成が貧弱となり遺物全体の出土量も少なくなる。この後7世紀初頭になると堅穴住居が廃絶し、直後に掘立柱建物群が形成された様である。建物は規模・配置等に規格制を持っているが性格については不明である。

以上簡単に時期的な変遷を述べてきたが、出土遺物の細かな検討は行っておらず大雑把なものとなってしまっている。今後の検討課題としたい。



第118図 出土土器変遷図(1/12、1/16)

滑石製品製作工房について

本文中で述べたようにSC0001は滑石製品製作工房であると考えられる。SC0001以外の5・6世紀代の大半の堅穴住居、土坑等においても滑石屑、(未)製品が出土しているが、出土量を比較すると本遺構は他を凌駕していることや、作業用土坑(P5・P6)を有し、構造上の差異が認められる点、工具である刀子及び錐と考えられる鉄製品が出土していること、また作業台として使用したと推察される自然石が床面で検出されるなどの工房としての諸条件を備えている。ただし、窓を設置し、通有の4本柱を所有することから住居兼用であった可能性を考えている。以下では遺構覆土の採取・洗浄(採取法はP18参照)の結果も含め若干の考察を行ないたい。まず、最も出土量の多い白玉の製作工程についてであるが、須恵町所在の「牛ガ熊遺跡」で工程復元がなされており¹⁾(1~7工程)、これをもとに本遺構での検証を行ないたい。原石は2区床面において3点が近接して出土している。長さ7~8cm、幅3~6cm、厚さ1~3cm程度の小振りなものである。加工痕がないことから産出地での採取品と考えられる(1工程)。同遺跡と同様に2工程の原石打割資料を欠いているが、これは1工程の採取段階で、ある程度の選別がなされたことも想定される。3工程資料としては第19図155(3区床面出土)を挙げることができ、板状品の製作途上と考えられる。4工程資料を欠くが、前工程資料及び未製品及び未製品A(同遺跡では方形チップと呼称)の存在から肯綮し得る工程である。5工程によって未製品Aの採取が行なわれている。なお、計測を実施した未製品B(P27参照)の平均法量から推定すると、3工程資料からは40数個の未製品Aを製作することが可能である。6工程により未製品B、7工程を経て製品が完成する。なお、未製品Bの平均法量は長さ9.17mm、幅7.42mm、厚さ2.75mm、孔径1.56mm、また製品の平均法量は径5.17mm、厚さ2.32mm、孔径1.61mmである。孔径には殆ど差異は認められないが、厚さの比較により類推すると7工程時に周縁を整形研磨すると共に両面の研磨も僅かに行なわれている可能性を有する²⁾。また、0.5mm単位での径の法量散布を調べた結果、4.0~4.5mmは14.5%、順に37.3%、29.1%、14.5%、6.0mm以上は5%に満たず、4mm~6mm未満に大半が集中する。このように法量の一定化が図られていることや、周縁の研磨痕が牛ガ熊遺跡出土例と同様に側面の縱方向に一様に認められることから一括した研磨を行なっているものと考えられる。また、下表は区・層別の白玉(未)製品及び滑石屑の出土数量を示したものである(表には覆土採取を実施した3・4層のみの結果を掲載しており、本文中で記述した1・2層出土分を含む数量とは異なる)。いずれも1区での出土量が相対的に少量であることから、作業空間を考慮した場合、2・3・4区を主体とする利用状況が想定でき、これは作業台、原石、3工程資料の出土位置からも傍証される。細部にわたる空間利用の復元は困難であるが、多数の未製品B欠損品(6工程穿孔時の失敗か)が出土した2区は平坦な自然石(作業台)を用いた穿孔作業場としての可能性をもつ。なお、作業用土坑と考えられるP5の覆土も採取・洗浄したが、(未)製品、滑石屑は予想外に少量で、貯水用として機能していたのであろうか。

他の滑石製品の製作工程、製品の流通、他遺跡群との時間的・空間的比較等の検討不足な点が多く、不十分な結果となった。以後の課題として再考を加えたい。

白玉未製品A					白玉未製品B					白玉製品					屑								
区	1	2	3	4	計	区	1	2	3	4	計	区	1	2	3	4	計	区	1	2	3	4	計
3	7	18	8	9	42	3	19	104	75	28	186	3	20	24	29	17	90	3	61.4	234.4	280.1	191.7	757.6
4	6	8	15	14	43	4	5	34	48	22	109	4	2	4	46	11	63	4	76.5	105.6	188.3	101.7	472.1
計	13	26	23	23	85	計	24	138	85	50	295	計	22	28	75	28	153	計	137.9	330.0	465.4	230.4	1229.7
	(単位:個)						(単位:個)						(単位:個)					(単位: g)					
	()はうち欠損品						()はうち欠損品						()はうち欠損品					()はうち欠損品					

第1表 滑石出土位置及び数量相関表

【註】 1)中間研志編「牛ガ熊遺跡」(須恵町文化財調査報告書第6集)須恵町教育委員会1993

2)西田大輔編「夜臼・三代地区遺跡群」第5分冊(新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集)新宮町教育委員会1995でも同様の指摘がある。

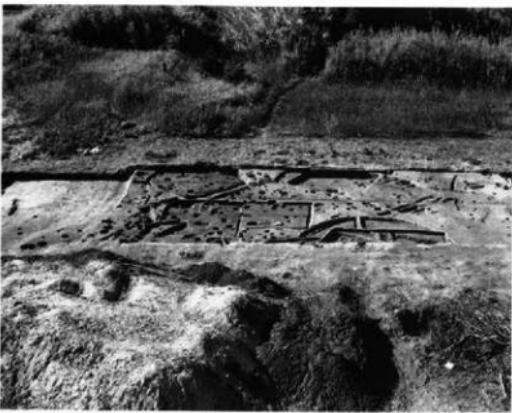
図 版



作業風景



(1) 第2次調査区全景
(北から)



(2) 第2次調査区中央部分 (東から)



(3) 第3次調査区全景 (南から)



(4) 第3次調査調査区南半（西から）



(5) 第3次調査区東側全景（北から）



(6) 旧石器時代調査区全景（南から）



(7) グリッド出土状況



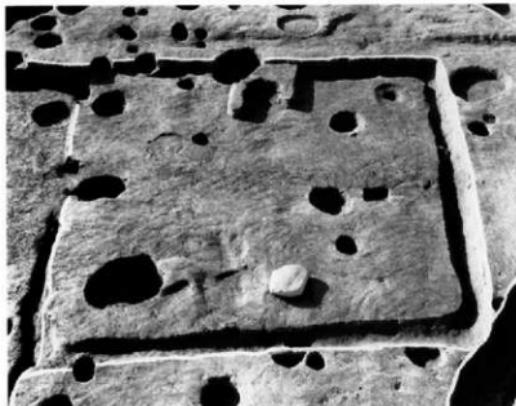
(8) SC0001竪（東から）



(9) SC0001竪（東から）



(10) SC0001滑石出土状況（東から）



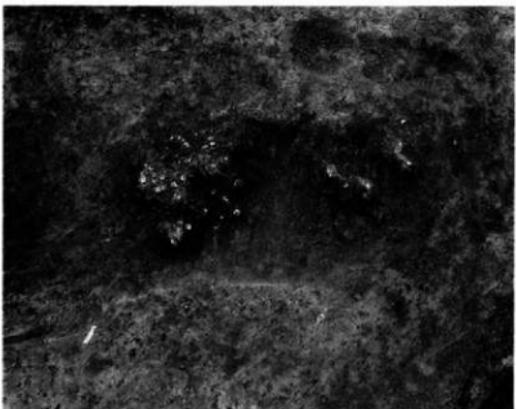
(11) SC0002（東から）



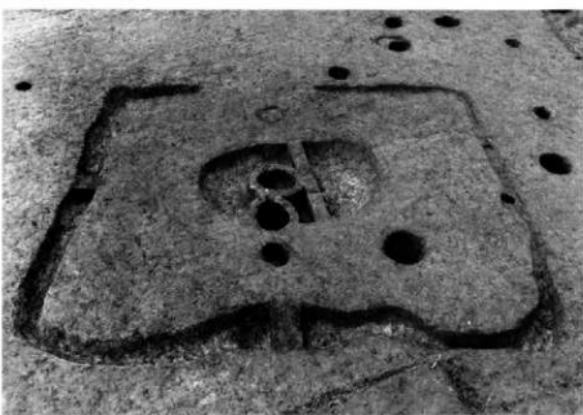
(12) SC0004・0012・0075・1005
(東から)



(13) SC0004墓（東から）



(14) SC0075滑石白玉出土状況



(15) SC0005（東から）



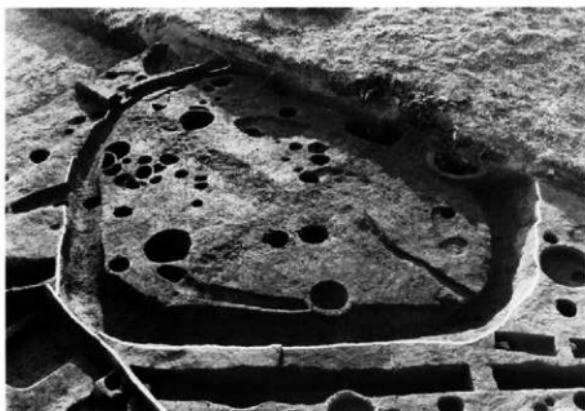
(16) SC0006 (南東から)



(17) SC0007 (南東から)



(18) SC0013 (東から)



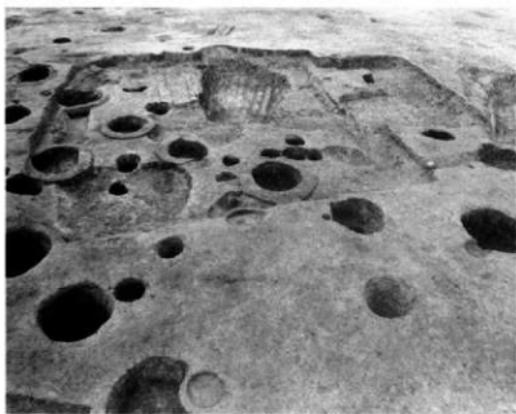
(19) SC0014 (北東から)



(20) SC1005 (北から)



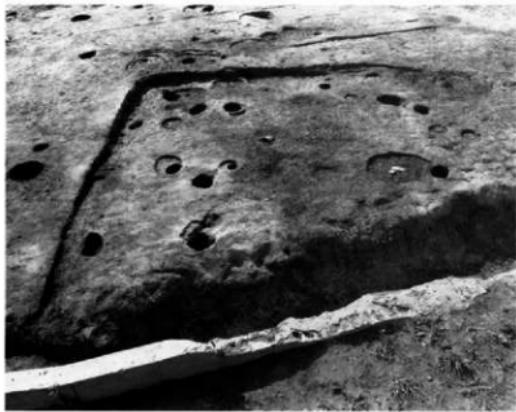
(21) SC1005遮候断面



(22) SC1007・1008 (東から)



(23) SC1008 鋏出土状況



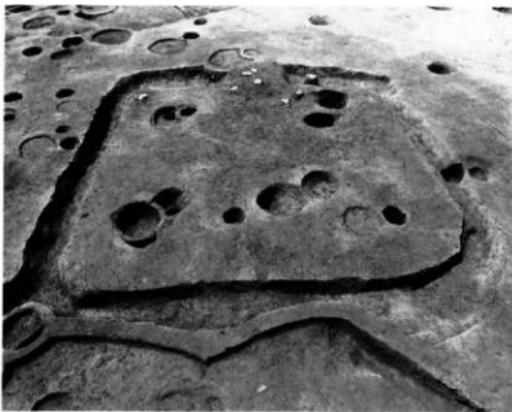
(24) SC1009 (東から)



(25) SC1011 (東から)



(26) SC1012 (北から)



(27) SC1013 (東から)



(28) SC1015 (東から)



(29) SC1018 (東から)



(30) SC1019 (南から)



(31) SC1036 (北から)



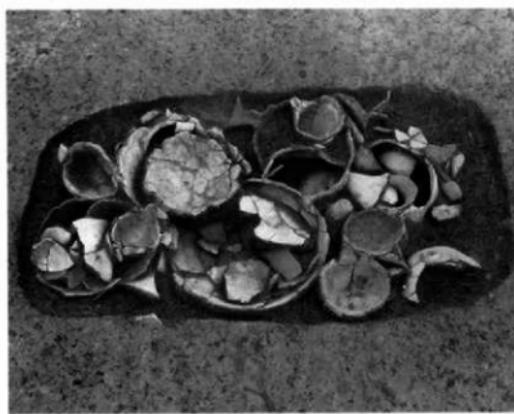
(32) SC1036完掘後 (東から)



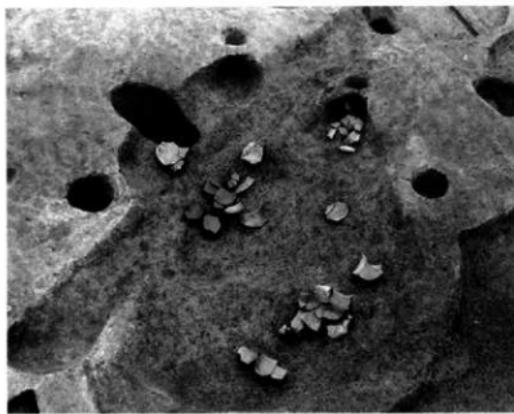
(33) SB1052 (東から)



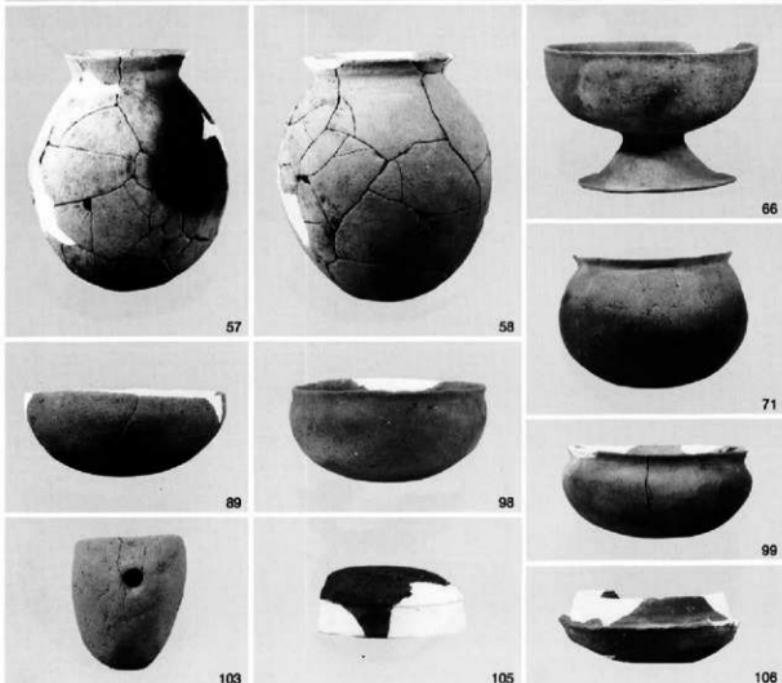
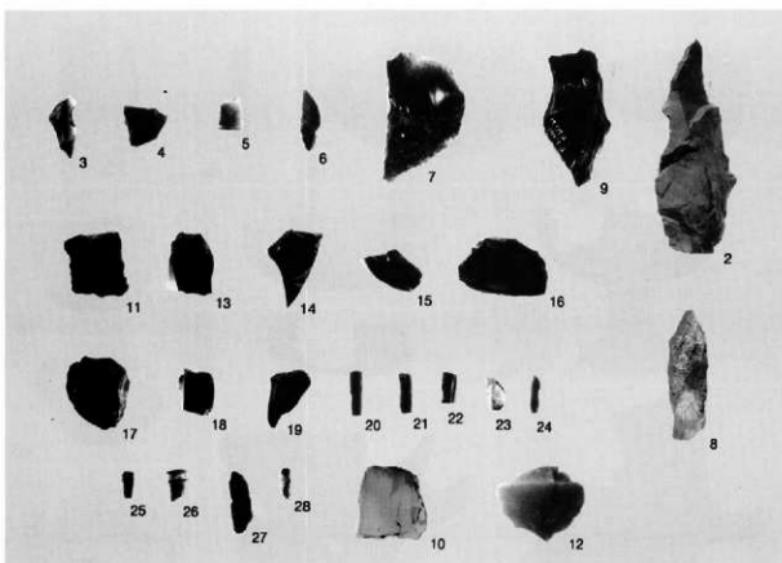
(34) SB1060 (西から)



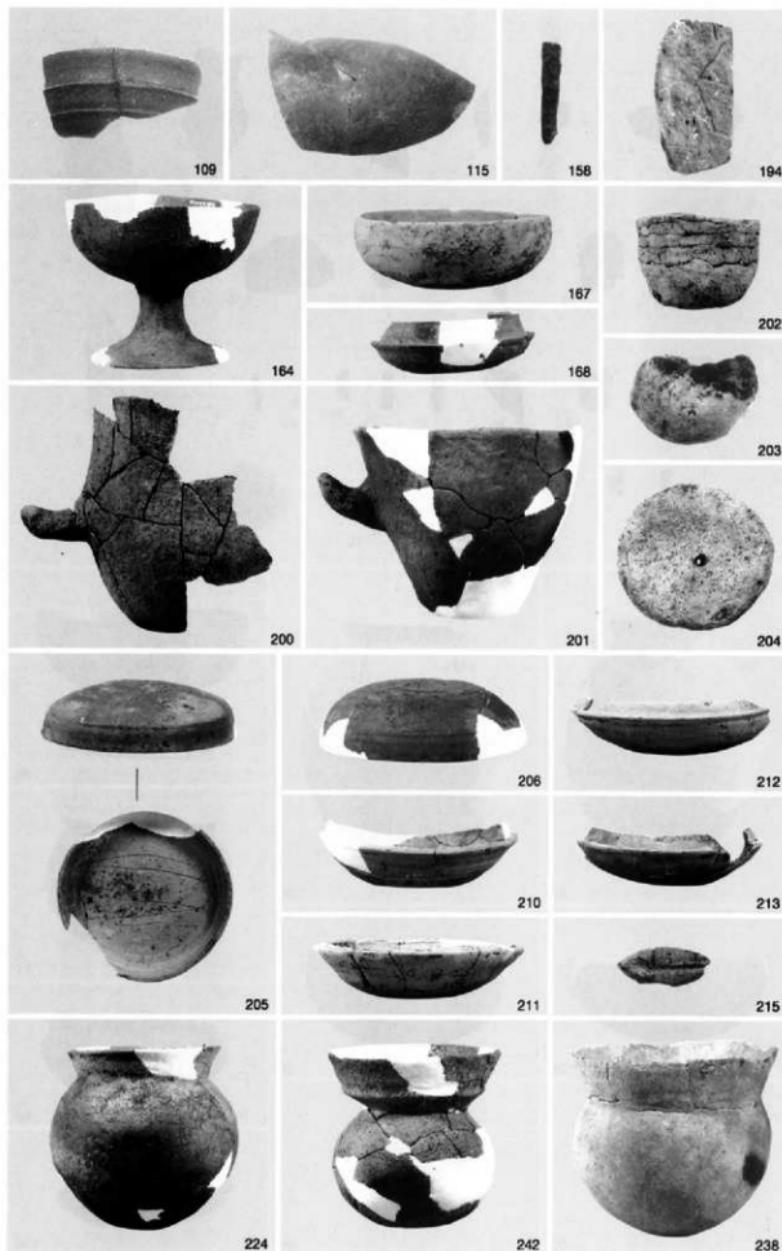
(35) SK1029 (北から)



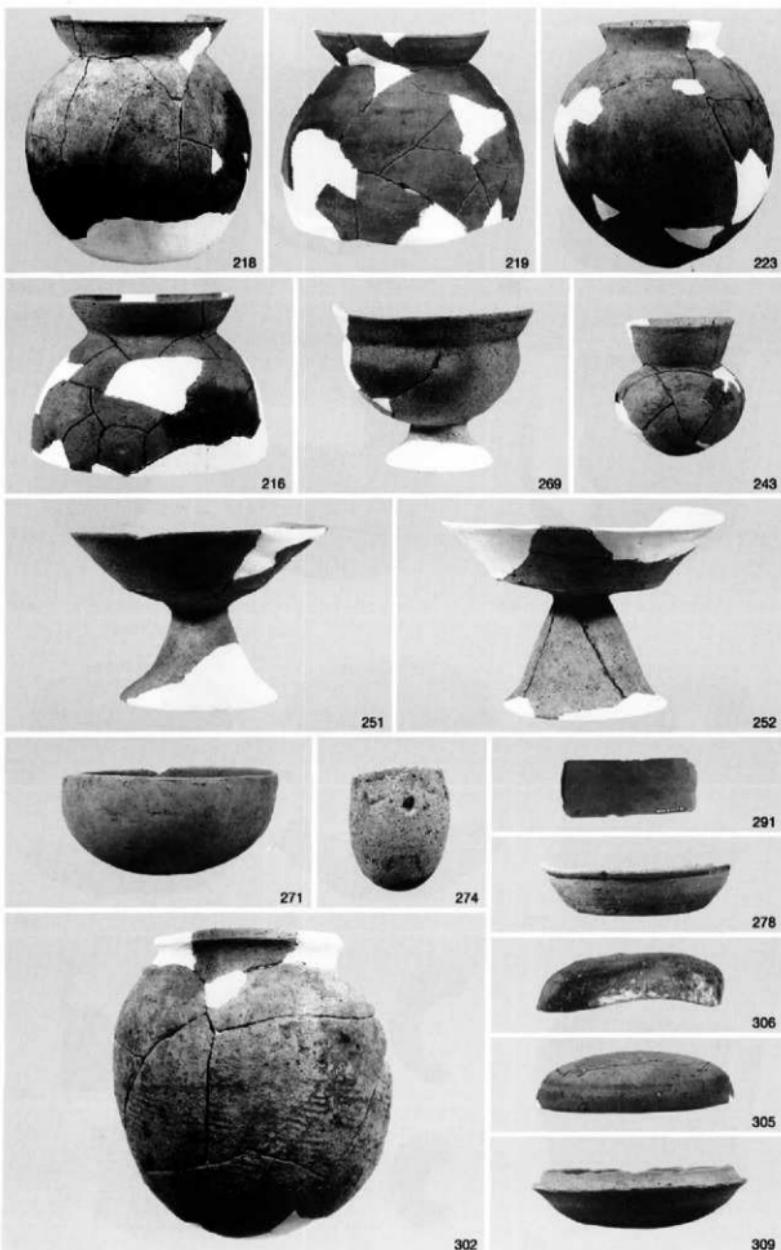
(36) SK1062 (西から)



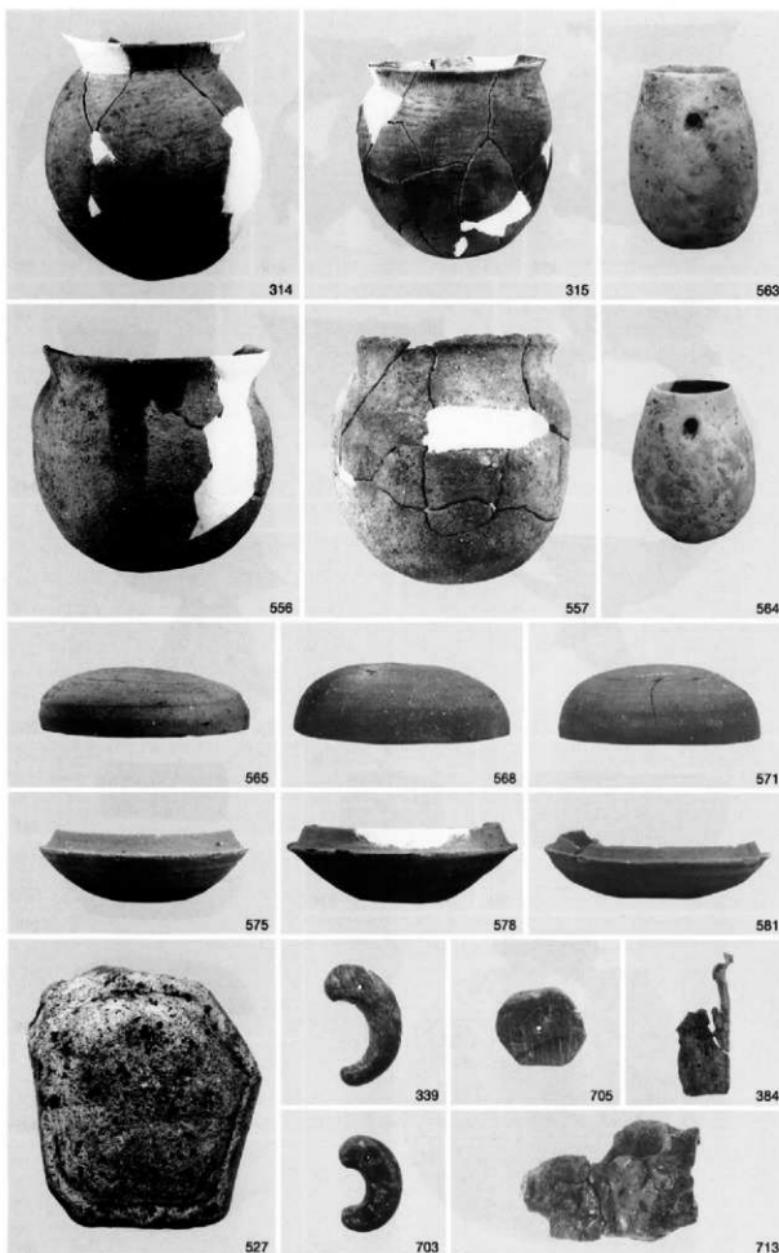
(37) 出土遺物 I



(38) 出土遺物 II



(39) 出土遺物Ⅲ



(40) 出土遺物IV

三苦遺跡群 2

—第2次・3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第477集

1996年（平成8年）3月29日

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 川島弘文社

